
Requiem ~ pray for the souls of the dead ~

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Requiem pray for the souls of
the dead

【Nコード】

N9414E

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

死神と人間の存在を行き来する少年の物語。 昼は普通の高校生、夜は死神として死者の魂を刈り取る生活を送る主人公、 皇磨御剣はふとしたことで親しいものの死を予見する。 彼は、人として死神としてどのような答えを出すのか。

第一部

Requiem pray for the souls
of the dead

プロローグ

遠い日の記憶。さほど昔でもなく、最近でもない日の記憶。途絶えた記憶。なくしてしまった思い出。

ただ、暗くて冷たい感触だけ覚えていた。

『闇に見初められた者よ……。どうかそなたの意志の中に我を住まわせてはくれまいか……。その代わり、そなたに救いを与えよう。』

虚ろな意識の中、確かに俺は、死にゆく者だったはずだ。だけど……。声が聞こえた。ひどくおぼろげで儂い。しかし、それは夢ではなかった。

『再び世に生きる希望を与えよう。その代わりに、我が闇の運命を背負ってくはれまいか……。』

そうして俺は目を覚ました。俺は何も変わらなかった。すべては元通りとなったはずだった。心の中に住み着いた何かを除いては……。

その正体を知るのそれはそれから数週間のことになる。つらい日の思い出がその時まさに産声を上げたのだ。しかし、それもまた新たな思い出の一つとなった。

それは、ひとえに罪悪感に思い悩みながらも、ただそれを享受するしかない自分の無力さに絶望するような思い出にすぎなかったが……。

それも俺の思い出の一つだったのだ。

人は止まることなく変わってゆく、俺も変わっていく。だけど、

一つだけ変わらないものがある。それに気がつくには多くの時間が
必要だった。

思い出そう。遠きあの日のことを。今の俺には気の遠くなるほど
の時間が用意されている。

思い出そう。俺が最も幸せだったあのころを。

幸せな記憶・・・真の思い出を・・・。流されるだけではない、
自分の足で歩いていくことを学んだあのころを・・・。

第一部

眠れない夜 (sleepless night)

(1)

・・・朝か・・・？

皇曆御剣（じゅうめいけん）は窓から差し込む日の光をまぶしそうに見上げた。カー
テンの隙間からは朝を告げる木漏れ日に混じって鳥の鳴く声が子守
歌のように聞こえてくる。

「・・・寒いな・・・。」

彼は、そう、ひと言呟くと、再び布団をひつつかんで頭までかぶ
ってしまった。

ほどよく体を圧迫する布団が心地よい。

「何だってこんな日に学校なんて・・・。」

彼は更にうずくまるうとして身を縮み込めようとする、腹の辺
りにフサフサとしたものがあることに気がついた。

彼は、それを捕まえる。それは、生き物のように身をよじってそ
の手から逃れようとジタバタしていた。にゃーにゃーと機嫌の悪そ
うな声を上げながら。

「なあ、お前もそう思わないか……。ミカエル……。」
布団から取り出したのは、黒猫のミカエルだ。あまりの寒さに耐えきれず、布団の中に潜り込んできたのだろう。

「そうだよな……。こんな日はゆっくり布団の中で……。」
再び微睡み夢の世界へ……。今度は、さつきみたくないやな夢も見ないだろう……。どんな夢を見たのかはすっかり忘れてが……。

「お兄ちゃん！起きてよー！朝ご飯できてるよー！」
そんな彼を一気に現実の世界に引き戻すほどの元気な声が響いた。しかも、ご丁寧^{ごていねい}にドアをたたき壊すつもりでもあるのかと思つほどのノック音と共に。

「早くうー。こないだも遅刻して先生に怒られたっていつてたじゃない！学校ー。」

妹よ……。そこまですたらいいかげん拷問になるぞ……。

彼は、耳を両手で塞いだ。しばらくすればこの無法者もあきらめ、再び安息が戻ってくるだろう。それまで耐え切れれば……。

しかし、ドアをたたく音は、弱まるどころか、逆に強くなっていく一方だった。その音は振動となり、彼の頭を揺さぶるようだった。次第にそれは痛みとなつて彼の頭を責め立てていく。

「うるせー！」

彼は、妹……。皇磨美雪こうまみゆきの不必要なまでの元気な声に負けないほどの声を張り上げると、布団を蹴り飛ばしながら起きあがった。

その布団と共に黒い毛玉のようなものが天井に舞い上がったことは、いうまでもない。

「何よ！人が起こしてあげてるつてのに！」
ボタン！と、ドアが勢いよく開かれ美雪が姿を現した。

形の整った卵形の顔に背を覆い隠すほどの長い黒髪が揺れる。それが怒りに頬を赤く染め上げているのは確かに可愛いといえなくもない。

しかし、そんなことは今はどうでもいい！

「別に頼んじやいねえよ。」

御剣は憤然と立ち上がると憎まれ口を叩いた。足下でなぜか爪を立てて怒っている黒いものを足でけっ飛ばしながら……。

「美雪はお母さんから頼まれてるんだもん！」

美雪は口をとがらせた。

「はっ！だからどうした？第一お袋がいつ頼んだってんだ？俺は聞いちゃいねえぜ……。それに……。イツテエー！」

美雪は驚いて御剣の足元を見た。そこには、なぜか毛を逆立てて御剣にかみついているミカエルの姿が映った。

「このバカネコ！」

ただでさえ寒い朝に無理矢理起こされて腹を立てていた御剣の怒りが頂点に達した。彼は反対の足でミカエルを思いつき蹴り上げた。

ミカエルは、「にやーん」と、情けない声を上げながら、勢い余って窓の外に放り出され、屋根をごろごろ転がっていった。

「あ、ああああ！ミーちゃん！」

美雪はあわてて窓から身を乗り出した。しかし、既に時遅し、ミカエルは、もうすでに下に落ちてしまったようだ。

「ひどいよ……。お兄ちゃん。」

美雪は恨みがましく御剣をにらんだ。

「あいつは、化け猫だからな。不死身なんだ。大丈夫だよ。」

それに対して彼は平然としていた。

「そういう問題じゃないよおー。」

御剣は、その話題に飽きたのか短いため息を吐くと、

「さあ。着替えるからとつと出て行け。それとも、着替えがみたいか？」

美雪は、フンとそっぽを向くと、ドアを乱暴に閉めながら部屋を出て行った。

「お兄ちゃんのバーカ！」

などと置きみやげを残して……。

あとで泣かしちやる……。

御剣は密かに毒づいた。

目が覚めてしまった以上もうやることは決まってしまった。結局美雪の思惑通りになってしまったのが気に入らないと思いつつ、彼は手早くパジャマを脱いで制服に着替え、乱れがちな髪を適当に櫛を通して整える。鏡などないが別にそんなことは気にすることではない。そして、鞆をつかみ部屋を出ようとして……ふと、踏みとどまった。

「おい、行くぞ……。」

そう一声かけると、いつの間に登ってきていたのか、黒猫のミカエルがとこと御剣の後に続き部屋を出た。

階段を下りてリビングにはいると、すでに美雪が朝食のパンをムシヤムシヤとかぶりついているところだった。

「あ、おにひひちゃん・・ほはよふ……。(あ、お兄ちゃん。おはよう)」

口の端にジャムをつけながら美雪は兄に挨拶したが、口にパンを含みながらだつたためあまりにも舌足らずだった。

「口にものを詰めながらしゃべるな。」

御剣はあきれながらも美雪の横に座ると、自分の分のトーストにバターを塗りたくり、ホットミルクをマグカップに注ぎ、砂糖を入れた。

不意に、リビングの扉が開く音が響いた。

「おはよう……ふぁーあ。」

二人にとってはおなじみの声に振り向くと、いま起きたばかりなのか眠たそうに目をこすりながら二人の母親……皇磨美沙があくび混じりにリビングに姿を現した。

「おはよう……お母さん。」

「おはよう……。」

二人は、呆れ混じりに適当な挨拶を交わすと、トーストを口に運んだ。

「ずいぶんゆっくり食べてるのね……。今日はいいの？」

朝は、ブラックコーヒーを飲むのが日課の美沙はコーヒーメーカーからコーヒーをカップに注ぐと、一口飲んだ。

二人は、ふと時計を見た。いまは、8:10……。ホームルーム開始が8:25で、学校まで歩いて20分ぐらいかかるから……。

御剣と美雪は、がたと音を立てながら殆ど同時に立ち上がった。

「やべ！遅刻するじゃねえか！」

「お兄ちゃんがはやく起きないから！」

「うるせえな。だったら、もつとはやく起こせ。」

「お兄ちゃん、起きなかつたじゃない。美雪はちゃんと起こしたもん！悪いのはお兄ちゃんですよ！！！」

「なんだと!？」

「なによ!」

いつもの兄妹喧嘩が始まりそうな勢いだったが、今はそうもしてもらえないことは二人とも分かっていた。

「あなた達。さっさとしなさい。本当に遅刻するわよ。」

正直なところ、全力疾走しない限り遅刻は決定だ。いや、全力疾走したところで、間に合うかも微妙なところで……。

二人とも遅刻ぐらいどうということはない、などと言い切れるような性格ではなかった。

「行つてきます!」

二人の声が重なり、先を争うように玄関を出て行った。

美沙は、やれやれとため息を吐くと、余った口の中にコーヒーを注ぎ込んだ。

「やっぱり、朝はこれに限るわねえ。」

二人の喧嘩もいい目覚ましになるわね……。と心の中で細くほえんで、カラになったマグカップに再びコーヒーを注いだ。

・・・やばかった。はつきり言ってぎりぎりセーフだった。息を切らしつつ、教室に入った瞬間、始業ベルが学校中に鳴り響きホームルーム開始という運びだったのだ。

美雪は、一つ下の階だからまあ、大丈夫だろう。

しかし、よもやこんな冬の日に汗をかくとは思わなかった。

そのおかげで、一限目はダウンして二限目には微妙に差し込む暖かな光にうとうととしてしまい、三限目はほどよい空腹に襲われ。ようやく落ち着いたのは昼休みに入ってからだった。

「おーい。御剣い・・・今日はどうしたんや？・・・」

この関西弁を操るのは御剣の友人（悪友ともいう）の神崎塔矢だ。相変わらずニヤニヤした笑みを浮かべながら彼に近づいてきた。彼の手にはしっかりと弁当が握られている。

朝起きて自分でつくってるっていうんだから、人は見かけによらないというものだ。

「うるせーな。いろいろあったんだよ。」

気がついたら、弁当を忘れてきていた御剣は、机にうつぶせになって睨みつけた。催促するような腹の音が妙に恨めしい。

「いろいろつてなに？私、興味あるなあ。」

突如彼の背後から声があった。普通なら驚くところだが、もういい加減この登場の仕方には慣れた。

「なんだ。優紀か・・・。何でもねえよ。」

彼の幼なじみの緑野優紀みどりの ゆうきはイタズラっぽい笑みを浮かべると、

「美雪ちゃんと喧嘩でもした？」

御剣は目をそらせた。

「してねえよ。」

と、そのぶつきらばつな物言いはいつまでたっても変わることがない。

「だめだよ。美雪ちゃんを怒らせたら。ご飯、食べさせてもらえなくなっちゃうよ。」

「う……。」

それを言われると彼も辛い。料理長を怒らせることは、そのまま死につながることもあるからだ。

「うふふふ……。」

優紀は勝ち誇ったかのような笑みを浮かべた。

優紀と皇曆家は親の世代からの知り合いで、当然、御剣も優紀もお互いをよく知っている。

だから、優紀は、御剣がこうは言っても美雪のことにはめっぽう弱いということはよく知っているのだ。

「お兄ちゃん！」

突然、教室の入り口から元気な声が響いた。それが御剣の妹、美雪だということはクラスの誰でも知っている。

美雪は知っている場所のように勝手に教室に入り込むと御剣の席にやってきた。

「美雪ちゃん。どうしたの？」

優紀は笑顔で彼女を迎えた。御剣の対する態度の違いに不満を覚える御剣だったが、いまに始まったことでもない。放っておこう。

「あ、優紀お姉ちゃん。こんにちは。今日は、お兄ちゃんにお弁当を届けに来たの。」

お使いを言い渡された子供のような幼い笑顔にファンは多いらしいが、兄としてはどうも聞き逃していられないような気もしないでもない。

御剣は、複雑な顔をしながら美雪の手には自分のともう一つ、美雪自身の弁当箱も抱えられていることに気がついた。

「よう。みゆっち、よう来たな。まあ。座れや。」

それに気がついたのか。塔矢は側にあつたイスを美雪に譲りながら、自分も席を探して座った。

「結局。俺のところで食うことになるのかよ。」

見ると、優紀も御剣の机に自分の小さな弁当を広げていた。いつものまに椅子を持ってきていたのだろうか？

「やれやれ……。ちゃっかりしてら……。」

とりあえず無言で、というより、わざと不機嫌な態度で、御剣は弁当を受け取った。

美雪はいつも二人分の弁当をつくっているので彼女が忘れるわけではない。今朝は、わたすチャンスがなかったただけだ。

その要因が御剣自身なので、彼は何も言えない。

「なあ。早う食おうや。腹が減って死にそうや。」

塔矢は、これぞ学校唯一の楽しみ、といわんばかりの満天の笑みを浮かべて手を合わせている。・・・律儀なやつ。御剣は苦笑を浮かべた。

「お前はいつでも腹減ってんだもんな……。」

「朝練があるとな。」

塔矢はニツと笑った。

「良くやるぜ。たかがスポーツにあれだけがんばれる奴の気が知れねえ。」

「お前もやればええやんか。結構おもしろいもんやで？やってみたらな。」

「遠慮しとく。」

塔矢は陸上部に所属している短距離の選手だ。今日も早朝から練習をしていたらしい。彼のがんばりはクラスでも結構有名で、次の大会が期待されているアスリートなのだ。

「次の大会はどう？うまくいきそう？」

二人の会話を聞いていた優紀は興味津々に聞いてきた。

「せやな。まあ、ぼちぼちやうか？」

ぼちぼち……と彼が言うときは自信ありということに他ならぬい。

「そうか。まあ、がんばれよ。」

「言われんでもな！」

そんな他愛もない会話を楽しみつつも彼らは昼食を終えた。

「ん……？」

御剣の耳に鈴の音が響く。

御剣はふと、窓から校庭の隅を見た。何か黒い影がうごめいたよ
うな。何かの気配が感じ取られたような気がした。ふつうなら見逃
してしまいそうなかすかなものだったが、御剣には確かに感じられ
たのだ。

「あいつ……。来てるのか？」

誰の耳にも入らないような小声で彼は呟いた。

「どうしたの？御剣君。」

優紀がお茶を飲みながら御剣を見た。湯気と共に甘い香りが漂っ
てくる。彼女のお気に入りである林檎の紅茶だろう。

「ん？いや。別に……。ちょっと用事を思い出した。」

理由としては陳腐なものだったが彼は後ろを顧みずにさっさと席
を立ち、教室を出ようとした。

「あっ？お兄ちゃん……。どうしたの……。？……。いつちゃ
った。」

美雪が振り向くが、御剣は既に廊下に出て行ってしまっていた。

「お兄ちゃん……。」

美雪は置き去りにされた猫のような表情を浮かべる。

「なんか、あいつ、たまーにミスティアスやんな。」

塔矢はのんきにジュースを飲みながら弁当をたたんだ。実のこ
ろ、こういうことはまれではないのだ。

「何か秘密を持つてるって感じよね。」

優紀はわざと意味深な笑みを浮かべた。

「なんやろな？秘密って。」

塔矢は別段気にもせず会話続ける。

「美雪ちゃんは何か知らないの？」

「……。」

しかし、美雪はどういうわけか御剣の出て行ったドアを見つめて
いた。

「ん……。？どうしたんや？」

さすがの塔矢もそんな彼女の雰囲気不審に思い、椅子にのけぞりながら視線を美雪にほうに泳がせた。

「……え？なに……？」

美雪は驚いた様子で二人を見た。

「せやから、御剣の秘密つちゅうんは何なんやろなって話や。みゆつちは何か知つとんのか？」

「……秘密……？知ってると思うけど……いえないかも……」

美雪は意味深なことを口走った。優紀のわざとらしい笑みと違いそれからは明らかな重みを持っていた。

「まあ。秘密なんて誰でも持ってるもんよね。」

「ん？なんか含みのある言い方やな？優紀にも何か……。あ、いや、詮索するのも野暮やな。まあ、この話題はもうしまいや。ええか？」

二人ともうなずいた。

「それじゃあ、美雪はもう帰るね。優紀お姉ちゃん。神崎先輩。また今度。」

二人分の弁当箱を包み込むと美雪は席を立った。

「おお。またこいや。」

「それじゃ。またね。」

手を振る二人を後ろに見ながら美雪は教室を出て行った。扉が閉められる音が響く。

「美雪ちゃんにも何か人には言えないことがあるのかしら？」

優紀は塔矢の表情を伺った。

「ん？まあ。せやな。その話題はもうやめよや。」

塔矢はいかにも興味を失ったようなそぶりを見せると、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「そうね……。」

優紀は口直しの紅茶を一口飲んだ。甘い香りとほどよい渋みが体の中に染み渡るようだった。

教室を抜け出た御剣は廊下を早足で抜け、階段を下りて校庭に出た。そして、周りを見回しながら校庭の一角へと身を寄せる。

「いるんだろ？ここには誰もいないぜ。」

御剣は一握の茂みに向かって声をかける。

校庭の一角の薄暗い場所。ふだん、何者も訪れることのない闇が昼間であるのに漂っていた。

おそらく、そう感じられるのはここに太陽の光が差し込んでいないことだけではないだろう。それはそこに、いたのだ。

「ふむ。そのようじゃな。」

闇の中から少し低めの声が出たと思うと、闇から産み落とされるように、一匹の黒猫が姿を見せた。それは他でもない御剣の飼っている猫、ミカエルだ。

それ以外に人の気配はない。

では、先ほどの声は誰が発したものだっただろうか。

「それで。今度は誰だ？」

それでもかまわず御剣は問いかけた。やはり、周りには人の気配がない。彼は、まるで、ミカエルと、猫と会話をしているようにも見える。

「この間のばあさんだ。」

先ほどと同じ声彼の足下から響く。

その声はどういうわけかミカエルの口から発せられたかのように見える。

いや、むしろそれが真実なのだ。

それは、誰も知らないことであり、誰にも知られてはならないことでもあった。だから、ミカエルは普段、ふつつの猫として振る舞うようにしている。

それに、誰も信じないだろう。この世に人語を解する猫がいるこ

となど。いや、正確にはそれは猫ではなく、別の存在なのだ。ただ、人の目にはネコの姿に映るだけで……。

「そうか。とうとう逝ってしまうのか。」

御剣は思い起こした。それは1週間前の夜のことだった。その夜、彼は一人の年老いた老婆の枕元にたっていた。彼のしたこと、彼はそこで老婆に死の告知をしたのだった。

彼には誰にも言えないような秘密があるのだ。

それは、どうしてもしなければならぬこと。そのため、彼は人の死に深く関わることを余儀なくされてしまった。

彼は、深くため息をついた。いつからだったか。自分がこんなことをし始めたのは。

すでに7年以上がたっている。それを受け入れた日、自分の中のすべてが変わってしまった。

認めたくなかった。しかし、認めざるをえなかった。

あのとミカエルが彼のもとに現れて、言ったのだ。

それを、彼は今も鮮明に覚えている。

『死神に見初められた者よ。私はそなたの行く末を見守るためにここに存在している。』

最初に人の魂を天に返したときは途方にもない罪悪感に襲われ、しばらくまともな食事をすることはできなかった。

どうしても死者の顔が、そして声が脳裏に浮かび、そして響く。

もつと生きていたかった、死にたくない、なぜ自分が……、この死神め……、残された家族はどうなるのだ、という言葉が。それは、死者の心からの叫び声だった。

何度これは夢だと思いたかったことか。目が覚めればそこには普通の生活が待っているのだと信じたかった。それが夢だったらどれだけ気が楽だっただろうか。

しかし、確かにそのものはいたのだ。御剣の中に息づいていた。

死にゆく者の魂をその肉体より刈り取り、生きるべき者を死の運命から救う。それを何よりの使命とする存在、”死神”が。

「だけど・・・人が死ぬのはいやなことだな。」

御剣はつぶやいた。死者の魂を天へと返すことに罪悪を感じない時は一度たりともなかった。

「しかし、魂を天に返さなければ、その魂は永遠にこの世を彷徨うだけだ。やがてその魂は、生きている者を憎み、災いをもたらすことになる。」

ミカエルは、呟いた。

いつも聞かされていることだった。

死神は人に死を与えるのが使命なのではない。その実の使命は、大いなる意志によって死を運命づけられた者達の魂を天へと返すだけのことなのだ。

死神の鎌は死に行く魂を肉体から刈り取るだけのもの。

命のつながりを刈り取るものではない。死神には人を殺す力などないのだ。

頭では理解できる。

しかし、人の死に関わることはそんなに簡単なことではないのだ。御剣は再びため息をつく、ゆっくりと起きあがった。

「分かった。今晚・・・するよ。」

ミカエルは、うなずくと再び闇の中に消えていく。

「ふむ。言い忘れておったが、最近、悪夢の動きが活発になってきているようじゃ。注意するがいい。」

「???」

御剣はきびすを返そうとした足を戻した。

しかし、そこにミカエルの気配なかった。

「悪夢？なんだ？それは・・・。おい、ミカエル。」

彼は周りを見回した。しかし、再びミカエルが現われることはなかった。

「悪夢だって？・・・ミカエル・・・お前は何を知っているんだ。」

夕日の光が街を紅に染め、昼の終わりを予感させる冷めた風が吹く道。

美雪と御剣は学校から帰路についていた。二つの長い影が並んで歩く。街の喧噪からはほど遠い、穏やかな静けさが漂っていた。

「お兄ちゃん。元気ないね？どうしたの？」

美雪は心配そうな表情を浮かべながら、兄・御剣の顔をのぞき込んだ。

当然ながら御剣は、幼い頃からずっと美雪と同じ学校に通っている。進路が分かれる高校のときでさえも、美雪は彼を追うようにして同じ学校に入学したのだ。

しかも、二人とも特に部活をしているわけではないから、よっぽど予定が合わないことがない限り一緒に登校して、一緒に下校している。

たまに彼らはそろそろ兄妹離れをしたらどうだといわれるが、二人にとってはいつも一緒にいることがあまりにも自然になりすぎているのだ。

この日も当然一緒に肩を並べて家に向かっていたのだが、実のところしよっちゆう喧嘩をしている二人に間に会話がなことは珍しい。

（そりゃ、元気なくすよな）

御剣は、心の中で苦笑を浮かべると、くしゃっとした笑みを美雪に向けてと。

「別に何でもねえよ。腹減ったなって思ったただけだ。」

別に嘘をついているわけではない。空腹を感じているのは事実だし、御剣は空腹になると機嫌が悪くなるというのも本当だ。

ただ、今の憂鬱がそれだけが理由ではないということ。

「なーんだ。今日は、昨日買った残りがあから。うーんと。コンソメのスープとご飯と、あと野菜炒めがあればいいよね。」

美沙は外に働きに出ているので家事一般のほとんどは美雪が担当

しているのだ。もちろん料理も彼女が担当している。

「肉はねえのか？」

「お肉？どうだろう？・・・なかつたかなあ？昨日使っちゃったし・・・あ、だったら買っていこうよ。」

「そうだな。めんどくさいがしょうがないか。肉のためだ。」

いつも行く角の肉屋に行くには、今晚行く家の前を通る。彼は、死神の仕事の前には必ず死にゆくものとその家を一度見ることにしているのだ。

これから死に行くものが、今何をしているのか。それを少しでも知れば、ほんの気休めかもしれないが、少しは罪悪感から逃れられるような気がするのだ。

現実逃避をするようだが、すべてを生で受け入れるには辛すぎる。彼は、たとえ、死神に魂を明け渡したといえ、まだ人間としての心を捨て切れてはないのだ。

しばらく行くと一軒の古い家が姿を現した。

「どうしたの？」

御剣が何かとその家の中を見ようとしているのに美雪は気がついた。

「いや。別に・・・。あのおばあさん。元気そうだなって思ったから。」

美雪は、背伸びをしてその家をのぞき込んだ。さして広くない庭で一人の老婆が花の手入れをしている。

夕日が差し込み、世界が赤く染まっている今、その花の色を伺うことはできないが。おそらく、純粹で美しい色をしているのだろう。

「本当ね。まだまだ長生きしそう？」

「どうかな・・・。」

本当は、今晚死ぬんだけどね・・・。という言葉を読み込むと、御剣は歩調を強めた。

「あ。待ってよー。お兄ちゃんってば。」

美雪は、夕日に向かってかけた。御剣の長い影をおうように

して。

(はたして俺は、今、幸せなんだろうか?)

赤々とまばゆい光を見上げながら御剣はそんなことを考えていた。

黄昏時も過ぎ去り、夜の闇が世界を覆い、月と星の僅かな光だけが、大地に降り注ぐ。まさに神聖な夜だった。

御剣は、夜の静寂しじくを肌を感じながら、ベッドからゆっくりと立ち上がった。部屋が暗いため、その表情をうかがい知ることはできない。

「時間か……。」

御剣は時計をちらつと見た。3時を越えたぐらいか。御剣は目を閉じると意識を何かに集中し始めた。

しばらくの後、彼はゆっくりとまぶたをあげた。今まで光に満ちあふれていた彼の瞳は、今は深い深い闇が浮かんでは沈んでいく。

まるで、彼の身体から闇が生まれてくるように彼の周りは夜よりも深い闇に飲み込まれていった。

「さて。行こうか。ミカエル。」

月明かりに照らされた彼の顔には、表情がないようにも伺える。

この世にいないような、存在自身が不透明なような。そんな不思議で不気味な雰囲気雰囲気が漂っていた。

「うむ。」

ベッドの脇でうずくまっていた黒い固まりが、すつくと起きあがり、御剣の肩に飛び乗った。

彼は、いつの間にか死を思わせる漆黒のマントで身を包みこんでいた。

彼は死神に自らの存在を明け渡しているのだ。

「手早くすませよう。」

耳を澄ませると、隣の部屋から美雪の穏やかな寝息が聞こえてく

る。

「そうだな。」

ミカエルの声が御剣の耳元でささやかれる。

この二者の会話が人間に聞き取られることはない。人は、自分の存在を肯定するために、彼ら、死神の存在を感じ取ることはできない・・・と言うより、無意識的に彼らを意識のうちに入れることを拒否しているのだ。

死者は、より死神に近い存在なので、彼らを関知することができない。

古来より、死神は人に死を与えるものだと言われているのはそれが故なのだ。しかし、死神が直接人に死を与えることはできない。

繰り返そう。

死神は、あくまで、死にゆくものの魂をその肉体から刈り取り、生きるべきものを死の運命から救うのが、何か大きな意志によって与えられた使命なのだ。

「それじゃあ。さっさと行くか・・・。」

御剣は、屋根にでた。窓から外に出たのではない。そう、まさに壁をすり抜けたのだ。死神にとって、現実的なものは一切用をなさない。

闇に沈む街の空を二人は飛び回る。飛んではまた違う家の屋根に降り、そしてまた空にその身を躍らせる。

もし、彼らの姿を感じ取れるものがいたらこう思うだろう。「まるで、夜の街を舞台にした壮大な物語が繰り返り広げられているようだ。」と。

二人は、街を飛び回り、そして、音もなくその場所に降り立った。御剣が夕方美雪とともに通った場所。夜になってもその雰囲気はまったく変わらない穏やかな場所。

「・・・・・・・・。」

御剣は月を仰ぎ見た。星々の輝きの中にいて、天と闇を支配する神々しきもの。古来の人間が、それを神とたとえたのも分かる気が

した。

「月は常に夜を見守ってきた。それは、死神も同じことだ。」
御剣の肩の上でミカエルはそうつぶやいた。

「月……。月読の神か……。彼も黄泉の国の支配者だっけな。」
御剣もつぶやいた。

「黄泉の国などありはしない……。人が死ねばただ天に帰るだけだ。死後の世界など、思い浮かべるだけ無駄なこと……。」
ミカエルは何度となくそう言った。

彼のいうように死後の世界など存在しない。そこにはひとえに静寂の支配する闇が待っているだけだ。そこには何もあるはずもない。だが、人は、それでも死後の世界を夢見ずにはいられないのだ。死後の世界を夢見ることにより、今生きている世界にも希望を見いだす。そんな人間もいるのだから。

「分かつてるよ……。行こうか……。」
御剣はミカエルの背中をなでながら屋根の下、死に行く者の眠る部屋へと意識をやる。

彼らは屋根をすり抜け、部屋の中へ降り立った。
老婆が布団をかぶって寝ている。穏やかな寝顔だった。まるで、これから自分に降りかかる運命を知っているような。何かを悟ったような顔だった。

御剣は少し安心を覚えると、その場に跪いた。
「起きてください。お迎えにあがりました。」

御剣は、声にならないような声でその老婆に話しかけた。
「ああ。この間のお方ですか……。？ようやく、私にもお迎えが来てくださると、心安らかにお待ちしております。」
その声は本当に穏やかだった。

「ええ。存じております。さあ。もうお時間です。」
老婆は起きあがったように見えた。しかし、それは、魂が肉体から出てきただけで、彼女の体は、未だ安らかな寝息を立てていた。
「最後に何か、思い残したことはありませんか？一つだけ、その願い

を伝えることが許されています。」

しかし、老婆は首を振った。

「私には、なんの未練もございません。先立たれたあの人に会えると思うとうれしいぐらいです。さあ、私を涅槃へ運んでください。」
魂の行き着く先に涅槃もなにもない。という言葉は彼は飲み込んだ。

魂はただ天に帰り、再び新たな命としてこの世に降り立つ。ただそれだけ。

だが……。

御剣はその思いを振り払った。

「では、お運びいたします。」

御剣は、マントの裾から巨大な鎌を取り出し、それを老婆の魂と肉体が接しているところにあてがった。

『さようなら……』

彼は、躊躇を振り払い、魂を肉体から刈り取るように鎌を一気にひいた。

一瞬の光の閃きは残滓も残さずに消えていった。

魂が天に帰っていったのだ。

(どうか安らかに……)

御剣は、息を引き取り、限りなく穏やかな顔を浮かべている老婆の亡骸を見つめ切に祈った。

たとえそれが死神としてあるまじきことだとしても、彼は、そう願わずにはいられない。

人の死ぬ瞬間をかいま見るのは、これで何度目だろう。

この儀式を済ませ、次の日に行われる葬儀に参列するものたちの悲しみに満ちた顔を見ると、彼はいつも心を痛めていた。

しかし、彼は、この儀式を済ませた人の葬式を、たとえ遠巻きだといえ、必ず見るようにしている。

そうすることで、自分の中で何かけじめがつけられるような気がするのだ。それもまた、逃避なのかもしれないと心の中で思いなが

ら……。

「終わったな……。戻るぞ。」

ミカエルは、そう言いながら再び御剣の肩によじ登った。

御剣は、そうだな……。とだけ言葉を残し、再び夜の街に身を躍り出す。

「俺は、いつまで続けるんだろう……。いつまで続けていれればいいだろう……。なあ……。ミカエル？」

巡る景色を眺めながら御剣はふと漏らした。

「終わるまでだ。すべてが……。」

ミカエルの答えはあまりにも無慈悲だった。

「これは、俺に課せられた運命なのか……。その運命から逃れられることはできない。だったら。いつ終わると言っただ……。俺が死ぬまでか……？」

御剣はふと思いとどまった。

『死神の俺が”死ぬ”か……。』

月は、西の空に消え、街はさらなる闇の底深く沈んでいく。

それは、一時の街の死だった。

(2)

子供の泣き声……？

俺は虚ろな意識の中、誰かの泣き声を聞いていた。

『なんの夢だ……。？』

俺は意識を泳がせる。気がつくとな俺はモノクロの部屋の中にたまたずんでいることに気がついた。

「もう泣かないの。男の子でしょう？」

聞き覚えのある声……。そうだお袋の声だ。そうか、泣いていたのは俺だったのか……。

「だけど、だけど。お父さんが……。」

思い出した、あの日、親父が死んだ。これは、親父の葬式の日

記憶のようだ。あの日、俺はずっと泣いていて親父の葬式に参列することはなかったはずだ。

お袋が俺の肩にそっと手を置き、幼い俺の目をのぞき込もうとする。しかし、俺はその目を合わせることはなかった。

「美雪も我慢しているんだから。せめてお父さんに、バイバイって言いなさい。」

夢の中の俺は激しく首を振った。

親父が死んで、この世からいなくなってしまうって、本当に悲しかった。

だけどその悲しさはそれだけじゃない。

俺は、その時すでに死神だったのだ。

親父の魂を天に帰したのは紛れもないこの俺だったんだ。親父の最後の言葉、今でも覚えている。親父は最後の最後まで家族のことそして死神となってしまうた俺のことすらも心配していた。

普段は不器用な性格で自分の気持ちを表に出すことのなかった親父が……。

幼い俺はしゃくり泣きをやめなかった。大粒の涙が膝に落ち、大きな水滴を作ったていく。

「僕のせいなんだ。父さんが死んだのは僕のせいなんだ。僕さえいなかったら……。」

お袋もただ俺を見つめているだけだった。お袋にしていえばなぜ俺がこんなにも自分を責め続けていたのか分らずに困惑していたのだろう。

あの時、俺は自分自身のすべてに絶望していたように思えた。あつことをきっかけとして自分自身の中に死神が住み着くようになってしまった。

そうして、初めてその使命を果たした。その使命とは自分自身の親の魂を天へと返すこと。

今ならある程度なら割り切れることもできるだろうが、そのころの俺はその罪悪感に押しつぶされそうになり、いつも俯いていた。

しかし、お前は悪くない。ただおまえは、親父の魂を救ったんだ。お前がそんな悲しい思いをしなかったら、親父はこの世界にとどまり続けることになっていた。それは、死ぬよりも辛いことなんだ。

「あなたのせいじゃないわ……。」

お袋は、幼い俺を抱きしめた。お袋も泣きたかったんだろう。しかし、俺の前で涙を流すわけにはいかなかった。お袋は誰よりも強かった。

俺は、俺の頭に手を置いた。

『お前のせいじゃない。お前はよく頑張った。お前のせいじゃないよ。』

俺は、幼い俺に言っているのではなかったのかもしれない。

ただ、俺がそう思わなくては、今の俺すらも罪悪の海に沈んでしまふような気がして……。

そう……。俺は、繰り返した。

俺が死神である以上、人の死に関わらなくてはならないのは俺の運命なのだ。

もし皆が、俺が死神だつてことを知ったら。はたして俺は、許されるのだろうか……。許されてよいのだろうか……。

夢は消え去り、俺の意識はさらなるまどろみに陥っていく。

深い、深い闇の中へ……。

「お兄ちゃん！朝だよー。」

夢と現実の狭間でまどろんでいた御剣を美雪の元気な声が引き戻した。御剣は、ゆっくりと起きあがって窓の外を見る。

「雨か……。」

朝日は、雲に遮られ、雨音がまるで大地をいたわるかのように降りしきっていた。御剣は、この雨の音が好きだった。昔からこの音を聞くと、まるで子守歌を聴いているようで、なぜか心が落ち着いて

た。

雨が大地のみではなく、自分自身の心さえも癒してくれるようなそんな感じがするような。

「懐かしい夢を見てしまったな。」

御剣は今まで見ていた夢を思い起こした。辛い日々の記憶、すでに記憶から薄れつつあるが、夢に見ることはできる。

そして、夢から覚めれば心に疼きを残して消えてしまっ、そんな夢だった。

彼は胸に手を当ててみる。静かな心臓の鼓動が伝わってくる。しかし、そこには痛みはない。いつしか、疼きすらも消えてしまった。「冷え切っているな……。もう、俺は心まで死神になっちまったってことか。」

「違うな。」

御剣は反射的に振り向いた。

いつの間にか、布団の中に忍び込んでいたミカエルが、彼を見上げていた。

「そういう夢を見る限り、お前の心は冷え切ってなどいない。まだまだ、お前は完全な死神になりきれしていない。」

「完全な死神か……。何の悲しみも感じなくて、しかも、心が痛まないんだったら。そうなた方が幸せかもな。」

「うぬぼれるな。」

ミカエルは言った。

「お前が、人としての肉体を持っている以上、完全な死神になどなれるものか。」

「いつにもなく強い口調で。」

「お兄ちゃん？どうしたの？そこに誰かいるの？」

聞き覚えのない声を聞いたのか美雪がドアの外でそういつている。「ミカエル。ベッドの下に。」

御剣がそういうと、ミカエルは、何も言わずベッドの下に潜り込んだ。ミカエルが、人語を操る猫だと言うことは誰にも話していない

い。もちろん家族にも。

「あれ？一人？話し声が聞こえたと思ったんだけど。」

御剣は、ベッドに腰掛けると、

「気のせいだろう。」

極力自然な感じを装った。

「そうかな……。」

美雪は不思議そうに部屋を見回すが、御剣以外誰もいない。ベッドの下でミカエルは、おとなしくしていた。

「変なの……。あ。そうだ、ごはんできてるよ。」

御剣は”すぐ行く”と答えると、立ち上がった。まだ寝間着のままだったのだ。「すぐにね！」

美雪は、朝っぱらから元気な声でそういうと、どたどたと階段を下りていった。「あの元気はどこから出てくるんだらうな？」

御剣は誰となくそういうと、着替えだした。

「元気なことは結構なことだ。」

ミカエルは狭いベッドの下からはい出してくると、思いつきりのびをした。

「お前、オヤジみたいだぞ。」

着慣れた制服に袖を通し、一つずつボタンを留めながら、御剣は苦笑を浮かべる。

「やかましい。それに、私はお前たちの年齢にしてみればもう60歳を超えているのだ。」

御剣は、イタズラっぽい笑みを浮かべると、

「悪い悪い、オヤジじゃなくて、ジジイだったか。」

「だまれ！」

ミカエルは、むっとすると、御剣をにらんだ。

御剣は、”へへ……”と笑うと、部屋を出た。いつものように

ミカエルもそれについて行く。

「なあ、ミカエル。」

御剣はそっとミカエルを抱き上げ、ささやいた。

「……?」

ミカエルは目で、”なんだと”聞き返してきた。

「お前はいつたい何者なんだろうな。」

「それは、聞かない約束だ。時が来るまでな……。」

ミカエルは、顔をかく仕草をしながらそうささやいた。

それは、ふれてはいけないことなのかと、聞きたかった。しかし、御剣は何も言わなかった。

時が来ればきつとミカエルの口から聞き出せる。御剣はそう信じることにした。

廊下には、パンの焼ける香ばしいにおいが漂っていた。

「今日は、遅刻しなくてすみそうだね。」

美雪は、晴れ渡った青空を仰ぎながらそういった。朝に降っていた雨は、家を出る頃にはすっかり晴れ、今は柔らかな太陽をのぞかせている。

「皮肉のつもりか？」

御剣は、その美雪の少し後ろを歩きながら苦笑を浮かべた。

「そんなんじゃないけど。……まあ、半分は……。」

「おいおい……。」

「だって、お兄ちゃん。いつもおきるの遅いし……。」

「そりゃそうだけど。遅刻はしてないだろう……。」

「……そういえばそうだよな。」

美雪は、くるっときびすを返し彼の隣に並んだ。

「おい。二人ともー！」

突然二人の後ろから、美雪に負けないほどの元気な声が朝の寒い空気を押しのけるように響いた。

「あ！優紀お姉ちゃん。」

見ると、優紀が大きなシヨルダーバックを肩に提げて駆けていた。

彼女は全力で走っているようだが、意外と足が遅いのか、なかなか近づいてこない。

二人はお互いの顔を見て苦笑を浮かべると、彼女の方に歩き出した。

「おはよう。御剣君、美雪ちゃん。」

優紀は息を切らしながらそういった。ときおり胸を押さえている。そんなに苦しかったのだろうか？それほど長く走ったわけでもなさそうなのだが。

御剣はわざとらしいため息をつく。

「お前、本当に体力ねえな。」

ここぞとばかりに優紀をからかった。優紀はムツとした表情を浮かべると、

「仕方ないよ。昔からこうなんだもん。」

拗ねたような声を上げるが、本当に気を悪くしているわけではなさそうだ。

御剣は、「そうだったか？」と、昔を思い浮かべようとするが、薄い靄がかかったようにうまく思い出せなかった。

しかたなく、本人がそういつているのだからそうなのだろう、と思いつき直し、

「じゃ、行こうか。」

と言って促した。優紀の息も直ってきたようで、いつもの朗らかな笑みを浮かべると、

「うん！」

と、元気に返事をした。

美雪は優紀と並んで歩き出した。御剣は例によって二人の後ろを歩く。いつもこんな感じだ。前を歩く二人の後ろを御剣が見つめるように見守るように歩く。

だが、御剣は時折、ふと思ってしまう。「こんな関係がいつまで続くのかな？」と。

もしも、美雪と優紀に恋人とかができたら、やはりこういう関係

は自然となくなってしまうのかなと思ってしまう時があるのだ。

二人はそんな彼の思いなど知らぬように、最近のはやりの服とか、テレビ番組やタレントの話題で、会話を盛り上げていた。

ときおり、御剣の名が出てくるのだが、彼は気にしなかった。いちいち気にしていたら疲れてしまうし、反応するのも面倒だ。

坂道を上ってしばらく行けば駅前前の商店街にでる。そこを抜けたところに彼らの通う学校がある。その学校も少し小高い丘の上にあるのだから、この街はずいぶん坂が多い。

その商店街というのも少し風変わりな構造をしている。

中央に噴水のある広場があることは別段珍しいことではないが、その広場から大通りが放射線状に延びているのはそうそうお目にかかれないだろう。

その町並みはまるで、ロンドンやパリを彷彿とさせる。

というのも、この商店街の創始者がなかなかに興味的な人物だったらしく、商店街の発展と客寄せ、そして何よりも自分の趣味の一端としてこういう風な町並みにしたらしい。(もっとも、自分の趣味ということに一番重きが置かれたというのが専らの噂だが)

唯一のネックと言えば、方向音痴には厳しい町並みだということだろう。

いつもは穏やかなその町並みも中央に来るにつれ、次第に喧噪の渦が巻きあがってくる。その日は何かが違っていた。

「あれ？何だろう？」

優紀は、歩みを止めた。見ると、道路の周りに人だかりができている。

『ん？・・・なんだ？』

御剣は一瞬めまいがした。なにやら頭に浮かんでくる漠然とした映像。それはなにやら懐かしいような、思い出したくないような・・・。

「御剣君？」

彼は、優紀の声で正気に戻った。頭を振って意識を保つと心配そ

うな目で彼の顔をのぞき込んでいる優紀が目にはいる。

「大丈夫？」

「どうってことないよ。」

そういつて優紀から視線をはずすと御剣はその人だかりを改めて見つめた。人の会話が飛び交っていて正確なことは何も分らない。

ただ何か尋常ではないことが起こったのは確かなのだが。

「何かあったのかな？」

優紀はそわそわしながらそう言う、

「警察も来てるみたいだな。何か事故でも起きたんじゃないか？」

御剣がそっぴいなながら人混みを眺めている隙に、優紀は、自分の好奇心に負け、早速聞き込みを始めた。

「待った。聞き込みなんて、警察の仕事だろうが。なあ、美雪。」

御剣は、あきれながら美雪の方を向いた。美雪は、なぜかうつぶいて寂しそうな顔をしていた。

「どうした？」

彼は、美雪の肩を少し揺さぶらせながらさういう。美雪は、はっとして御剣を見た。その目には明らかに動揺と哀しみ不安など、いろいろな感情が揺れては消えていった。

「別に・・・何でもないよ・・・。先、行くね・・・。」

彼女は、御剣の手をやりわりとふりほどくとまともに彼と目を合わせないうちにかけていた。

「美雪・・・どうしたんだ？ いったい。」

御剣が放心しかけると、優紀が神妙な面持ちで近づいてきた。

「車の事故だつて・・・。」

「そうか。運転手は？」

「・・・。」

優紀は静かに首を振った。

「そうか・・・。」

「うん・・・。」

『??? 変だな。』

御剣は、引つかかるものを感じた。

「あれ？、美雪ちゃんは？」

優紀は初めて美雪がここにいないことを知った。

「ああ、美雪は先に行っただぜ。」

「そうなんだ。」

「……沈黙が重苦しい。」

「なあ。優紀。」

「なに？」

「……周りに少しづつ野次馬が散っていった。救急車の音が近づいてきている。」

「先に行つててくれないか？」

道路には、事故の名残が赤いどろっとしたものがシミのようにこびり付いている。

「どうして？」

道ばたの残り雪に飛び散ったそれは、夕焼けよりも赤く、どす黒い色を放っていた。

「何でもだ。」

救急車が到着した。救急車の隊員はいそいそと毛布にくるまれた何かを抱え、車の中に戻った。

人の大きさほどのそれが何かということ想像するのはさほど難しいことではない。

「そう……。わかった。」

喧噪が消えた。目を覆い隠すもの、口を押さえるもの、目を背けるもの、毛布に向かって手を合わせる者。誰の反応も一様ではなかったが、死者を悼むという意味では、皆共通していた。

優紀は、寂しそうな顔を浮かべつつもその場を立ち去った。

御剣は、救急隊員が抱える毛布を一瞥すると、暗い裏路地に足を進めた。

裏路地には誰もいなかった。

「ミカエル。出てこいよ。」

御剣は、いつも自分の後ろにいるミカエルの存在を感じながらそういった。別に姿を現さなくても彼の言葉は届くのだろう。しかし、御剣はいつも彼に姿を現させてから話すことにしている。

「ここにいる。」

路地の奥からひととき黒いものがモソモソとはい出てきた。

「どういうことだ？」

それは、次第に猫の形を形成してゆく。それは黒猫、ミカエルだった。

「私にもわからん。」

ミカエルも、御剣と同じように憎々しげに言葉を吐いた。

「こんな近くで人に死が訪れたというのに。俺は何も感じなかった。まったく予期してないことだった。」

「……………」

ミカエルは何も言わない。承知しているということなのか。

「死神である俺にさえ死を予感させないような人間なんているはずがない。どういうことだ？」

御剣は、ミカエルをつかむと自分の目の高さにまで引き上げた。

その目は妖しい光に満ちて、見る者の背筋を凍らせてしまうようだった。

「考えられうることは一つ。」

ミカエルはあくまで冷静だった。

「……………」

御剣はそんなミカエルの目をじつとのぞき込んだ。

「悪夢の仕業だとしか考えられない。」

「また、悪夢か……。いったい、悪夢ってのはなんなんだ？」

「敵だ。我々のな。」

「敵？死神の敵ってことか。」

「その通りだ。」

御剣は、ミカエルを解放した。ミカエルは空中で一回転すると見事なバランスで地上に着地した。

「悪夢か……。あの運転手は、本来死ぬはずじゃなかったんだな？」

ミカエルは、はっきりとうなずき、

「うむ。悪夢によって死の運命を背負わされてしまった者だ。」

「俺は……。救うことができなかったんだな？」

ミカエルは、うなずいた。そして、

「これからが大変だぞ。」

重々しい口調でそういった。

「分かってる。」

御剣もうなずき返した。

……。どちらにせよ。もう俺は逃れられない。死神をこの身に受け入れたときからな。

青空はまるでこれから起こる数々の悲劇を予感するようにどんよりと曇っていった。

校庭には雨が降りしきっていた。

美雪は教室の窓から雨に濡れる校庭を放心したように眺めていた。普段の彼女を知っている者は、何かと思うだろう。

「昼食もあまりとっていない。ダイエット中か」と聞かれて「まあね。」と曖昧な笑みしか浮かべられなかった。そのことが周りの者にさらなる不審を抱かせる材料となることも知らず。

授業終了のベルが鳴った。教室全体が一気に空気が抜けたように脱力するが美雪はノートを開けたまま窓の外を眺めるだけだった。そのノートには何も書かれてない。

そんな彼女は自分に近づいてくるものの存在に気が回らなかった。「美雪いー。どうしたの？先生が呼んでも返事すらしなかったじゃない。」

美雪の親友、森野譲葉は心配そうに彼女の顔をのぞき込んだ。

「あ、譲葉……。」

美雪はゆつくりと顔を上げる。その口調は限りなく弱々しい。

「何よ。ほんとにもう。美雪らしくない。」

譲葉はそういいながら近くにあった椅子に腰を下ろして、彼女を見つめる。しかし、美雪は目を合わせようとしない。

「ひよつとして……。あの日?」

「……ばか……。」

美雪はいつもはそんな冗談など言わない譲葉を見て、ようやく少しほえんだ。それでも表情は硬かったが。

譲葉はしばらく”うーん……”と悩んだが、何かを決心したように席を立った。

「分かったわ……美雪。何で元気がないかは追求しない。だけど。今日、放課後、一緒に買い物に行きましょう。」

「え?」

「こういう日は、パーツとなにか買い物でも何でもして気分を晴らすのよ。いい?」

美雪はあまりにも強引な譲葉を見て驚いた。いつもなら彼女の方から誘ってくるなどなかったのだ。

美雪は彼女の心遣いに胸が暖かくなるようだった。

「授業のベルが鳴るぞ。席に着け!」

いつの間にか教室には教師が教材を抱えて入ってきていた。

「先生。いつもはやすぎですよ。休み時間ってのは休むためにあるんですよ。」

生徒の一人がそう文句をたれるが、

「俺の時計ではとくに授業が始まってんだよ。」

教師に似合わず少々ぶつきらぼうな口調だが、それも生徒たちからの人気の秘訣だ。

「先生の時計、壊れてるっすよぉ!。」

また別の生徒がそんなヤジを飛ばす。

「やかましい。俺の時計は世界一正確だ。」

「先生のが世界一だったら俺のはパルサー並じゃないですか！」
最後に誰かがそういうと教室は爆笑の渦に包まれた。それとも
に、授業開始のベルが鳴った。

「よし。委員長。号令だ。」

教師はそういつて教壇に教材を乗せるとそっくり放つ。

降りしきる雨はさらに勢いを増すように、雨音がさらに強くなっ
ていく。雪の季節は終わり、春の到来を告げる、そんな雨だった。

「ねえ。御剣君。今日の放課後ヒマ？」

ようやく小雨になりつつある空を眺めていた御剣に優紀が何気な
く話しかけた。

「ん？何か用事でもあるのか？」

「そうじゃないけど。たまには、一緒に帰らない？」

御剣はしばらく考えるが、すぐに面を上げて首を横に振った。

「悪いな。今日は病院に行く日だ。」

病院？と、優紀は一瞬だけ考えるが、

「ああ、鈴音先輩のお見舞いね。」

御剣の知り合いがずっと入院中であつたことを思い出した。いや、
正確には知り合いではない。鈴音は御剣の彼女なのだ。

今日は、その見舞いに行く日だったのだ。

「どう？先輩、良くなったの？」

「医者言うには回復に向かつてるって言うけど。どうだろうね。」

まあ、死ぬことはないだろうから安心してやるけど。

御剣は少しばかり頬をゆるめていた。彼女のことを話すときはい
つもこんな風にうれしそうに優しい表情をする。

優紀は、そうね・・・と少し複雑な表情で微笑むことしかできな
かった。

「私も行っていい？」

なぜそういつてしまったのかは彼女にも分らなかった。この言葉は彼女の口から自然に漏れだしていたのだ。

「ああ、いいぜ。」

御剣は何も考えずに即答すると、

「んじゃ。行こうか。」

鞆を取って教室から出ようとすると、

「待ってよ。もう・・・せっかちな。」

優紀も御剣の後に続いて教室を後にした。

昔からそうだった。

いつも目が前にしか向いておらず、ともすれば一人で突っ走ってしまう御剣の後を追いかけるだけ。

それが優紀のポジションだった。優紀はそれが不満だったわけではない。ただ、いつかは自分も彼の横で歩けるようになったら・・・。

それが彼女の希望だった。

だが、彼は見つけてしまった。自分の隣で一緒に歩いていける女性を。それは優紀ではなかった。

「もう。御剣君はあいかわらずだね。」

少し息を切らしながら優紀は彼の横を歩き出した。

「ん？そうか？」

「そうよ。昔から全然変わっていない。」

「そうか・・・。」

「うん。いつも前しか見ていない。」

「猪突猛進？」

優紀はがくつと膝を折りそうになった。

「そうじゃなくて・・・いい感じに前向きというか・・・。」

思いもよらなかつた言葉に少し混乱しつつも彼女はたどたどしく言葉を紡いでゆく。

「お前は猪突猛進だよな。」

御剣はいたずらっぽく笑みを浮かべていた。

「もう！ほつといてよ。そういうことを話しているんじゃないんだってば！」

「まあ。そういうお前は好きだけどな。」

「え？」

優紀は一瞬自分の耳を疑った。まさか、彼の口からそんな言葉が出てくるなど……。

「見てて飽きない。」

一瞬にして彼女の淡い期待はチリとなって消えてしまった。

「あう……意地悪なんだから！」

優紀はわざとらしく額を抑えながらうなった。

「今に始まったことじゃないだろう？」

彼はにやにやした笑い顔を浮かべながらなおも優紀の顔をのぞき込んでくる。

「それは……そうだけど……。」

優紀はふつと窓の外を見た。まだ細かい雨が校庭に降り注いでいる。いい人だよ。鈴音先輩って。」

ふつとそんな言葉が口をついたように漏れだしていた。

「どうしたんだよ。急に。」

御剣は突然そんなことを口にした優紀を見た。

「別に……。先輩だったら御剣君を任せてられるなって思っで。」
「なにいつてんだか。」

やれやれと、御剣はため息をついた。照れたり困ったりすることがあればそうするのが彼の癖だ。

それは昔から変わっていない。

「変わらないよね。御剣君って。」

御剣は少し息をのんだ。

「俺は変わらないさ……。たぶん、死んでも変わらないだろうな……。……。」

優紀は驚いた。何気なく言った言葉に御剣がこんな反応をするなど、考えてもいなかったのだ。

「えっと・・・御剣君・・・？」

小雨の音が響く。弱いながらも生きる強さを感じさせる音だった。下駄箱で下靴に履き替えた二人は校庭を眺めた。所々に大きな水たまりができています。

「まだやみそうにないな。」

御剣はぱらぱらと降りしきる小雨に手をかざした。雨はかざした手をぬらし、水滴となってしたたり落ちてゆく。

「私、傘持ってきたよ。」

優紀は鞆から小さな折りたたみ傘を取り出した。こういふところはしっかりとっている。

「御剣君も入る？」

優紀は少しの期待を込め、上目遣いで御剣を見た。

「別にいい。こんなの、降ってるうちにはいらんからな。」

そういつつ、御剣は歩き始めた。雨は制服のブレザーを濡らしていくが、そんなことはお構いなしに、彼はずんずん歩いていく。

「だからあ・・・待っててば。」

優紀はいそいそと傘を広げると、御剣を追った。

「ところで、美雪ちゃんは？」

ようやく追いついて一息つくくと、優紀はいつも一緒に下校している美雪が今日は一緒じゃないことに気がついた。

「森野と買い物らしい。」

「へー。譲葉と・・・。仲いいもんね。」

優紀は部活動で彼女の先輩だったので、彼女とは面識がある。

「ああ。」

再び沈黙が二人の間に漂う。

優紀は空を見上げた。細々とした雨の滴がまだ空から降りしきっている。

「そういえば、先週までは雪だったよね。」

傘の間からそっと空を見上げた。

「そうだな。だいぶ暖かくなってきたわけだ。春も近づいているっ

てことだな。」

御剣も空を見上げた。

「さて、少し急ぐか。あんまり濡れたくないからな。」

そういうと御剣は歩調を強めた。

「だったら、私の傘に入ればいいのに。」

そっぴいなながらも優紀は彼の後に付いていく。

・・・いつか別に、私はこの位置で落ち着いていられるんだったら。そうすることで御剣君と一緒にいられるんだったら。それも悪くない。

春を呼ぶ小雨は大地をぬらすだけではなく、人の心をもいやしてしまふものなのかもしれない・・・。

聖イスラフェル学園付属病院はきれいな中庭のある広い病院だ。

倉前鈴音はベッドの上から雨の降りしきる中庭を眺め、そしてため息をついた。その膝には、”ユリウスの見解”という分厚い本が広げられている。

読書家である彼女のために御剣があげたものだ。古い作品で、名探偵と呼ばれたユリウスが不思議な力を使って事件を解決していくというミステリー小説だ。原本もやさしめの英語で書かれているため、訳本とともにそれなりに人気が高いものだ。

鈴音は再びその本に目を落とす。

すると突然、トントンとドアをノックする音が部屋に響いた。鈴

音は、本に琴をして閉じると、

「はい。どうぞ。」

と、一言声をかけた。

「失礼するよ。」

「失礼しまーす。」

二人の男女がその声に続いて部屋に入ってきた。それを見た鈴音

はとたんにつれしそうに微笑んだ。

「いらつしゃい。御剣君。それに……。」

優紀は、鈴音が自分を見て不思議そうに首をかしげていることに気がついた。御剣や美雪の話で彼女は鈴音を知っていたが、鈴音のほうは彼女を知らなかったのだ。

「あ……。えっと。緑野優紀っていいいます。」

「ああ。御剣君の友達……。私は、倉前鈴音。よろしくね。」

鈴音はそうとうと微笑んだ。そのほんわかとした笑みは見るものを安心させるような力があつた。

「その本、まだ読んでたのか？」

御剣は、鈴音の膝の上に見知った本があることに気がついた。

「うん。もう読むの、三回目よ。」

鈴音は恥ずかしそうにそうとうと本の上に手を置いた。

「はは……。鈴音らしい……。今日はちょっと軽いものをつて思ったが……。必要ないみたいだな？」

そうとうと御剣は鞆からその本より遙かに小さい文庫本を取り出してひらひらさせた。

「え？また持つてきてくれたの？」

鈴音は子供のように目を輝かせた。

「前、読みたいって言ってたよな。」

御剣はその本を差し出した。鈴音は大切なものを受け取るようにその本を手にした。

「わーい。ほんとだ。御剣君大好き！」

御剣は”知ってるよ”といいながら頬をかいた。

「そんなに本が好きなんですか？」

優紀は、その二人のやりとりを複雑な笑みを浮かべながら見ていた。

「うん。昔からずっとベッドの中だったから本は友達みたいなものよ。」

優紀は”あ、そうか……。”と少し自分の配慮のなさを悔いる。

しかし、鈴音はまったく気にせず早速、本を開いて冒頭を読み出した。すると、病室のドアが開かれる音が響いた。

「倉前さん。検温の時間ですよ。」

振り向くと若い看護婦が病室に入ってきていた。

「もうそんな時間か。」

御剣は備え付けの時計を見た。

「くるのがかなり遅かったからね。」

優紀は心なしかほっとした様子でそういった。

「それもそうか。それじゃあ、まともに話もできなくて残念だが、帰ることにするよ。」

今来たばかりなのにもう帰らなければならないのは残念だがそれもいつてられない。

御剣はそんなことを思いながら鈴音に別れを言う。別れというには少し大げさかもしれないが。

「うん。またね。」

鈴音は満天の笑みを浮かべ二人を見送った。わざわざ手を振っているあたり、鈴音らしいな。御剣は微笑を浮かべ、

「鈴音も、あんまり夜更かしするんじゃないぞ。」

と、いいながら病室を後にした。優紀は軽く会釈をして彼の後に続く。

二人が部屋を出て行ったので、看護婦は脇に抱えていたケースから体温計を取り出し、鈴音に手渡した。

「それじゃ。脇に体温計を入れてね。」

その指示通りに鈴音は本を棚に置くと渡された体温計を脇にしまいい込む。

「今のはお友達？」

鈴音の血圧を測りながら看護婦はそう聞いた。

「うん。」

鈴音はにっこりとして答えた。

「ひょっとして片方は彼氏だったりして。」

そういう話が好きなのか、彼女はイタズラっぽい笑みを浮かべながらそういった。

「うん……。まあ、そう、かな……。」

鈴音は頬を染めながら答えた。

「ふふ……。いいわね。」

彼女は、血圧計を見ると、”異常なし”といいながら書類にそう記した。

「体温計も出していいわよ。」

鈴音は何も言わずに言うとおりにした。

「体温も平熱の36度3分。」

これも異常なしね。といって、血圧の横に体温も記した。その表には同じような数字が並んでいる。

「だいぶ落ち着いてきてるから。この調子だったら。うまくいったら外泊もできるかもしれないわね。」

「ほんと?」

「だけど、春になったら。外はまだまだ寒いわ。」

今日こそ雨が降ってはいるが、先週まで雪が降っていたのだ。春はこつこつと近づいてきているもののまだまだ遠い。

「春が待ち遠しいな……。」

鈴音がそういうと、看護婦も”そうね”と微笑むと、

「それじゃ、また夕方来るわね。」

といいながら彼女は、病室を後にした。美鈴はまた手を振りながら見送る。

病室は、雨音以外は鈴音一人になってしまった。この雨の日には中庭で遊ぶ子供も誰もいやしない。

鈴音はゆっくりとため息をついた。先ほどまで浮かべていた暖かな笑みは姿を消している。

無理をしているというわけではない、彼女と話しをすることは楽しいし、御剣が来てくれた時には本当に幸せな気分になれる。

だが、一人になるとどうしても理不尽な憂鬱がわいてきてしまう

のだ。だから彼女はいつも本をそばに置いている。本を読むことで少しはその憂鬱が紛れるように思えるから。

「春がこれば外に出られるかもしれない。だけど、私が本当に自分の足で春を踏みしめられるのはいつになるのかしら。」

発作は一年に2回から3回やってくる。その時はまるでこの世界の終わりが訪れたような苦痛が襲いかかり、彼女は幾度も死を覚悟したこともあった。

いつか、その手首にカッターを入れようとしたことすらあった。

しかし、その時、ふと御剣の顔を思い浮かべたのだ。一度だけ、二人で学校の文化祭を見て回ったことだった、彼と初めてであつたとき、・・・その時の御剣の笑顔が彼女の心に歯止めをかけた。彼女は涙を流しながら笑っていた。そして、気がつくと刃を持つ手の力抜けていたのだ。

鈴音は目を閉じて、御剣の顔を思い浮かべた。彼の笑顔、困ったときの仕草。そのどれもが彼女の心に安らぎを与えてくれる。

鈴音は、心が温かくなる気がした。

そう、今の鈴音にとって御剣だけが心の支えであり、御剣も彼女の支えとなろうと心に決めているのだ。

好きな人に大切に思ってもらえる。鈴音は、たとえ自分の病気が不治の病だったとしても、その幸せを糧にして生きていられる。

・・・いつか、御剣君の横で歩くことができるのなら。私は、どんな辛いことでも耐えることができる。

彼女は強く心に思った。それがかなう日を夢見て・・・。

(3)

夜。三日月が宵闇を支配し、星々が淡い光を瞬かせ、街が闇に沈む頃。

御剣は夜の病院の一室にたたずんでいた。誰も彼を認識することができない。彼は”死神”に身体を明け渡していた。

「お迎えにありがとうございました。」

今はもう息をしていない中年の男に彼はそつと声をかけた。包帯にくるまれた顔からは彼が死ぬ以前はどのような容貌であったかを推し量ることはできない。

「……………」

男は起きあがり、虚ろな眼差しで周りを見た。

一瞬のことだった。

わずかな気のゆるみが引き起こした事故は、それこそ一瞬で一つの命を奪い去っていつてしまった。

だから彼は自分がどんな状態にいるのかさえ理解していない。自分が死んだということさえも……………」

それは今まさに肉体から離れ出ようとする魂。人であった頃の記憶が人の形をさせている、ただそれだけの存在だった。

「分りませんか？あなたは死んだのです。私は、あなたの魂を送るために来ました。」

御剣は何の感情も込めずにそういった。

「俺が死んだ？バカ言うなよ。俺はここにいるじゃねえか。そうだろう？俺が死ぬなんて……………」そんなことないよな？な？」

誰だつて自分が死ぬのを認めたくない、死んでなおこの世にとどまりたいのは人として当然のことだ。しかし、それは悲劇しか生まないことは御剣はよく知っていた。

そして、この世にとどまったとしても、そのうち自分が死んだことをいやでも自覚せねばならない時が来る。

そうなつてしまえば、やがて生きているものを恨むようになり、様々な厄災を振りまくこととなる。

だから、御剣は辛くとも、あえてこういうのだ。

「いえ。あなたは死んだのです。あなたの足下をご覧下さい。」
魂はゆっくりと自分の足下を見下ろした。

そこには横たわった自分の身体。すでに生気を失っている死者の肉体。

「そんな……。これは、俺……。なのか？」

男の魂は自分の顔に触れようとしますが、それはもうかなわない。魂がこの世のものにふれることはできないのだ。

「おわかりいただけましたか？」

「俺は……。死んだのか？」

彼はゆっくりと面を上げた。

自らの死を現実突きつけられ、その絶望はいかなるものなのだろうか？そこには希望などかけらも見つけることはできない。人の死とはそんなものだ。

「はい。あなたは死んだのです。私は、あなたの魂を送るために来ました。」

御剣も同じことを繰り返し彼に言う。

そして、そんな絶望を与えることが使命である死神の持つ苦しさはいかなるものなのだろうか？

「お前は……。死神なのか？」

「はい。私は……。死神なのです。」

それを聞いた瞬間、男はぐつと歯を食いしばった。

「お前がおれに死をよこしやがったのか？！」

その言葉は御剣の心に深く突き刺さる。幾度となく浴びせられた言葉……。お前が自分を殺したのか……。御剣はその言葉にどれだけの深い悲しみを覚えたか。

「それは……。」

人としての心があふれてくる。彼は、必死になってそれを押しとどめようとした。そうしなければ、自分は死神で居続けることはできない。今は死神でいなければ……。

「そうだよな……。死神だもんな当たり前だよな……。」

「……。」

御剣は何も言わない……。いや、いえなかった。死神は本来人に死を与えることはできない。しかし、死者にすれば死神とは間違いなく死神なのだ。

そう思われても仕方がないのだ。

「とつとあの世におくりなよ。もう、お前の姿を見たくない。最後に見るのが死神の姿だなんて・・・最悪だ。」

それはいわれのない中傷だったのかも知れない。しかし、それでも御剣は死神の使命を果たさなければならぬ。

彼は、かつて人間だったものの魂にしっかりとした眼差しを向けると口を開いた。

「最後に一つだけ願いを聞き入れることが許されています。あなたには何か未練がおりますか？」

死神はいかなるものにも最後の希望を与える。それがいかにちっぽけなものであっても、その願いはその人の心からの願いなのだから・・・。

魂は少し考えるようにその口をつぐんだ。人が最後に願い、望むこと。それはそのものの今まで生きてきたことを意味づけることにもなる。

重苦しい沈黙が続いた。

「家族に・・・最後の別れを・・・せめてそれだけは・・・。」

そして、その口から紡ぎ出された言葉はごく平凡なものだった。御剣は何度同じ願いを聞いて、そしてかなえてきたことか。やはり、死者の最後の願いは親しい人への別れなのだろうか。愛するものとの永遠の別れ。それは他の何よりも辛く苦しいことだ。

「分かりました。その願い確かに聞き入れました。」

御剣は黒い鎌を取り出した。

「あなたの意志は確かにお届けします。」

その鎌は月の光を受けてもひかりもしない。

彼は、魂と肉体の付け根にそれをあてがった。

魂はじつとそれを見つめていた。

「痛みは・・・感じねえんだな・・・。」

「はい・・・あなたはもう・・・。」

死んでいるのですから・・・という言葉を彼は飲み込んだ。

「そうだな・・・悪かったな。」

「え？」

不意に御剣は面を上げた。魂は申し訳なさそうな表情で彼を見ていた。

「さつきは言い過ぎたよ。そうだよな。お前もこんなこと、好きでやっているわけねえよな。」

「・・・。」

彼は絶句してた。死神に謝る人間、死神に誹謗中傷を浴びせるものは少なくない。だが、今までその死神に謝る人間などいただろうか？

「何だかな。心がクリアになっただけで言うのかな・・・。今はお前の気持ちでよく分る気がする。」

「・・・。」

「俺は・・・いわゆる仕事人間でやってきた。家族や人間関係なんて面倒なものとか考えていなかったんだ・・・。だけど・・・。はは・・・死んでから気がつくなんて俺もとんだバカ野郎だな。人の心はこんなにも暖かならなくて・・・。」

彼は、まるで遠くを見るような眼差しで話していた。彼の目には何が映っているのだろうか？友人？家族？それとも、今までであったすべての人たちなのだろうか？

「人間とは・・・いいものです。」

御剣は微笑んだ。死神が微笑む。それは、ある意味死神としてはあるまじきことなのかもしれない。しかし・・・御剣はそれでも微笑みたかった。

「ああ。そうだ。だからこそ、もっと生きていたかったが・・・いや、もういいか・・・。」

「ごめんなさい・・・。」

「謝るな！お前は何も悪いことはしていない。だから・・・謝るな。」

「・・・はい・・・。」

御剣は、魂に鎌を突き刺した。魂には何の痛みもない。彼はただ目を閉じてその時を待ただけだった。御剣は目をそらしつつも鎌を持つ手に力を込める。

鎌はいともあっさり魂を肉体から刈り取っていた。

一瞬のまばゆい光の瞬き。後に残ったのは死んだ肉体と、魂が人間だった頃の思いだけが、鎌の周りを行く当てもなくただ彷徨っていた。

「さあ、思う者のところに行くがいい。」

御剣はその”思い”に行く道を指し示した。それは、ゆらゆらと病室の窓を抜け、夜の闇の中に消えていった。

人は死んだら魂魄となってこの世を彷徨うと言われているが、彷徨うのはあくまで人の思いだけ。人の魂は天に帰っていくのだ。

この夜も一つの魂が天に帰った。多くの哀しみと思い、そして再びこの世に帰ってくる希望を残して。

悲しいのは送られたものでもなく、送ったものでもない。残されたものたちなのだ。それは、誰もがよく知っている。

御剣は病院を後にした。

街は、さらなる闇へとその身を沈めてゆく。

それはまるでこの世の終わりのようにおもえた。

御剣はゆっくりと目を覚ました。鳥の鳴き声がまるで子守歌のようにさらなる眠気を誘う。

彼は、だるそうに体を起こすと大きくあくびを一つついた。

「あーあ。なんだか暖かくなったな。」

ついこの間までは身を切るような朝の冷え込みが、今ではすっかりと消え、いつの間にか、暖かな春の日差しが差し込む、とても居心地のいい季節となっていた。

「ふむやー！」

御剣がベッドから降りようとすると、その下で丸くなっていたミカエルを踏んづけそうになってしまった。

「邪魔……。」

御剣はそういうとあくびを交えながら無造作にミカエルを足でどかせる。ミカエルは怒ったような目を向けるが、御剣はまったく気にしていない。

「そんな顔するなよ。こないだ天気なんだからさ。」

御剣はまたあくびをついた。

「起きるときぐらい足下に気をつけるがいい。」

ミカエルは床に座り込んでそういった。

「仕方ねえだろ。あれの後はなんか異様に疲れるんだから。」

あれ……死神としての活動のことだ。確かに、今までもそうだった。

「まだまだ未熟よのう。」

ミカエルはいつも居間で見ている時代劇の口まねをしているが、御剣はやれやれとため息をつき、さっさと着替え始めた。

「そういえば、美雪のやつ。今日は起こしにこねえな。」

気持ちよく寝ているところにあの大声はきついが、それがないとどうも調子が狂ってしまう。

「たまには起こしに行つてやったらどうだ？」

ミカエルはそういうが、御剣は”どうするかな”と言いながら制服に着替えた。

「ま、たまにはな……。」

部屋を出て階段にさしかかったところで、彼は、”美雪のお部屋”という札がぶら下がった部屋を見ると、いつもの仕返しといわんばかりに乱暴にドアを叩いた。

「おい。美雪。起きてるか？起きてるな？さっさと下に来いよ。」
とだけ言い残すと彼は、ミカエルとともに一階のリビングに降りていった。

「そういえば、お袋いなかったっけ。」

昨日そんなことをいつていたようなことを思い出すと、御剣は台所の食器棚から二人分のグラスを取り出し、冷蔵庫にあったパンをオーブントースターに入れてスイッチを押した。パンが焼き上がったら自動的に止まるものだから、そのまま放っておけばいい。

「おい、ミカエル。飯だ。」

御剣は、リビングで寝そべっているミカエルをつま先でつつきながら、彼の前にミルクの入った皿をおいた。

本当はそんなもの必要ないが、形だけでも猫をしてもらわないといけないという御剣の要求だ。それに、「このミルクというものも悪くない。」とミカエルはいつもいつていることで、まんざらいやそうでもないらしい。

オーブントースターがチンという音を立てた。焼き上がったようだ。

御剣はバターをこんがり焼けたトーストの上に塗りたくった。美雪はジャムがいいといつもいつているので、美雪の分は何もつけず、代わりにジャムを出して、トーストと一緒にテーブルにのせておいた。

「美雪のやつ。おっせえな。」

御剣は上を見ながらそうつぶやいた。御剣はすでにトーストを半分以上食べてしまっている。時間的にはそろそろ出発の準備をしないと遅刻してしまいそうだ。

彼は、立ち上がると階段を駆け上がり再び美雪の部屋に来た。

「おい、美雪。そろそろ降りて来いよ。」

御剣は扉をさつきより強めにドンドンと叩いた。

「……………」

しかし、部屋の中からは何の反応もなかった。御剣は「しかたねえな」とつぶやきながら、

「おい！入るぞ。着替え中でも文句をいうなよ！」

そう断りながら部屋のドアを開けた。母親の教育方針から（もつとも美沙にそんなものがあつたらの話だが）部屋には鍵をつけない

ことになっているのでいつでも部屋にはいることはできる。

ガチャリ、とドアノブが回される音がして、扉が開かれた。

「美雪・・・？まだ寝てるのか？」

部屋は思いの外薄暗かった。

「あ、お兄ちゃん・・・。」

美雪はまだ布団の中にいた。薄暗い中その表情をうかがい知ることとはできないが、御剣は美雪が自分を見ているように思えた。

よくよく耳を澄ませると、ときおりゴホゴホと苦しそうな咳を漏らしているようだ。

「風邪か？」

「・・・。」

御剣は、歩み寄りベッドの縁に腰をかけると美雪の額に手を当てた。

美雪は何も言わずにその手を受け入れた。美雪の額の熱が御剣の手に伝わってくる。それは、尋常ではないほどの熱がこもっていた。

「これは・・・完全に風邪だな。」

「・・・うん・・・。」

「まったく昨晚、風呂上がりにはアイスをも3本も食つからこうなるんだ・・・。こんな季節に良くやるよ・・・。」

まあ、自業自得というやつだ。

「だってえ・・・。」

今の美雪には言い返す元気すらないらしい。

「これに懲りたら次からは気をつけるんだぞ！いいな？」

「・・・うん・・・。」

思いの外正直にうなずいた。

「食欲はあるか？」

ため息をつきつつも御剣はそう聞いてみるが、美雪は何も言わずただ首を振っただけだった。

「ないのか？」

今度は首を縦に振る。

「しょうがないな……。」「
かなり重傷のようだ。」

今日は休むしかないかな……。お袋もないし。そう思うと、御剣はとりあえず学校に連絡を入れようと思いついた。

「学校には休むっていつとくからな。食欲なくても粥ぐらいは食べよ。」

「お兄ちゃん……。」

部屋を出て行くこうとする彼を引き留めるように美雪は声を漏らした。

「ん？なんだ？」

御剣はドアノブに手をかけながら首だけ振り向いた。

「ごめんね……。それと、ありがとう。」

「いいさ。」

その言葉を残すと御剣はいそいで一階に下り、玄関のそばにある電話の前に立った。

「確か、学校の番号は……。それと、お袋にも連絡しとかなないといけないか……。そういえば、カゼ薬あったかな？」

彼は、電話帳をぺらぺらとめくり始めた。この電話帳を書いた本人（美沙）がめんどくさがりやだったらしい、わざわざ50音のリストがあるというのにその項目をまったく無視して書かれているため、目的の番号を探すのに苦労する。

「あ、これか……。」

最初のページから数えて5つ目によやく学校の番号があった。

そして、やっとの事で受話器を取ろうとすると玄関が開かれる音がした。

「ただいま……。」

振り向くと、美沙が下駄箱に寄りかかりながら立っていた。明らかに疲れ気味のようだ。仕事で徹夜でもしたのだろうか？そのめの下には隈が浮き上がっていた。

「あ、お袋。早かったんだな。」

御剣は珍しいものを見るかのような視線を彼女に向ける。実際、朝、彼女に会えることなど滅多にないことなのだ。

「御剣……。あなた、学校は？」

美沙は、時計を見ながらそう聞いた。いつもならとっくに家を出ている時間だ。”さぼるつもりじゃないでしょうね？”と、目が言っている。

御剣は、ごく簡潔に（美雪がカゼひいて学校に休みの連絡しようとしていた途中だと）事情を話した。

「美雪が風邪ひいた？まったくしょうがない子ね。どうせ、お風呂上がりにアイスでも食べてたんでしょう？いつもやめておきなさいって言っているのに……。しょうがない子ね……。」

「ご名答、伊達に母親をしていない。美沙は、肩を叩きながらそういった。

その仕草と外見が妙に一致しない。美沙はなぜか年の割に若々しく見えるのだ。まあ、今となってはどうでもいいことだが。

少し口調が荒っぽいのは疲れているからだろうか。

美沙は、御剣の肩をぼんぼんと叩くと、

「美雪の看病は任せておきなさい。あなたは学校いくの！」
授業料がもつたいないでしょ。と付け足した。

御剣は、へいへい、といいながらリビングにおいてあった鞆をとると靴を履と、

「それじゃ、行ってきます。」

服を着替えずに台所に引っ込んでいった美沙にそう言い残して、ドアを開いた。

「寄り道するんじゃないわよー！」

冷蔵庫の開く音と一緒に美沙の声が御剣の耳に届く。御剣は苦笑を浮かべながら家を出た。

明るいい日の光が差し込み、御剣は手をかざした。

「本当に暖かくなつたよなあ。」

ほっと一息つくように彼はそうつぶやき、商店街に続く坂道を一

人で歩きだした。

(一人で登校するのにもなんだか久しぶりだな。)
まだ雪の残る地面。透き通るような空気にさらされ、それでも街はかすかに春の兆しが見え始めていた。

教室に入った御剣を迎えたのは、塔矢だった。

「およ？御剣……。今日は優紀と一緒になかったんか？」

御剣はうなずきながら周りを見回した。やはり教室にも彼女の姿はない。

「ああ、今日は一緒じゃねえよ。」

「いったいどうしたのだろうか？」

いつもなら、坂道のでっぺんあたりで出会うはずなのに、しばらく待つていてもくる気配はなく、仕方なしに彼は先に来ることにしたのだ。

なぜか分らないが彼女がいないとどうも落ち着かない。

「もう、ホームルーム始まるで。」

「ん……。分った。」

それでも御剣は教室の入り口と優紀の席を交互に見ていた。

「心配しとんのか？」

「ん？ま、お前と同じぐらいにな。」

「お、俺は別に……。」

「心配してないっての？」

「そんなこと……。」

『あらへん』といううとした彼は口を紡ぐと、やれやれとため息をついた。

「……。心配やなあ。」

御剣は”だろうな”と頷きながら優紀の席を見た。そこには最初から誰もいないような妙にがらんとした気配が漂っていた。

そんな二人を背に始業ベルが鳴り響き、教師が教室に入ってきた。今までバラバラに話し合っていた者たちは一度自分の席に戻る。御剣もとりあえず自分の席に着いた。

「起立。礼。着席。」

委員長の決まりきった号令が終わると、担任が口を開く。

「今年度ももうそろそろ終わりに近づいている。諸君らも後数ヶ月で受験生になることを自覚して日々の勉強に励んでほしい。」

担任は、もうすでに決まりきった言葉をただ口にするだけだ。

「もっと、気が楽になることでもいえへんのやろか。」

塔矢は前の席の御剣にささやきかけた。御剣は無言でうなずくと、優紀の席をちらりと見た。まだ、彼女はきていない。

皆勤賞をねらっているといっていたのに、今日はどうしたのだから。見ると、御剣以外の生徒もちらちらと優紀の席を見ている。

『今日は美雪が風邪をひくし、優紀が遅刻するし。変な日だな。』

「おい、御剣！きいとるか？」

突如、担任の教師が、よそ見をしてた御剣をにらんだ。

「聞いてまへーん……。」

答えたのは彼の後ろの席に座る塔矢だった。クラスは一瞬笑いに包まれる。

「お前に聞いているんじゃない。まあいい。春だからといってあまり気を抜きすぎるなよ。気を抜いていいのは花見の時だけだ。」

「先生。そりゃ、気を抜くやのうて羽目を外すってことやないですか？」

さらに笑いがわき起こる。堅物そうに見えても結構ユーモアがあるこの教師は生徒の間にも人気がある。ある意味メリハリのきいた人とも言える。

「よし。今日も一日しっかりとがんばること。」

そういつて彼は、話を締めくくり、教室を後にした。そんな彼と入れ違いに優紀が教室に入ってきた。担任が何も言わなかったのは、遅刻すると連絡が入っていたからだろうか？

御剣もやれやれとため息をついて脱力するように椅子に身を沈めた。やはり彼女がいると安心する。

「よう、優紀。遅かったやんか。寝坊でもしたんか？」

塔矢は荷物を下ろした彼女に向かって手を振りながら軽口を交わした。

「そんな。御剣君じゃないんだから。」

「俺かよ！」

塔矢は笑いながら、「そらそうやな！」と言い、盛大に笑いを買った。

「別に俺は寝坊しているわけでは……。」

ふと、御剣は優紀の背後を見た。なにやら黒い影のようなものが陽炎のようにゆらゆらと立ち上っている。光の影にしては不自然すぎる。

……！！！！

御剣は心臓が鷲掴みにされた気分を味わう……。

それは、生きる運命にある人間にはあってはならないものだった。御剣は立ち上がると、いきなり優紀の腕をつかんだ。

「ちよつ……。御剣君？何するの？離してよ……。」

優紀は困惑した瞳で御剣を見るが、彼の目は有無をいわせない強さがあった。まるで、その視線に射止められたかのように優紀はその手をふりほどけなかった。

「ちよつとつきあえ。」

御剣はそう言い放つと優紀をぐいと引っ張り、そのまま教室から連れ出そうとする。

「痛いよ。やだ……。はなして……。」

もう御剣は何も言わなかった。確かめなければならぬ。優紀は知っているのだろうか。これから自分が歩む運命を。彼は、それを確かめなければならなかった。たとえ、この行為が何らかの誤解を招く結果になろうとも……。

教室にいた者達もそんな御剣の変貌ぶりに、ただあっけにとられ

るだけで、誰も彼を止めることはできなかった。

「いつたい何や？」

後に残された塔矢はその場にいた者達の代弁をするかのようになり、ただ呆然とするだけだった。

人気がない昇降口。白く塗りたくられたその場所はひっそりと沈みかえっていた。

御剣は周りに人の気配がないことを確認すると、ようやく美雪の腕を解放した。

「まったく・・・何なのよ・・・いつもの御剣君らしくない・・・。」
優紀は未だに困惑していた。かなり強い力で握られていたのか、彼女は自分の手首をさする腕を止めない。

そんな彼女を見て御剣は少し後ろめたい思いにとらわれたが、意を決して口を開いた。

「最近病院に行ったか？」

優紀の手が止まった。

彼女は御剣を見上げる、それは驚愕の眼差しだった。

そして、その目がすべてを物語っていた。

「行っただな？怪我か？なんかの病気か？」

優紀は再びうつむいてしまった。その口からは何の言葉も出てこない。何かを隠しているのか、それとも言うべきか言わないべきか決めかねているか、そんな表情にみえた。

「言えよ。医者には何を言われた？」

それでも御剣は聞きたかった。

・・・自分が近い将来この世からいなくなってしまうことを知っているかどうかを・・・。

優紀の背後にあるのは”死の気配”だったのだ。御剣は完全な死神でないために死の運命にあるものが、その命を散らす半年から3

ヶ月前にならいと分からなくなっているのだ。

彼は多くの死を見てきた。

親しいものの死、そうでないものの死、肉親の死を。皆、死ぬ前には今の優紀と同じ、背後に”死の気配”を背負っていた。

そうして、いずれはそういう者達に死の告知をしなければならぬ。

彼の周りには常に死がまとわりついている。それも、死神として背負うことを余儀なくされた運命なのだ。

「……心臓……」

うつむきながらもようやく優紀は口を開いた。

御剣は、ドキリとした。その声は、まるで死者の声のように感じられたからだ。

「心臓の病気だって……。後、半年持たないんじゃないかって……。」

優紀の声は今にも泣きそうだった。

なんとということだ……。

世界が足下から沈んでいくような……、すべての終わりが訪れたような……。そんな思いが御剣を包み込む。

力の抜けきつた足を引きずりながらも彼は優紀に歩み寄っていく。「だめなのか……？もう、助からないのか……？」

それは、彼本人が一番よく知っている。それでも、彼は聞かずにおれなかった。

御剣は、優紀の肩をつかんだ。その力があまりにも強いものだったので、優紀は顔をしかめるが、御剣はその手をゆるめようとしない。優紀は彼の必死な気持ちを感じ取った。

しかし、彼女はもう偽ることはできなかった。

「……うん……。もう、だめなんだって……。」

受け入れるしかない。彼女はいつもそう自分に言い聞かせてきた。そうしないと悲しみの奥底に沈み込んでしまう気がするから。

優紀の肩にかけられた手の力が次第に抜けていく。

去年の体育祭。来年こそは優勝しようと言ったとき、彼女が一瞬見せた悲しそうな顔。走ることが好きなくせに走るとすぐに息切れしていた彼女。先のことより、今の一瞬を大切にしたいといつも言っていた。

そうだったのだな。すでに彼女はそこから知っていたのだな。「いつから……、知ってたんだ？」

「一昨年……。貧血で倒れたとき……。」
御剣は思い出した。体育の時間の時確かに彼女は一度貧血で倒れている。そんな時から優紀は自分の死を自覚し、それでも前向きに生きていこうとしていたのか。

御剣は、脱力するように肩から手をおろした。

「お前は強いな。」

今度は、優紀の目をしっかりと見つめてそういった。

「そんなんじゃないよ。ただ、あきらめてるだけ。私、強くなんかない。私は、臆病なの……。」

（私にもう少しだけ勇気があれば、きっと私の思いを伝えている。だけど……。だめなの。）

（あきらめる……。そうか。俺もあきらめていたのか……。運命だと言ってしまうえば楽なもの……。）

思いが交錯する。

静寂があたりを包む。始業のベルはとっくに鳴った後で、彼らの周りに人はいない。

たとえ、人がいたとしても二人は気が付かなかっただろう。

事実、二人は気が付かなかった。物陰で二人の話を聞いていた者の存在に……。

夕日に染まる校庭。

後20分もすれば夜のとばりがあたりを覆い尽くすだろう。

日に日に長くなつていく太陽もまだまだ短い。

今日は夕方ぶりに暖かく、まるで春の日のように過ごしやすいかった。春も近いことを彷彿とさせるような一日だった。

「ん？」

御剣はふと校庭を見た。既に部活の終了の時は過ぎているというのに、まだ誰かが校庭を走っているのだろうか。長々とした夕日の影が校庭を駆け抜けている。

「あれ？塔矢じゃねえか・・・」

夕日に照らされてはつきりとは見えないが、そこにいるのは確かに塔矢だった。

彼はまるで何かに取り憑かれたかのようにひたすらに足をふるっている。

「おーい！塔矢！」

御剣はそんな彼に届くほどの大きな声を張り上げた。

「???？ああ、なんや。御剣かいな。」

しばらくあたりをぼかんと見回していた塔矢は彼を確認すると表情を和らげ、歩み寄ってきた。

「どうしたんだ？もうこんな時間だぜ。」

荒い息をつきつつ首にかけたタオルで汗をぬぐっていた塔矢はそんな彼の一言を聞くと不思議そうな顔で校舎の時計を見上げた。

「なんや・・・もうこんな時間やったんか。もう、誰もおらへんやん。」

「ずいぶん走り込んでいたんだな？何かあったのか？」

普段の塔矢はだいたい部活終了時間になるとさっさと切り上げて帰る準備をしているはずだ。

それが今日に限ってこんな遅くまで、しかも時間を忘れ、周りの者達が帰ってゆくことさえも気がつかなかったということは、何かあったのではないかと思つのは当然だろう。

「んー。まあな・・・。そついうお前こそ今日は遅いんやな？」

彼は曖昧に答えると、すぐに話題を変えるように口を開いた。

「今日は図書館で調べものをしてたんだよ。」

御剣は嘘は言っていない。

「勉強熱心なことやな……。」

塔矢はしばらく西の空に輝く夕日に目を馳せた。

「そうや、久しぶりに一緒に帰らへんか？話しときたいこともあるよって。」

塔矢は思いついたような表情を一瞬浮かべると、さらに話題を変えろ。

『話しておきたいこと？』

御剣は首をひねった。彼にはそんな心当たりはない。普段からお互いに思ったことは言い合っている仲だから今更話することなどないはずだ。

「ああ、いいぜ。」

しかし、塔矢がここまでして話しておきたいのであれば御剣には断る理由などない。

「すまん。ほな、ひとつ走り着替えてくるわ。少し待っててや。」

塔矢は駆け出すと部の更衣室に向かっていった。

「ゆっくりでいいかなら。」

しばらくして塔矢は大きなスポーツバックを肩に提げながら戻ってきた。

「ほな。行こか。」

「ああ。」

夕日も沈み、彼らの周りには黄昏の気配が漂い始めていた。

「……。」
二人の歩調はひどくゆっくりとして、お互いに口を開こうとしない。

ようやく灯り始めた街灯はまるでそんな闇に穴を穿つよう……。

「なあ？」

その沈黙を破ったのは御剣だった。

「ん？」

塔矢はふと御剣のほうをみた。

「黄昏」は「誰彼」とも書く。御剣はその文字通り、今塔矢がどんな表情をしているのかを察することはできなかった。

「何か話があったんじゃないのか？」

「ん？そうやったか？」

塔矢はわざと目をそらした。その目の先に映るものは真つ暗な夜空なのか、それともまったく別のものだったのだろうか……。

「はぐらかすなよ。」

御剣は少しいらだつたような口調で問いつめる。これだけは聞いておかなければならない。なぜかそんな気がするように思えてならなかった。

「そつやなあ……さーて。どう切り出したらええんやろな……。」

「

「お前らしくないな。」

「そつやな……俺らしくないか……。」

塔矢はしばらく俯いて黙っていた。まるで、いすべき言葉を必死にさがしているように。

「なあ、優紀のことなんやけど……。」

御剣はその言葉を耳にして心臓が跳ね上がる思いがした。

「優紀が……どうかしたのか？」

彼は冷静を装っていたが、果たしてそれが成功していたのだろうか。息苦しささえも呼び込む心臓の音はひどく彼から冷静さを奪っていった。

「優紀は……もう手遅れなんか？」

彼の言葉はあまりにもストレートだった。

『……ごまかしようがねえじゃねえか……』

御剣はうなだれるように視線を地面に落とす。

「……どうしてそれを？」

そして、ようやく絞り出した言葉がそれだけだった。

「聞いてしもつたんや・・・おまえらが話しとるところを。おまえらなんか変やつたからな。好奇心につられて・・・つい・・・ちゅうことや。」

「そうか・・・。」

確かに、塔矢だったらそうするだろう。いや、その方が塔矢らしい・・・。

「で、どうなんや？」

塔矢は既にその答えを知ってた。御剣が次に発する言葉さえも。しかし、それでも彼は聞かずにはおられなかった。

だから、御剣はもう隠したりしない。彼は意を決すると面を上げた。ようやく光りだした星の輝きをまぶしく感じながらようやく口を開く。

「後半年持たないかもしれないって・・・たぶん、3ヶ月か4ヶ月・・・もつと短いかもしれない・・・。」

口の中が急激に乾いていくような感覚が襲ってくる。

「そうか・・・。」

「ああ・・・。」

何か嫌なもののがど元からこみ上げてくる。

「あいつは強情で意地っ張りやからな・・・ほんまに可愛げのないやつや。」

「そうだな。」

痛みが体中を駆けめぐるようだった。

「やけど・・・退屈はせえへんかったな。」

塔矢はふつと表情をゆるめた。

「・・・。」

御剣は答えなかった。

「なあ？そうやるう？」

塔矢も分っていた。こんなことを言われても返す言葉など見つかるはずもないということが。

「ああ……。まったくだ……。退屈しなかった。いつでも笑ってられたよな。」

御剣は齒を食いしぼるように目を伏せた。

二人の脳裏には今、何が映し出されているのだろうか？

優紀の笑顔？彼女と過ごした思い出？そのすべてだったのかもしれない。

塔矢は空を見上げた。月の出を待ちわびるかのような宵闇が支配する空。

「後3、4ヶ月か……。きついなあ……。」

御剣もそんな彼につられるように空を見上げた。星々はまるで月の姿を待ちわびるように淡く切ない光を大地に与えてるだけだった。

「……………」

御剣は何も言えず、ただ夜空を見上げるだけだった。

「あかんな……。俺は……。そんなこと知ってもたらあかんわ……。」

「……………」

「そうか？」

ふと、御剣は塔矢のほうをみた。ますます濃くなっていく闇の中で彼は大きいため息をついていた。

「まったく……。なんでやねん……。何であいつが死なんとあかんのや……。優紀やで……。あいつは……。優紀なんやで。」

御剣は塔矢の心の声を聞いた気がした。なんのことはない、御剣も今まさにそんな心境だったからだ。

「なあ？」

御剣は言葉を発する。

「なんや？」

「後、3ヶ月か4ヶ月間……。あいつと楽しくすごそうな……。」

「……………」

「最後なんだ、いい思い出を作ろうな……。」

塔矢は黙って彼を見つめた。そして、ふっと笑みを漏らすと深く頷く。

「そつやな・・・楽しくやれたら・・・ええな・・・。」
一陣の寒々しい風が春の気配を吹きとばすかのようになげ抜けて
いった。

聖イストラフェル学園付属病院。

優紀は春の夜空を見上げていた。星空に月が浮かぶだけの、他愛
のない情景だったが、彼女はこれが好きだった。

今、彼女は定期検査のために入院している。

薬の影響で今夜は寝つけられないだろうと担当医も言っていた。

その言葉通りにまったく眠ることができなかった。彼女は仕方なし
に夜の病院を歩き回っていたのだ。

深夜2：45。

宿直の看護婦がたまに廊下を歩く音だけで、あたりは静寂に包ま
れている。

優紀の病室は鈴音の病室から一つ上の階なので、たまに遊びに行
ったりもしていた。

その時に話題になるのは、専ら御剣のことなのだが・・・。

「はあ・・・。」

夜の闇に沈む中庭を見下ろし、優紀はため息をついた。

一人でいると、自然とため息をつく回数が多くなってしまふ。特
に、病院というのは自分の気を滅入らせる空間のように思えてしま
う。

昼間であれば多くの患者がリフレッシュのためによく中庭にいる
のだが。今は誰もいない。

・・・いや、今何かの影が動いたような気がする。

「・・・人・・・？」

優紀は窓を開くと身を乗り出してそれを確かめようとした。夜の
ひんやりとした風が肌に気持ち良かった。

よくよく目をこらすと確かに人ようだ、真つ暗でよく分からないし足音も聞こえないが誰かが中庭を歩いているように見える。

しかし、その姿は全身に黒い衣服をまとい、夜の闇に完全に紛れてしまっている。

「私みたいな人がいるってことかしら？」

一陣の風が木々を揺らし、それによつて遮られていた月の光が中庭を一瞬照らし出した。そこに映ったのは……、

「……御剣君？どうしてここに？」

見まごうはずもない。まるで人としての感情が欠落しているかのような表情を浮かべていた黒い影。それは御剣だった。

そして彼は屋上を見上げる。その先には何があるというのか……。その視線の先に一瞬気をとられた時だった。

「……?!」

優紀は息を呑む。

今までそこにたたずんでいたはずの彼の姿は煙のように消え去っていた。一瞬の出来事に彼女は驚愕し思考が止まってしまいそうだった。

「……え？ど、どこに……？」

それでも何とか動いている思考を呼び戻し、そして気がつけば別館の屋上を見上げていた。

そこには、月を背にして、黒いマントをなびかせ、手には大きな鎌のようなものを持った人間が立っていた。

それは、間違いなく御剣だった。

優紀は駆けだした。驚愕が身体を凌駕しているのか、胸が苦しくなることを少しの間忘れることができた。

なぜ、彼がここにいるのか。どうして急に煙のように消えてしまいい、今屋上にいるのか。そんな疑問も今ではどうでもいい。

別館への渡り廊下はいつも開いている。

彼女は、なぜ彼がここにいるのか確かめたいという思いに駆られてただ走り続けていた。

別館の屋上。御剣はそこにたたずんでいた。ただし、その身を死神に明け渡して……。

今夜も一つの魂を天へと返した。その帰る途中彼は見たのだ、確かにここ、屋上に”何か”がいた。

御剣はその姿を思い浮かべる。それは、赤い衣服を身にまとい、ただ彼を見下ろしていただけだった。しかし、その雰囲気は明らかにこの世のものではないように感じられた。

「今のは、いつたい……。」

御剣は肩に乗っているミカエルにそつと話しかけた。ミカエルはうなずくと、

「あれが、悪夢だ。」

憎々しげに吐き捨てた。

「悪夢……。さっきのが……?」

ミカエルは無言でうなずいた。

「悪夢とは死神の敵。これは以前にも話したな。」

「ああ。それしか知らない。」

ミカエルは御剣の肩にうずくまると空を見上げた。煌々とした光を大地にたたえる月が彼らを見下ろしていた。

「そうだな。奴も姿を現した。そろそろ話すべきなのかもしれぬな。」

「……。」

御剣も空を見上げた。

「悪夢とは死神とはまったく逆の存在なのだ。」

「逆の存在?」

「うむ……。死神が死にゆく者の魂をその肉体より刈り取り、生きるべき者を死の運命から救うことを生業としている。悪夢とはそのまったく逆なのだ。」

「死にゆくものの魂をこの世に押しとどめ、生きるべきものに言われない死を与える存在・・・ということか？」

「その通りだ。」

夜の静寂が二人を覆い隠す。

ふと、ミカエルは耳を立てた。

「誰か、人が来るみたいだぞ。」

御剣は笑って、

「大丈夫だろう？ どうせ、見えねえんだ・・・どうってことねえよ。」

「だが、それが死に行くものだったらどうする？」

死に行くものは、より死神に近い存在であり、そのものであれば、死神の存在を感じることができるといえる。しかし、御剣は自嘲的に笑う。

「だったら、死の告知をすればいいさ。いつも通りに・・・。」

ガチャリという音とともにドアが開かれた。御剣は目をゆつくりと向ける。そこに立っていたのは・・・。

「・・・！優紀・・・。」

そこに立っていたのは、紛れもない優紀だった。そして、優紀は驚愕の眼差しを御剣に向けていた。

「やっぱり、御剣君だ・・・どうして？ 中庭にいたと思ったらいきなり・・・。それにミカエルちゃんも。」

ミカエルは御剣の肩から降りて地面にたつた。そして、優紀を見上げるとゆつくりと語り出す。

「そろそろ本当のことを話すべきかな。お嬢ちゃん。」

優紀は、「きゃっ」と少し後ずさりした。

「ミカエルちゃんがしゃべった？」

ミカエルは、そんな優紀の態度を見て薄い笑みを浮かべると、

「私は猫ではない。今は猫の姿をしているが。そして、ここにいる御剣もまた普段の御剣とは別物だ。」

優紀は何がなんだか分からないという風な表情をしている。

「もついいよ。ミカエル。俺が言うから。」

御剣は、ミカエルを抱え自分の肩に乗せた。闇夜のように黒い彼の体毛がマントと合わせて彼の肩と一体となる。

「今まで黙っていてすまなかったな。俺は、俺は本当は……。」
優紀は目をそらさなかった。いや、そらすことができなかった。
今日をそらせたら、これからずっと彼から逃げ続けなければならい。そう思えたからだ。

しかし、彼女の心は叫び声をあげていた。

……いやだ、それ以上は聞きたくない！やめて、お願いだから……！

流れ落ちそうになる涙を彼女は必死になって押しとどめた。

しかし、御剣はやめなかった。

「俺は……死神なんだ。」

普段なら、笑ってすませられたかもしれない。しかし、そうできなかった。笑い事ですませられるのであればそれに越したことはないのだろう。

「どうして……?」

優紀は自然とそう言葉を発していた。なぜ?ではなかった。彼女にとって、それはもうどうでもいいことだった。

「どうして、御剣君なの?どうして、他の人じゃだめなの?」

それは、かつて御剣が思った同じことだった。

「分からないよ。だけど、俺だったんだ。それは、偽ることはできないよ。」

御剣はうつむいてしまった優紀の頬にそつと手を添えた。

「だけど。御剣君にだったら。御剣君の手にかかって死ぬるんだつた。私はそれでも……。」

優紀は御剣の手に自分の手を重ねると、ぎゅっとなつかんだ。今は、人間ではないからなのか。御剣の手はとても氷のように冷たい。

「そうではない。」

ミカエルは言った。

「死神というのは、人に死を与えるのがその役目なのではない。」

優紀は顔を上げた。

「だって、死神って……。」

「死神というのは、死に行く運命あるものの魂を肉体から刈り取り天へと返し、そして、生きるべきものを死の運命から救うのが本当の役割なのだ。」

御剣は、優紀の目をまっすぐ見つめた。

「大丈夫だよ、優紀。お前の魂は俺が天に送ってやるから……。」
それは、死神らしからぬ優しい声だった。

「うん……。」

優紀はそういつと御剣の胸に顔を埋めた。ひどく虚ろな感触。この感触が彼は人間ではなく死神なのだと言うことを物語る。

優紀は次第に意識がぼやけてくるのを感じ、そして、彼の胸の中で夢の世界へと落ち込んでいった。

「優紀。起きたら、おそらくこのことは忘れてるだろう。だけど、お前は最後まで一人じゃないんだ。それだけは分かってくれよな……。」

月は、山の向こうへと隠れつつある。これからいよいよ夜の闇が世界を支配する時間となるのだ。

御剣は、優紀を病室へと運ぶと、夜の闇にとけ込むように病院を後にした。

そう遠くない未来、私に死が訪れる。

そのことを知ったのはさほど昔のことではない。

しかし、それを肌で感じるようになったのはいつの日からだっただろうか。今になっては明瞭な答えが出てくることはない。

それを自覚したとき、私は途方にもない恐怖と絶望にうちひしがれ、人知れず涙を流したこともあった。

私がもう先が長くないことを告知したのは弟の優輔だった。優輔

にはどんなことでも、私に関する重要なことは偽りなく話してほしいといつも言っていた。

自分はそれを忠実に実行しただけだと、彼はいつていた。

だけど、私が優輔の立場だったら、私ははつきりと口にする事ができただろうか。血のつながった家族が、今、死の淵にたたさされているということ。・・・。

・・・できるはずがない。私は弱いから・・・。そして、私はその時初めて優輔は私より強いということ自覚した。だから、私は後悔しなかった。優輔に伝えてほしいと言ったことを。後悔したくなかった。

その日からかな。私の中で何かが変わったのは、御剣君のことをあきらめることができたのは。

御剣君には鈴音先輩がいる。わたしの入れる隙間など最初からなかったのだと。

優紀は虚ろな意識の中、そんなことを考えていた。それは、夢だったのかもしれない。

季節は夏。

7年の時を隔て、ようやくこの世界に姿を現した蝉たちが喚起の歌を歌い、草木は青々と茂る、生命あふれる季節となった。

しかし優紀の命は確実に終わりに向かいつつある。

生まれ出でる命と、散りゆく命。

それは一見背反しているようにも見えるが、実のところひどく酷似しているのではないだろうか？

優紀はゆっくりとベッドから起きあがった。二日ぶりだった、彼女がベッドから起きあがってきたのは・・・。

今日は、一学期の終了の日。学校は終業式が午前中であって午後からはそのまま夏休みにはいる。

解放される日だった。

「学校・・・いけないと・・・。」

最近は歩くことすらままならない。体力はもうほとんど残されていないのだ。

だが、

「何でだろ……。もう、怖くない……。」

死の足音を感じるにつれ、優紀は心が穏やかになっていくことを感じていた。これが、死ぬということなのかどうかは分からない。

だけど、いいような不安と恐怖にうちふるえていたあのころより今は幸せなのかもしれない。

優紀は重い身体を何とか動かして制服に着替えた。

もどかしく震える指。ボタンの一つをはめることすらできなくなつてゆく。

「あ、姉さん。今日は大丈夫なのか？」

部屋を出た優紀にはじめに話しかけたのは優輔だった。彼女をを哀れむのでもなく、特別視するのでもない。

今は彼のクールな態度が優紀に救いを与えている。だから彼女は笑うことができる。

「うん。大丈夫。それに今日は終業式だからね。」

気を抜けば砕けてしまいそうになる足を何とか動かして彼女は階段を下りようとする。優輔は、何も言わずごく自然にそれを助けた。

「あら、優紀。今日はいいの？」

リビングに入ると彼らの母親が笑顔で出迎えた。優紀は弱々しくもしつかりとうなずいた。

「そう……。」

一瞬、母親の見せた表情には深い悲しみが込められていた。その表情に優紀はやるせなくなる。こんな表情をさせているのは他でもない私なのだと。。。

優紀は、久しぶりに親子で朝食を取った。ほとんど食べ物を口にすることはできなかつたが……。それでも暖かい食卓だった。

「姉さん。俺、姉さんの学校を受けることにしたから。」

優輔は今年高校受験を控えていた。このことは母親ともよく相談

して決めたことだ。少し高嶺の花だが、狙う価値はあるだろうと、今はここにいない父親がいつていた。

「そう……。優輔、だったら・大丈夫……。だと・思うわ。」
優紀は苦しそうに息継ぎをすると最後にがんばってねと言った。

優輔は、顔には出さないが、その言葉をとても嬉しく感じ、そして同時に悲しく思った。

とりとめのない会話を打ち切ったのは、呼び鈴の音だった。

「御剣君が来たようね。」

母親は、そういうと玄関に赴いた。もう一度呼び鈴が鳴らされると、玄関のドアが開かれる音がして、”おはようございます”という御剣の音がリビングにも響いてきた。美雪は来ていないようだった。

「それじゃ。私、行くね……。」

優紀は優輔の手を借りて立ち上がり、鞆を取るとゆっくりとした歩調で玄関に歩いていった。

御剣と母親の助けを借りて靴を履く。二人は何の煩わしさも感じていない。

「さて。いくか。」

「うん！」

御剣は極力普段通りに振る舞おうとした。彼は目をそらしたかったのかもしれない、日に日に濃くなっていく優紀の死の気配から。

しかし……。御剣は思った。

「はあ、なんだが暑くなってきたわね。」

優紀は蝉の声を聞きながら、ぎらぎらと照りつける太陽を仰ぎ見ている。

御剣はもう一度思った。

……。見届けなくちゃいけない。最後まで……。逃げちゃいけないんだ！

優紀は御剣の腕にしがみつきのながらも何とか自分の足で坂道を歩いている。ときおり立ち止まりつつも二人は無言で歩き続けている。

言葉など必要なかった。

「御剣君。私・・・幸せだったのかな？」

坂が下り道にはいると、優紀は枯れそうな声でそうつぶやいた。

「・・・お前は、幸せだったのか？」

これから死に行く者が幸せなはずがない。御剣はそう思ったが、あえて口にしなかった。

「分からないけど。たぶん、もうそんなに時間はないと思うけど。

私・・・幸せなのかもしれないね・・・。何でだろう・・・？こんなに苦しいのに・・・こんなに辛いのに・・・もう・・・何もできないというのに・・・。」

今にずり落ちそうになる優紀の肩を抱くと、御剣はぐいっと自分のほうに抱き寄せた。

「幸せって・・・何だろうな・・・？」

御剣は優紀に聞こえないほどの小声でささやいた。優紀はそんな彼を見上げるが、彼は何も言わない。

優紀は立ち止まり、ゆっくりと深呼吸した。学校に行きたいという思いはある、しかし、もはや身体がついてこない。

(動いてよ・・・私の身体・・・。何で動いてくれないの・・・)

私は、学校に行きたいの。いきたいのよ・・・)

そんな思いもむなしく優紀は膝を折ってしまった。

蝉の声が途絶えた。

御剣も立ち止まり近くの木陰に優紀を座らせる。

「無理するなよ。明日から夏休みなんだから。今日は休めよ。」

優紀は”ありがとう・・・”と言いながら、それでも立ち上がった。御剣の腕にすべてを任せるように、弱々しく。

そんなことを言われれば、もう何も言えない。

「今日は、学校に行きたいの。今日だけは・・・。」

御剣は分かったよ、と言って再び歩き始めた。

「夏休み・・・なにしょっか？」

優紀は遠くを見るような目でそういった。

「お前はなにがしたい？」

それは、御剣の精一杯の言葉だった。

「海に行きたいな……。キャンプもしたいな……。それに……。」

「優紀は言った」もう一度、美雪ちゃんの手料理を食べたいな。」

もう、何も言えなくなった。人の死と向き合うと言うことはこれほどまでに辛いことだったのか。本当は自分は今まで許されないことをしてきたのではないか。

御剣は歯を食いしばっていた。

「そうだな。できるといいな……。」

学校が見え始めた。

「ほら。もう少しだぞ。」

周りにはちらほらと生徒の姿が見え始めているが、二人を見て変な顔をする者はいなかった。

二人は正門を抜け、前庭を横切り校舎に入った。二人のクラスは同じ校舎の三階にある。

優紀はようやくクラスに到着した。

「優紀！今日は大丈夫なんか？」

クラスにつくと、真っ先に塔矢が優紀に駆け寄ってきた。優紀は無言でうなずき返す。

「頼んだぞ。」

御剣は優紀を彼に預ける、塔矢も無言でうなずいた。

「なあ、塔矢。夏休みに入ったら優紀と一緒に海に行こうな。キャンプもしような。楽しいこといっぱいしよう。」

御剣は塔矢の背中に向かってそういった。

塔矢は振り向いて、

「ああ、そうやな。みんな一緒や。」

だが、彼らは分かっていたのかもしれない。その日はもう、永遠に訪れないということ。

それでも彼らは、いつかそんな日が来ることを願わずにはいられなかった。

御剣はきびすを返して自分の教室へ戻る。

「もう・・・今日が限界か・・・。優紀・・・。俺は・・・。すまない・・・。」

彼は人知れず目尻をぬぐった。

(4)

御剣はただ待つていた。目の前には手術中の赤いランプの灯った緊急治療室。

彼の横には、まるで何かに祈りを捧げているような、一つの親子の姿があつた。時計はすでに夕方を過ぎてしまったことを示している。真つ赤に燃える夕日が街を赤一色に染める時。

街が一日の終わりを自覚する時だ。

廊下には静寂のみが支配する、時計の秒針が時を切り刻む音すらもその静寂を強調するようである。

既に六時間が経過していた。

優紀が終業式の集会中に倒れ、ここ聖イスラフェル学園付属病院に運び込まれてから。

集会が行われていた体育館は一時騒然となった。何人もの生徒がたむろする中、優紀は担架で医務室に運ばれ、救急車を迎えることとなった。

魂の抜けたような青い顔をして倒れている優紀表情が御剣の脳裏から離れることはない。

また、死神の使命を果たさなければならぬときが来た。

彼は、死神の力を使い学校を抜け出し、今この治療室に前にいるのだ。

御剣はふと、横目で優紀の両親を見た。

優紀の母親と父親はお互いに手を取り合っていた。

優輔はただ窓の外をじつと眺めているだけで、何を考えているのか分からない。いや、もう何も考えていない、何も考えられないのかもしれない。

その窓の向こうでは細い雨が街を濡らしていく。まるでそれは空の流す涙のように思えてならなかった。

彼らは御剣に気づいている様子はない。それもそのはず、生きるべき者には今の御剣を意識することはできない。

御剣はすでに死神だった。そして、それは同時に認めたくないことすらも示唆していた。

・・・もう、優紀は帰ってこないのだということ・・・。

夕日が山の向こうに消えた。街を染めていた紅の光は次第に色を失い灰色となってゆく・・・。

・・・治療室のランプが消えた・・・。

夫婦ははつとして立ち上がり、優輔は初めて治療室の扉を見た。

重苦しい緊張が空間を埋め尽くす。一つの命が助かるか、それとも永遠に失われるか。その答えがいま、皆の前に下されようとしている。

扉がひどくゆっくりと開かれていく。それはさながら審判の門が開かれるような、異様な雰囲気醸し出していた。

優紀の母親は今にも気を失いそうな表情を隠さず、ただ、夫の手を握りしめるだけだった。

そして、優紀の父親もまたその手を強く、強く握り返した。

（神様、どうか優紀を助けてください。そのためなら私は何でもいたします。だから、どうか・・・。）

そんな心の思いが声となって彼の耳を振るわせる。

白衣をまとった医者が重苦しい表情を浮かべて現れ、三人の顔を順番に眺めた。ふと、御剣の顔も見たように思えたが、それは彼の気のせいだった。

さらなる静寂が流れる。時計の針もすでに音を消していた。

「・・・」臨終です・・・。

その言葉は静かに、それでいてはつきりと頭の中を駆けめぐっていく。

「……姉さん……。」

優輔はすべての力が抜けたように、どさつと椅子に崩れ落ちた。

「う、ううう……。うわああああ……。」

優紀の母親も髪をかきむしりその場に崩れ落ちた。

母親の慟哭だけが響く。

医者は一礼すると看護婦とともにその場を去った。その表情は一人の人間の命を取り留めることができなかった自分への怒りだったのか、それとも絶望だったのか。

医師も看護婦もまたあらゆる感情が入り交じった表情を浮かべていた。

御剣は何度これをかいま見てきたか。そのたびに彼の人としての心が傷つき、それでも死神である以上、真に悲しむことができない自分をなじった。

……悲しみと絶望が吹雪のごとく吹き荒れていた……。

治療室から出てきた彼らは皆、魂を抜かれたような顔をしていた。……優紀が死んだ……。

はたして彼らはそれを受け入れることができるのだろうか。

いや、それはもうすでに本人たちの問題であって他人が介入することではない。御剣は死神としてそう結論を下した。

『それでも、俺は死神の使命を果たさないと……。』

御剣は優紀の担当医と入れ違いに病室に入った。

看護婦が洗ったのだろうか？ 優紀はともきれいな顔をして眠っている。もう誰にも起こすことはできない。

死者とはどうしてこれほど穏やかな顔をしていられるのだろうか。これを見るだけでは、死というのは人間にとって唯一の安らぎな

のではないか。

そんなことすら彷彿とさせるほど優紀の表情は安らかだった。薄暗い病室の中、彼女の顔だけが薄ぼんやりと光っている。

見ると、カーテンの間からはわずかな月の光が差し込んでくる。星空に浮かぶ満月はなぜか寂しそうに大地を見下ろしているようだった。

御剣はそつと優紀のそばに近づいていった。

「優紀。起きろ。さあ、起きるんだ。」

まるで眠っている子供を起こすように、彼は優紀の亡骸に向かってそつと囁きかけた。

優紀は目を覚ました。そして呆然とした様子で身を起こした。その姿は虚ろで儂い。既にそれは優紀ではなかった。今の今まで優紀の中で息づいていた魂そのものだった。

「……私は……?」

寝ぼけたように優紀は視線をあちこち動かす、自分がどこにいるのかさえまだ理解していないようだった。

「私は……死んだのかな?」

理解できていることは、ひとえに自分は死んだのだという事実のみ。それを深層の中に理解させることが死神の行う死の告知なのだ。「そう。お前はさつき死んだ。」

優紀はその声に気付き。その声・御剣の方を向いた。

「御剣君……そつか、今は……死神なんだね。」

彼女はうつすらと笑っていた。

御剣はいぶかしがりながらも神妙な顔つきを保っていた。今、心を表に出してしまえば、おそらく、彼は逃げ出していただろう。

だから、心を露わにはいけないのだと、彼は自分に言い聞かせていた。

「お前の魂を天に帰すときが来たようだ。」

そんな思いを知ってか知らないでか、優紀は「うん!」とうなずいて今度ははつきりと笑みを浮かべた。

「・・・何で・・・そんなに笑っていられるんだ？」

御剣はついには、いたたまれない表情でそう聞いていた。

「分からないけど・・・。今は、笑っていたいの。だって、もう最後なんでしょう？」

御剣ははつきりとうなずいた。偽ることはもうできない。そのために彼はこうしてここにいるのだ。

優紀の魂を天へと返すために、彼はここにいるのだから・・・。

「だから、笑いたいの。泣いてお別れなんてそんなのいやだから・・・。」

心なしか、一瞬、優紀の表情に影が映った。

ああ・・・そうか・・・。

御剣は悟った。

「優紀・・・。」

その声は死神らしからぬ優しさに満ちていた。

「うん？」

彼女は小首をかしげた。

「最後に一つだけ望みを叶えてもいってことになってるんだ。何か思い残したことはあるか？」

優紀は少し考え、そして首を振った。

「もう、お別れはすましたから。だけど・・・。」

彼女はうつむいた。その顔に笑顔はない。

「泣けよ・・・。」

それは現実味を帯びた声となり、優紀の耳へと届いた。

「え？」

とっさにあげた顔、それには驚愕のまなざしが込められていた。

「自分を偽るなよ、最後の最後まで自分を押し隠そうとするな。もう・・・遠慮することはないんだ・・・。もう・・・無理に笑う必要はないんだ・・・。ここには、俺しかいない。」

御剣はそっと優紀の頬をなでた。その手は温かい。あの日、屋上でふれた彼はとても冷たかった。あのとき、彼は本当に死神だった

のだ。死神に人のぬくもりなどあるはずがない。

しかし、今は違う、それは本物の人のぬくもりだった。

そのぬくもりは優紀の心に深く浸透していく。

優紀はもう我慢ができなくなった。心のたががはずれ落ち、涙があふれ出してくる。

「御剣君・・・私・・・私、生きたいよ。もっと生きていたかった。」

優紀は御剣の胸に顔を押し当てる。

御剣はなぜか少し安心した。

最後の最後に彼は優紀の本当の姿を見ることができたのだからだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。

今はこの優紀を受け入れていたい。これが・・・最後のだから。御剣君と、美雪ちゃんと、塔矢と、もっといっしょに楽しく過ごしたかったよ。私は・・・私は・・・御剣君のことが好きだったの。ずっとずっと好きだったの。だけど言えなかった。それに、御剣君のそばにいられるのは私じゃないって分かったから・・・。」

もう止まらない・・・思いがあふれ出してくる。

それは幼い頃から自分の中にしまい込んできた暖かな思い。ときにはこれが彼女の重圧となつてのしかかっていたが。この思いには偽りはない。

優紀は、ようやくその思いを彼に告げることができたのだ。

御剣は何も言わず、ただ黙って優紀の頭をなでていた。

「ごめんね。いきなりこんなこと言つて。馬鹿ね、私・・・。死んでからじゃないと、本当に最後じゃないといえないなんて・・・。」

御剣はもう何も言えなかった。気づいていなかったわけではない。心の奥ではひよつとするとという思いもあった。

しかし、彼が選んだのは別の女性だったのだ。

だから彼は彼女の死んでもなお必死の思いに答えることはできなかった。

御剣の心で理不尽なまでの罪悪感が雪嵐のごとく荒れ狂う。

優紀は御剣の胸から離れた。そして言った。

「もう、送ってほしいな。このままじゃ、未練だけが残っちゃうよ。」

涙をぬぐいながらもその顔は笑顔に戻っている。いつも以上に穏やかで暖かな笑顔だ。

御剣はその笑顔を救いに思った。

「もう……いいのか？お前の願いは届いたか？」

「うん。お母さんにもお父さんにも優輔にも……みんなにお別れは言つてあるから……それに。私の思いは伝えたから……もう、いいよ。」

「分かった。……じゃあ……。さよならだ。」

御剣はマントの裏側から黒光りする巨大な鎌を取り出し、魂と肉体の間にそれをあてがった。これを引けば、優紀の魂は天へと帰ってゆく。この世に再び生まれ変わる希望を抱きながら。

鎌を握る手から今にも汗がにじみ出てきそうだった。

「さようなら……。御剣君。みんなによろしくね……。」

御剣は目を閉じた。彼の脳裏には優紀とともに過ごした思い出の日々が走馬燈のように駆けめぐってゆく。

ああ、そうだ……。優紀はいつも自分のそばにいて自分を見つめていてくれたのだ。

そんなことになぜ今まで気がつかなかったのだろうか？

なぜ、そんなことを忘れてしまっていたのだろうか？

しかし、彼は今はその思い出を捨てなければならなかった。そうしなければ、御剣は死神の使命を全うできないだろう。

今一時だけ御剣は彼女の優しさを忘れた。

「さようなら……。」

御剣の沈み込むような声を聞いて優紀は薄く苦笑いを浮かべた。

「……また、あえればいいね……。その時を楽しみにしているよ……。御剣君。今までありがとう……。」

一瞬の光のひらめき……。

優紀の輪郭は跡形もなく消えさってしまった。

後に残ったのは抜け殻となった肉体と夜の深い静寂のみだった。

「なあ、ミカエル……。」

ミカエルは病室の暗がりの中で息を潜めていた。

「死神は涙を流すこともできないのかな？」

僅かに残る人の心が御剣の中で悲しみのブリザードを吹き荒らしていた。しかし、彼は涙を流せなかった。

「それが死神の使命だ……。死神には本来悲しみなど無用なもの……。」

ミカエルの口調は変わることがなかった。

「そうか……。それが死神なんだな。だったら俺は、いつたいどうすればいいんだ？」

誰も答えを持っていない。ミカエルも何も言わない。

御剣は思った。どうして俺は死神なんだろう？

しかし、その答えは返ってくるはずもなかった。

その答えは彼の中にのみ存在するべき者だった。御剣はゆっくりと病院を後にした。

夜は更けていき、闇は街を支配する。

だが、朝の来ない夜がないように、やがて光が闇から街を解放するだろう。

しかし、御剣の中に生まれた闇は誰が消し去るのかだろうか……。

第二部（前書き）

requiem 完結部です。

第二部

第二部

明日への道 (road of tomorrow)

(1)

何もする気になれず、どこにも出かけていく気になれず、時には夜の街を飛び回り、そして空白のような朝を迎える。ただその繰り返し。

時に、自分は生きているのか死んでいるのか疑問に思ってしまう。御剣はそんな夏の日を過ごしていた。

美雪や塔矢がいなければ御剣は、とっくに精神を崩壊させていたかもしれない。

優紀は死んだ。

この世からいなくなってしまうと、誰の目にも届かない遠いところに行ってしまった。

理解してしまえば、それを認めるのはあっけないほど簡単だった。しかし、割り切ることなどできやしない。

目を閉じれば優紀の言葉がよみがえる、ベッドに入ればあの日の夢を見る。

『海に行きたいな……。キャンプもしたいな……。それに……。また、美雪ちゃんの手料理を食べたいな。』

『御剣君……。私、生きたいよ。もつと生きていたかった。』
そして、彼女の最後の言葉がよみがえる。

『御剣君と、美雪ちゃんと、塔矢と、もつといっしょに楽しく過ごしたかったよ。私は……。私は……。御剣君のことが好きだったの。』

ずっとずっと好きだったの。けど言えなかった。それに、御剣君のそばにいられるのは私じゃないって分かったから……。」

優紀は、自分は幸せかもしれないと言っていた。しかし、御剣にはなぜ彼女は幸せでいられたのか分からなかった。なぜ、自分が死ぬと分かっているなあ、自分は幸せだといえるのだ。

幸せとは、いったいなんなのだろうか？

御剣はあいてしまった穴をほじくり返すように自問自答を繰り返す。しかし、答えは出てくるはずもなかった。

その繰り返し。永遠に続く螺旋に落ち込んでいくようなたまらない虚脱感のみが彼の中に渦巻いているだけだった。

そうして、抜け殻のような夏休みがようやく終わった。

季節は秋、木々が夕日の色に染まり街は冬の到来を予感するように姿を変える。冬、街が眠りにつく季節、春の目覚めを夢見る季節。今の御剣もその時に生まれたのだった。

「お兄ちゃん。今日も学校休むの？」

制服に着替えた美雪が心配そうに御剣の部屋をのぞき込んだ。新学期が始まってすでに四日が経過していた。始業式以来、御剣はずっと学校を休んでいる。鈴音の見舞いにも行っていない。何もする気になれない。

しかし……、

「……分かったよ……。」

御剣は立ち上がった。ミカエルもベッドの下からはい出してきた。

「え？じゃあ。」

美雪の表情がぱつと明るくなった。

「……このまま家にいるより学校に行った方がましかな。」
時間は御剣の心を癒すことはなかった。

何を言おうとも優紀の魂を刈り取り天へと返したのは彼なのだか

ら。そして、ずっと彼女の気持ちを気づいてやれなかった。彼はずっとその罪悪感に身を陥れてきた。

「あ、そう。そういうこと。・・・私、階下で待ってるから。」
美雪は悲しそうな顔をして彼の部屋を出て行った。

「まったく。何やってんだろうな？俺は。」

御剣はため息をつきながら服を着替える。いつの間にかミカエルはベッドの下からはい出していた。

「逃げたい気持ちは分からないでもない。だが、それだけではいけないと言ふことだ。もっとも、死神の使命をこなしているのは感心だが。」

いやに、はつきりとした言葉でそう言う。

しかし、御剣は自嘲的な笑みを浮かべた。

「それをやめたら、本当に逃げることになっちまうからな。悲しいのは俺だけじゃないんだ。俺なんてまだましなほうなんだよな。」

御剣は緑野夫妻を思い浮かべた。彼らに比べればまだまだましだ・・・。御剣はそう思う。

やはり、本当に苦しいのは送った方でも送られた方でもない。残された者達なのだ。

「さて、行くか・・・。」

御剣はミカエルと共に部屋を後にした。

(今日あたり鈴音の見舞いにも行くかな。)

彼は、ただすがりたいたいものを必要としていたのかもしれない。

御剣と美雪は一緒にかつて優紀と共に歩いた坂道を二人で踏みしめていった。

夏の名残を残す蝉の声がやたらとうるさく感じられた。

御剣はふと後ろを振り返る。商店街に続く坂道の途中、残暑を物語る日の光がきらきらと照りつけていた。

「どうしたの？お兄ちゃん？」

御剣の少し前を歩いてきた美雪は立ち止まってしまった彼を見た。
「いや・・・別に・・・。」

御剣はそう言うが、美雪はなぜ彼が後ろを振り向いたかすぐに分かる。

「お兄ちゃん・・・。」

御剣は今にも泣きそうな表情を浮かべている美雪の頭をぽんぽんとなでると、行くぞ、と言って歩き出した。

美雪も、一人で登校していたとき、彼のようによく後ろを振り向いては涙を流していた。

優紀を失った。それがこの二人の心にどれだけ大きな穴を穿ったのか計り知れない。

二人は何もしゃべらずにただ歩いていくだけだった。

「そつだ・・・。放課後、鈴音の見舞いに行くけど。美雪はどうする？」

そつ御剣が話したのは商店街を抜けたところだった。二人と同じ制服を着た学生が目立ってくる。

「鈴音お姉ちゃんの？・・・うん！行く。」

美雪は夏休み以来ずっと彼と一緒に、鈴音のところに行っていないので、彼女になら御剣を元に戻してくれるのではないかと思うと嬉しくなり、何よりもそれが御剣の口から聞いたことが喜ばしいことだった。

「ずつと美雪一人で行ってたんだよ。」

美雪はわざとすねたようにいうが、

「鈴音はなんて言ってた？」

御剣は彼女の方を向かずにそう聞いた。そう聞くのが照れくさいのだろうか？美雪がふと彼を見ると、心なしか頬に赤みがさしているような気がした。

美雪はイタズラっぽい笑みを浮かべると、

「お兄ちゃんに会いたいわって。話がしたいなあって言ってたよ。鈴音

お姉ちゃんも寂しいんじゃないかな。だから、お兄ちゃんが顔を出してあげると、きつと喜ぶだろうなあ。鈴音お姉ちゃん、お兄ちゃんのこと……。」

御剣の性格をよく知っている彼女は次から次へと言葉をつむぎだしていく。

「もういいって……。」

御剣は恥ずかしそうに美雪の口をふさいだ。

「へへ……。」

こんな会話をするのもとても久しぶりで、美雪は本当に嬉しかった。美雪にとつて御剣とこうしていられるだけで幸せになれる。だから、彼がふさぎ込んでいたとき、美雪はとても悲しかった。その思いがあふれそうになって……。美雪は御剣に気づかれないうちに、そつと目頭を拭った。

そんな他愛もない会話を交わしながら、彼らは学校に到着した。時間にはまだまだ余裕があるらしくて、走っている学生は今のところ一人もいない。

「じゃあ、放課後、校門でな。」

進級した二人のクラスは違う校舎にある。

「うん。じゃあ。また。」

美雪も三年には受験があるため、進級してからは邪魔しないようにと、御剣と一緒に食事をすることは控えるつもりらしい。

予鈴がなった。部活の朝練を切り上げて校舎に向かうものも学生の集団に混じり始める。

「あ、いけない……。」

美雪は御剣を見送るのに気を取られていて、時間を忘れていた。彼女は駆け出し、校舎にはいる。

（鈴音お姉ちゃんだったら、きつとお兄ちゃんを元気にしてくれるよね。）

美雪は久しぶりに晴れ晴れとした気分で教室に入った。

夕立のような通り雨がすぎた後、空は真っ赤な夕焼けに染まっていた。

美雪は空を仰ぎながら大きく深呼吸をした。

「はー。気持ちいいね。それに、きれいな夕日・・・」

「そうだな・・・。」

御剣も空を見上げた。彼は、休み時間に聞いた塔矢の言葉を思い出していた。

「今でも信じられへんのや。優紀が死んだゆうことが・・・なんか、朝、教室に入ったら『おはよう!』って・・・言ってくるんじゃないかって。いつも通りによ・・・あの、あけっぴるな顔で言うんやで。せやけど・・・優紀はおらんのや。自分でも阿呆やと思うけど・・・毎日毎日あいつの姿をさがしてまうんや・・・。」

塔矢の悲痛な言葉は御剣の心を締め付ける。そして、彼は気づいた。悲しいのは自分だけじゃないんだと言うことを。

「お兄ちゃん？」

気がつくとも美雪は御剣の顔をのぞき込んでいた。

「ん？どうした？」

御剣は何事もなかったように問い返した。今は、誰にも自分の心の内を明かしたくなかった。たとえそれが、美雪であっても。

「うつん。何でもないよ・・・。」

美雪はうつむいてしまった。僅かながら、彼の思いが伝わってしまったのか、彼女は悲しそうな顔をしていた。

御剣はそんな美雪に罪悪感を感じながらも歩くペースを変えたりしなかった。

彼らはゆつくりと病院に、鈴音の入院する聖イスラフェル学園付属病院に向かう道を歩いていた。

「お兄ちゃん。」

「なんだ？」

突然、美雪は口火を切った。

「人が死ぬのって、いやだよ。悲しいよね。」

美雪はうつむいて、独り言を言うように話し出した。

「いきなりどうしたんだ？」

美雪が普段こんなことを口にするのではない。御剣は驚いた。

「もし、もしだよ……。これから死んじゃう人をこの世に押しとどめられるとしたら……。お兄ちゃんはどうする？」

御剣は”馬鹿なこと聞くなよ……”と、言おうとして、美雪を見る。しかし、その言葉は押しとどめられた。

今の御剣は、とてもそんなことを言ってはぐらかせるようなことはできないと悟った。美雪はいつもの彼女からは想像もできないほど、ひどく真剣で悲しい顔をしていた。その横顔は夕日も相まってゾクツとするほど美しい。それは、まるで、この世のものではないような。とても儂い……。

御剣はそんな彼女から目をそらしつつも考えた。

「そうだな。それでも、俺は……。」

御剣は優紀の最後の言葉を思い出す。優紀も死に行く者でありながら、まだ生きていたかったと言っていた。

もし、あのとき優紀をこの世に押しとどめられたとしても……

彼は……。

「俺は、たぶん。押しとどめたりしないと思う……。」

そう、それが彼の答えだった。

御剣は死神なのだ。もし彼が、死ぬべきものをこの世に押しとどめてしまえば、それは、自らの存在を否定することになる。

だが、その答えは、それ以上の意味を含んでいたのだった。御剣は今気づかなくとも、後でそう思うことになる。

「親しい人でも？」

美雪は彼の横顔を見た。御剣はゆっくりと頷いた。

「そう、だよ。お兄ちゃんだったらそう言うよね。だって、お兄ちゃんは……。」

御剣はドキリとした。まさか・・・美雪・・・

「美雪、お前、ひよつとして・・・。」

俺の正体を知っているのか？と言いきりそうになったが、

「あ、病院が見えたよ。」

しかし、その言葉に押しとどめられてしまった。

美雪は言ったその場で駆けだしていたのだ。

「おい、美雪・・・。」

御剣は肩すかしを食らったように、間抜けな顔をしていた。今日の美雪は何か変だ。

だが、どこが変なのか？と聞かれれば首をかしげてしまう。変と言うよりは少し奇妙なのだ、彼女の放つ雰囲気だ。

「お兄ちゃん。早く！」

しかし、今の美雪はいつもの美雪に戻っていた。

「やれやれ・・・。仕方ないな・・・。」

御剣は頬をかきながら苦笑し、少し早足で歩き出した。

彼はここで一つの大きな決断をしたのだ。今はまだそれが大きな意味を持つことはない。

しかし、それは後に重大な意味を持つことになるのだ。御剣にも美雪にも鈴音にも、そして、今はなき優紀にさえも・・・。

病院の中は以外と静かだった。元々外来の患者をあまり扱っていないので、休日もさほど人がいるわけではなかったが、この日は特に少なかったように思える。

「なんだか、寂しい感じがするね。」

がらんとしたロビーを見回して美雪はそうつぶやいた。

「そうだな。なんか、こういうのを見ると、病院だなんて感じしねえか？」

御剣は窓口に向かいながらそう言うと、美雪もつなずいて。

「確かに……。」
と答えた。

「すみません。」

御剣は窓口のアクリル樹脂製の窓を叩く。程なくして、一人の担当員が顔を見せた。

「いかが致しました？」

愛想のいい笑みを浮かべ、担当員の女性は答えた。いつも、ここに来ると彼女と顔を合わせるが、彼女の態度はいつも変わらない。

「203号室の倉前鈴音さんと面会がしたいんですけど。」

「それでは、ここに名前を書いてください。」

彼女はバインダーを差し出した。御剣はそこに自分の名前を記入する。見ると、今日は面会する人も少ないようで、彼の名前の上には数名の名前しか書かれていなかった。

「そういえば、今日は、あまり人がいないみたいだけど。」

バインダーを返しながら御剣はそう言った。

「そうですね。今日は外泊の患者さんも多いですし、内科以外の医師もまとめて休暇をとる時期ですし。」

名前をチェックしながらも彼女はしっかりと受け答えをしている。
「ふーん。」

”もともと外来の方をあまり扱っていませんしね”と、最後に付け加えると、またにっこりと笑い御剣に病棟の案内図を手渡した。

「面会時間は午後5：00までとなっています。重症の患者さんもありますから、院内はお静かにお願ひしますね。それでは、どうぞ。」

御剣はありがとうと告げると、美雪を呼んで鈴音の部屋に行くことにした。

「いい人だね。」

美雪は窓口を見ながらそう言った。

「そうだな。」

御剣は適当に答えて足を進めた。

しばらく病院の通路を歩きながら周りを見回した。たしかに、外

科の方にはほとんど人はいないが、内科の方にはそこそこ人はいるらしい。

御剣は立ち止まった。そして、一つの部屋を見つめる。

「……？どうしたの？お兄ちゃん？」

美雪は怪訝そうな顔を浮かべ、彼に歩み寄った。

「……。」

御剣はただ無言で一つの扉を見つめていた。

緊急治療室とかかれた部屋、今はそのランプは灯っていないが、御剣はこのランプが灯っていたときのことを知っている。

「ねえ。どうしたのってば。」

美雪は焦れたように彼の裾を引き始めた。

「優紀が居なくなつたところだ……。」

静かに、そして、重々しく御剣はつぶやいた。

美雪は、はっと目を見開きその扉を見つめた。

御剣が審判の門と称した扉。御剣が優紀の魂を天に帰した場所だった。

「優紀お姉ちゃん。」

美雪は手のひらで口を覆い隠した。目には僅かに涙が浮かんでいく。

御剣は目を閉じた。その向こうには優紀の姿が映っていた。

笑っている優紀、拗ねた優紀、怒った優紀、苦しそうにしている優紀、そして、最後の優紀。それらすべてが浮かんでは消えていった。

（だけど、楽しかったよな。優紀。いい思い出だったよな。）

『そうよ。御剣君。私は本当に幸せだったんだから。だから、御剣君もそんなに悲しまないで。あなたが幸せだったら私は満足なんだから……。』

御剣はそんな声を聞いた気がした。

彼は目を開き、美雪の肩に手を置いた。

「……お兄ちゃん……。」

美雪はまだ悲しそうな目を彼に向けていた。御剣はもう迷うことはやめようと思った。もう十分に迷った。だから、これからは前を見て歩こう。今ならそう思えるような気がした。

「行こう、鈴音が待ってるよ。」

美雪はうなずき、肩におかれた御剣の手をそつと握った。暖かい・・・このぬくもりがあれば美雪はまた元気になれる。

「そうだね。」

二人はまた歩き出した。誰もいない、静寂に包まれた病院をただ二人で、ある意味これから起こる二人の運命を示唆するように。

二人は歩き出した。

もう、立ち止まることも引き返すこともできない。

二人はやがて来るその時に向かってゆっくりと歩み寄っていった。

夕日の沈んだ街は次第に暗くなっていった。秋の夕日はつるべ落としのように早く沈むと、昔の人はうまいことを言ったものだ。

鈴音はふと気がついた。

いつの間にか部屋は黄昏に満ちていて、手元の文字が読みにくくなっていった。

「・・・真つ暗・・・」

鈴音はため息をつきながら枕元のスタンドと部屋の電灯のスイッチに手を伸ばし、ひもを引いた。蛍光灯は2、3回瞬くと明るく灯った。

そして、立ち上がりとブラインドを閉じた。

「よし・・・」

彼女は安心したらしく、ベッドに戻るとまた手元の本に目を落とした。今日は検温も診察もないから後はこのまま食事を終えて眠るだけだ。

彼女は今『カサレリアの小春』という長編物語を読んでいる。母

親が持つてきてくれた物だ。見ると本棚にも分厚い本が3、4冊積まれている。彼女の読書好きは相変わらぬようだ。特に最近はその量も増えている。その理由もまた明白なのかもしれない。

鈴音がページをめくろうとしたところで部屋に扉のノック音が響いた。

(だれかしら・・・)

彼女はふと時計を見つめた。4：10を少しすぎたところだ。面会時間も後1時間弱ほどしか残っていない。

彼女は本を閉じると僅かな期待を抱きつつ、

「どうぞ。」

と返事をした。

「失礼するよ。」

「失礼しまーす。」

という仲の良い声と共に見慣れた兄妹が顔を見せた。

その二人の顔を見た鈴音はまるで日の光が差し込んだようにパァーッとした笑みを浮かべた。

そこには御剣と美雪がたっていた。

「御剣君！久しぶりだねえ。」

今までの雰囲気など知らぬ空の彼方へ吹き飛んだともいうほどの、鈴音はうれしさでいっぱいだった。

御剣はほっとしたように破顔すると、ベッドのそばに歩み寄り、「そうだな。すまなかつたな。ずっと来なくて。」

美雪もニコニコとした笑顔で彼に続く、

「いいよ。今日来てくれたんだもの・・・それに・・・。」

あんなことがあったんだら、仕方ないよね。という言葉で鈴音は飲み込んだ。

「あ、そうだ！」

御剣はいきなり叫んだ。あまりに急だったので、鈴音は目を丸くする。

「ど、どうしたの？」

鈴音は不安そうな光を瞳に宿しながら御剣を見上げた。

「今日、何も持ってこなかった……。まずったな……。」

鈴音は”ああ”とうなずくとにこにここと屈託のない笑みを浮かべると、

「いいよ。そんなの。二人が来てくれることが一番うれしいことだから。」

御剣は”そうか”と答えると、

「そういう鈴音もなんだか嬉しそうだな。何かあったのか？」

いつもとは少し違う彼女の雰囲気を感じたのかそんなことを聞いた。

鈴音は一瞬きよんとするが、とたんに子供のようにくしゃっと表情を崩した。

「やっぱり分かつちやうかなあ。」

「お兄ちゃんだからね。」

美雪はいつのまにか椅子を見つけてそれに座っていた。

「おいおい。それはどういう意味だよ。」

御剣は嬉しそうな顔をしながらそう言った、

「別に。そのままの意味だけだよ。」

美雪は鼻歌を歌うようなリズムでそう言った。まるでイタズラ好きの小悪魔のような笑みだ。

「わけわからねえよ。」

言葉はつつけどんだが、彼の表情を見る限り真実ではないことは明白だ。

「そんなことより、お姉ちゃんの聞こうよ。」

「そうね。言ってもいいかしら。」

ベッドの上でその対話を楽しそうに見ていた鈴音がくすくすと笑いながらそう言う。

「ああ、そうだな。で、何なんだ？」

ほっとしたように御剣は鈴音を見た。

「実はね……。」

思わせぶりの笑みで彼女は二人の顔を見た。

「……………」

二人はまさに興味津々な目を向けている。聞きたくてしょうがない。早く聞かせて。と、さすが兄妹、同じような目をしている。

「実は……………」

二人は身を乗り出してきた。

「はやく言っちゃえよ。」

「そうよ。言ったら楽になるよ。」

美雪がそう言つと御剣は”たはっ”と息を吐き出すと、

「それは尋問の時に使う言葉だ。」

「別にいいじゃない。お兄ちゃんはいつも細かいんだから。」

「いつもって…………。そんなことねえよ。」

「ふーん。そうなんだ…………。」

お互いに唇を尖らせる二人、いつもの喧嘩になりそうだったが、

「あの…………、いつ言えばいいのかな…………。」

頬に手を添えながら鈴音は苦笑しながらそう言った。

「ああ、すまん。」

御剣は恥ずかしそうに鈴音の方を向く、

「お兄ちゃんが変なこと言つからだよ。」

「なにい！」

このままではエンドレスだ。鈴音は軽くため息をついた。あまりじらすのも考えものか、

「本当に御剣君と美雪ちゃんって仲がいいのね。」

彼女には兄妹がいないので少しうらやましい、

「そんなことない。」

「そんなことないもん。」

二人の声がシンク口した。まさにぴったりと。

二人はびっくりしたように顔を見合わせると、ブツと吹き出して笑った。鈴音もつられてくすぐすと笑い出した。

本当に、この二人といると悲しいとか辛いとか感じていた自分が

馬鹿に思えてしまう。鈴音は本当に二人に感謝していた。ある意味、彼女の命を救ったのは他でもない、御剣と美雪なのだから。

ひとしきり笑い合い、気がつくとすでに黄昏は過ぎ去り、外には月が出る前の宵闇が広がりつつあった。

ふと、外を眺めた鈴音は思わず息をのんだ。眼前に広がる闇がまるで自分の心を吸い込んでいくような……。

思わず窓から目をそらせた彼女は、二人の方を見て、口をゆるゆると開いた。

「外泊できることになったの。わたし……。」

そつと漏らすように、鈴音はつぶやいた。

「……え？」

美雪は、聞き返した。あまりにも唐突にそういわれて、心が置いてけぼりにされたような気がしたのだ。

「外泊……できるようになったのか?!」

御剣は、歓声を上げた。そう、それは、今まで鈴音が夢にまで見たことだった。いつも彼女は「いつか、本当に自分の足で地面を歩いてみたい。」と言っていた。

それは、いつしか彼女の夢だけでなく、御剣の夢にもなっていた。

「そう……できるようになったの……。」

鈴音は、穏やかな表情を御剣に向けた。御剣は何かしらの違和感を感じた。死の気配は……まだ鈴音の背後に漂っていない。しかし……、

「なんだが……。あまり嬉しくないみたいだね……。お姉ちゃん。」

美雪は御剣の思いを代弁するかのようにつぶやいた。

「えっ？」と言って、鈴音は美雪を見つめる。

「あ……ごめんね！そんなはずないよね、だって、ようやく外に出られるんだもんね！」

自分の言葉が鈴音を困らせたのかと思い、美雪はあわてて言い直

す。鈴音は、豆鉄砲を喰らったかのような、呆然とした表情のまま黙っていた。

「どうした？鈴音……。具合でも悪いのか？」

御剣も心配になってきたようだ。無理もない、いつもの鈴音ならこんな表情を浮かべるはずはない。御剣さえも見たことのない、彼女は、まるで人形のような表情を浮かべていた。

「あ……。いいえ。何でも……。ないわ……。」

鈴音も困惑していた。なぜ、どうして……。さっきまで私は、何を考えていたのかしら……。と。しかし、去って行ってしまったものを引き戻すことは無理だったようだ。

「そうか……。なら、いいんだけど……。」

御剣も首をかしげながらそういった。

「そうだ！美雪、いいこと考えちゃった！」

いきなり、美雪が叫んだ。美雪の前にいた御剣は、思わず”うおっ！”と叫び声をあげてしまった。鈴音も思わず目を白黒させた。「なんだよ？大声出して。」

いつもいつもこうだ、美雪は何か思いついたらどこであろうが、大声を上げる。

「あのね。あのね……。えつとね。」

はやく言いたい、このナイスなアイデアをはやく開かしたい。そう思えば思うほどつつかえて出てこない。

「まあ、落ち着いて。ね……。深呼吸してみる？」

子供をあやすように、鈴音は柔らかな笑みを美雪に向けた。

「うん……。」

美雪はスーハーと何度か深呼吸をすると、

「あのね。お姉ちゃんと美雪とお兄ちゃんの三人でデートするの。

街でお買い物して、ご飯食べて。それで、お泊まり会……。どうかな？」

御剣と鈴音は、お互いの顔を見つめ合うと、フツと表情を崩した。「いいかもしれないわね。」

「鈴音がいつていうだったらまあ。仕方ないかな……。」「
御剣はそういつているが、その顔を見ればまんざらでもなさそう
だ。」

「だったら約束だね。外泊する次の日。ってことで。」

「うんいいよ。そうしよう。」

鈴音はニコニコしながらいった。

「さて。そろそろ時間かな。」

御剣は病室の時計と自分の腕時計を見比べながらそうつぶやいた。

「もうそんな時間なんだ。」

「つい話し込んでしまったわね。」

鈴音も心なしか残念そうだ。

「それじゃ。そろそろ、おいとまするかな。」

御剣は頬をほりほりとかきながらつぶやいた。

窓の向こうには一番星が輝いている時間になっていた。御剣はそ
とカーテンを引いた。

「じゃあ……。鈴音お姉ちゃん……。バイバイ……。」「

名残惜しそうに手を振る美由紀を見ながら鈴音はほほえみながら
手を振った。

……。病室が急に静かになった。

夜のしじまが一步、また一步近づいてきている。鈴音は面を上げ
るが、そこには誰もいない。

「御剣君とデート……。か……。楽しみだなあ……。」「

鈴音はうれしさがこみ上げてくる気がした。

……。大丈夫、私はきつとやっつけていける。たとえこの病気が一生治
らないものでも。御剣君がいれば……。。

夜の街道には街灯が点々と闇に穴を穿っていた。まるで、光の杭
が打ち込まれたように、そこは周りと異質の世界が広がっているよ

うで……。

御剣は目を背けた。夜になると自分の感覚がときすまされていくような気がしてならない。それは、ひとえに御剣が心に死神を宿しているに他ならなかった。

「どうしたの？お兄ちゃん……。」

そんな御剣を見た美雪は少し不安になってしまふ。

「別に……何でもねえよ。」

「なんだか、不安そうな顔をしているよ……。」

御剣は一瞬びくつとした。

美雪はいつも元氣いっぱいで見れば馬鹿そうな（失礼！）印象を受けるが、その実はとても洞察力が深く、感受性が高い。そのことを御剣は改めて目の当たりにしたような気がした。

「そんなに不安そうな顔をしているか？」

彼は極力自然な顔を作り、美雪を見た。彼女の真摯で純粹なまなざしが彼の目に突き刺さる。

「うん……。」

美雪はうつむいてしまった。

「まあ。たいしたことはないさ……別に気にすんなよ。」

御剣は彼女をなだめるように頭をぼんぼんとなでた。

「うん……お兄ちゃんがそう言うんだたら……。」

美雪はそう言うのと頭上を見上げた。そこには街の光に閉ざされた夜空が浮かんでいた。

「星……あまり見えないね……。」

「ああ。そうだな。」

御剣も空を見上げた。

二人はそれから何も言わずにただ黙って歩いていた。星のない空を見上げながら……。

「大丈夫だろうな……。」

御剣は咳払いをするようにつぶやいた。

「お兄ちゃん……。これで三回目だよ。それ……。」

その隣に座っていた美雪は本のページをめくりながらあきれた表情を浮かべる。

「ん？そうか？」

「うん。」

美雪は間髪入れずにうなずいた。

駅前のロータリー広場。時間はそろそろお昼時。太陽が南の空の中心に達しようかというところだ。

「不安なの？」

美雪は読みかけの本を閉じると兄……御剣を見上げた。

「そんなことはないぞ。」

彼はそう答えるが、美雪の言葉が事実だと言っことはありありと見える。

待ち合わせ場所としては定番だったが、御剣達と鈴音は駅前のロータリーで約束しあっていたのだ。

「鈴音、大丈夫かな。」

そう、御剣の心配はもっぱらそこにあつた。たとえ、死ぬ運命にはない鈴音であつても無理をすれば確実に命がそぎ落とされていくのだ。

「大丈夫だよ。あんなに元気だつたんだもん。」

美雪はまた本を開けるとそれに半分だけ意識を持っていた。

「そりゃそうだけどさ。」

待ち合わせの時間までは後20分はある。

鈴音の心配もあるが、御剣としてはいてもたつてもいられないというのが本音なのだろう。実際、昨晩はよく眠れなかつたらしい。

御剣の足下にはなにやら黒い毛の塊のようなものが置いてあつた。いや、よく目をこらしたらそれが猫の形をしていることが分かるだろう。

それは、なぜついてきたのかはよく分からないが黒猫のミカエルだった。秋晴れのぼかばかした陽気に当てられ気持ちよさそうにうたた寝をしている。

今日は春のような陽気が街を覆っている。街ゆく人も皆、春の感触を味わうかのように自然に歩みがゆっくりとなる。

ふと、その中でもとりわけゆっくりとした歩調で歩いてくるものがある。それは、まっすぐ御剣達の方に向かってきていているようだ。

「御剣君！美雪ちゃん！」

それはすぐに二人の見知った人物へと輪郭を露わにしていた。

「よう。鈴音。早かったな。」

時計を見ると、待ち合わせの時間まではあと10分程度ある。

「御剣君達もね。」

白い幅広の帽子をかぶりなおしながら鈴音はほほえんだ。

「うん。お兄ちゃんたら、昨日からそわそわして今日もいても立ってももらえないって感じだったよ。」

美雪は喜々として御剣のことを報告した。

「こら、美雪。あることないことをかかってに想像するんじゃない。」

照れ隠しに御剣は美雪の頭をぺしぺしとはたいた。

「えへへへ……。」

叩かれて何がうれしいのか、美雪はにこつとした笑みを顔いっぱい浮かべた。

「もつと殴ってやろうか？」

その笑顔に対して御剣は指を鳴らすそぶりをして見せた。

「わー！やだやだ！」

美雪は大げさなそぶりで頭を守るように腕でそれを抱え込んだ。

「うふふふ……。」

何も変わらない。こんなことをいつもいつも変わらず続けている二人を見て、鈴音は笑みを漏らした。

二人はその笑みに満足したようにお互いにならずくと、

「さて、行こうか。」

促したのは御剣だった。
御剣と鈴音のごぶつきのデートが始まった。

「ねえ。鈴音お姉ちゃん。あの服かわいいね。」

シヨウウインドウに飾ってある、服をさして美雪は歓声を上げた。
「うん。なんだか大人の雰囲気があるわね。」

二人の受けた印象は少しずれがあるようだが、二人ともそれが気に入ったようだった。

「・・・4万!? 高!」

ふと、その下に置いてある「大特価!!!」とデカデカと書かれた値札を見て御剣も違う意味での歓声を上げた。

「いいやつは高いよね。この前は6万円ぐらいだったけど・・・」

美雪はお預けを命じられた犬のような目でそれを見つめていた。

「6万?! そんなもんに金かける奴の気がしれん。」

御剣は気が抜ける思いだった。

「まあ・・・。女の子の夢みたいなものだから。」

鈴音も目をきらきらさせてそれを食い入るように見つめていた。

「なあ。そろそろ行かないか? もう昼飯時じゃないか。」

いい加減ウインドウショッピングも飽きてきたのか、御剣は時計を見てそういった。

時間はお昼ちよつと過ぎぐらい、食事をするにはそろそろレストランも混雑のピークが過ぎて落ちて着いて食事ができる時間帯だ。

「うーん。まだちよつと見て回りたいけどなあ。」

美雪の目はアクセサリーショップへと向いている。

「だけど。私、少し疲れたかな。できればそろそろ座りたいのだけど・・・。」

元気いっぱいな美雪に対して、鈴音はどこか弱々しい笑みを浮かべていた。

「おいおい、大丈夫かよ。美雪みたいにはしゃぎすぎたんじゃねえのか？」

鈴音は”うん・・・”と弱々しく呟いた。

「ねえ。お兄ちゃん。あそこにファミレスがあるよ。」

美雪が指さしている先には最近学校でも評判のいいファミレスがそこにあつた。ちょうど客足もまばらになり始めたところらしく、今なら落ち着ける。

「そつだな。あそこに行くか。」

御剣は鈴音を軽く支えながら歩き出した。美雪は、その後をただついでに行くだけ。なにやら複雑な表情を浮かべながら。御剣は彼女の前にいたためにその表情に気がついていない。いや、彼女も見られなくなかつた。

今、彼女がどんな状況に立たされているのか、それを知られなくなかつた。それをしらえてしまえば、二人と顔を合わせられなくなる。

美雪はそれを恐れていたのだ。

「さて。何を食おうか？」

とりあえず落ち着いた鈴音を見て、安堵のため息をついた御剣は初めてメニューを手にとつた。

「ねえ、お兄ちゃん。私、このイカスミの Pasta ってやつ食べてみたい。」

御剣はそれを見た、

「な、なんか。濃いな。」

その写真を見ると、なにやら黒い、それこそ墨のようなものが Pasta に絡まっっている様子が生々しく映し出されていた。

「そうかな？一番人気だつて書いてあるけど。」

確かにメニューには”ただいま人気絶賛中、品切れ続出”など、明らかに言葉が多すぎる宣伝が乗せられている。

「まあ、お前が食べたいって言うんだつたらそれでいいけど。鈴音は決まつたか？」

それまでブーツとメニューに視線を落としていた鈴音ははつと気がついたかのように面を上げた。面食らった表情を見ると御剣はなにやらほほえましさを感じた。

「えっと・・・その・・・。マッシュルームのスープ・・・。」
少し照れくさそうに言うが、

「それだけでいいのか。」

という御剣の言葉にはしっかりとうなずいた。

「そうか。」

”まだ入院中だもんな、食事の制限とかされているのかもしれないな。”と結論づけると、

「済みません。」

片手をあげて、ウェイトレスを呼んだ。

「はい、ご注文の方はおきまりになれましたか？」

世間一般的にかわいい制服に身を包み、朗らかな営業スマイルを浮かべると彼女はメモ用紙を取り出した。

「えっと、このイカスミのパスタとマッシュルームのスープあと、このランチセットをパスタはフレッシュトマトで。」

御剣はメニューを指さしながらぱっぱと注文をすませる。ウェイトレスの女性も手際よくペンをメモ用紙に走らせると、営業スマイルを浮かべ、

「かしこまりました、しばらくお待ちください。」

と、ペこりとお辞儀をすると奥へと引っ込んでいった。

「お兄ちゃん。ランチセットにしたんだ。」

「ああ。セットじゃないと食べた気がしないからな。」

「ふーん。」

御剣達はしばらく他愛のない会話を交わした。今、学校では何が話題になっているか。自分の友達のこと。

鈴音は終始うらやましそうな表情をしていた。

”いつか、鈴音お姉ちゃんと一緒に通えるようになるといいね。”
という美雪の言葉に御剣は深くうなずいた。

昼食が終わり三人は街に出た。

「さて。どこに行こうか。」

御剣はこのまま適当に商店街を散策する程度で別にどこに行こうとか決めていなかったのだ。

確かにデートといえはおきまりの場所もあるが、鈴音のことを考えれば下手なところに行くことはできない。

「あ。だったら公園に行こうよ。最近、新しくできたところ。すっごくおちつけるところだっけ譲葉が言ってた。」

美雪は”はい”と手を挙げた。

「へえ。そんなところがあるんだ。」

公園と聞いて鈴音は目を輝かせた。

「うん。まだ行ったことないけど。」

「公園か。そうだな、行ってみるか。ここから遠いのか？」

御剣は正直あまり遠いところには行きたくなかった。

「ううん。ここからすぐだよ。」

美雪にとつてのすぐといえば・・・歩いて10分ぐらいってところか。御剣はそう推測すると、

「よし、行くか。」

「うん。私が案内するね！」

美雪は鈴音の隣に立つと歩き出した。御剣はそんな二人の背中を見ながら歩みを進める。

・・・こう見たら、本当の姉妹みたいに見えるよな。

御剣はふとそう思った。二人はそう見えるほど仲がいい。

・・・こんな状況がいつまでも続くといいんだけどな。

「どうしたの？御剣君。」

ふと気づくと鈴音が心配そうに御剣の顔をのぞき込んでいた。いつの間にか歩みが止まっていたのだ。

「あ。いや、別に何でもねえよ。」

御剣はあわてて二人の後を追った。二人とも歩くペースが遅いの

でさほど話されてはいない。

「お兄ちゃん。早く早く。」

美雪はわざわざ彼の下に引き返して腕をぐいぐいと引つ張る、

「おいおい、あわてんなよ。時間はたっぷりあるだろうが。」

「だってー。早く行きたいんだもん。」

「……お前はお子様か？」

といいそうになったが、やめておいた。その後には浮かべる美雪の表情を想像すると、また面倒なことになりそうだ。

「ゆっくり行こう……ね？」

鈴音の穏やかな笑みをみると、美雪は何も言えなくなった。

「うん。分かった。」

美雪は御剣の腕を放すとまた鈴音のそばにかけていった。

「いそがしいやつだな。」

御剣はぼそつと呟く。

そのつぶやきは気まぐれなそよ風にかき消され二人の耳に届くことはなかった。

「お兄ちゃん。遅ーい！」

これ以上待たせるとさらにうるさいので、御剣は足早に二人のもとに歩いていった。

「あんまり人、いないね。」

美雪は呟いた。

静かと言うよりは閑散とした公園には休日ながらあまり人の影は見えなかった。

「だけど。落ち着けるよ。」

鈴音は公園を見回した。

公園の周りには植林された木々が波のように立ち並び、あたかも都会のオアシスのような様相を醸し出していた。

「まあ。静かだしな。」

公園に一步はいるとそれまで街を覆い尽くしていた人の喧噪、車の走る音がすべてなくなってしまった。

あたかも別世界に迷い込んだような錯覚を催す。

三人は適当な木陰を探すと座り込んだ。木の幹を背中に感じ、御剣は心から落ち着いていくような気がした。

「そういえば、ここ最近落ち着きとは無縁だったからな。」

夏が過ぎ時が経てゆく。

夏は多くのことがあった。親しかった者との分かれ、そのものに最後を与えたのはほかではない、自分だったのだ。

もし、その身内の者がそれを知ったら彼らはきつと自分を許さないだろう。それは、彼が死神としての責務を果たすとき常に思っていたことだった。

一つの街に死神は二人と必要ない。御剣はいつも一人の夜を過ごしてきた。彼にとって生きているということを実感できるのは太陽の昇る昼間だけだったのだ。

「あ。ねえ。鈴音お姉ちゃん。あれ、おもしろそう。」

好奇心旺盛に周りを見回していた美雪は何かを見つけ出したようだ。

「あ。ブランコだね。」

美雪の指さしたその先はまだまだ使い古されてないブランコがぽつんとあった。

「おいおい。あれは子供の乗るものだぞ。」

御剣はそういうが、美雪には聞こえていなかったようだ。

「ねえ。鈴音お姉ちゃん。行こう?」

美雪は鈴音の手を取って促した、

「うん。行こうか?」

「俺は遠慮するぞ。」

御剣はつきあってられないというような表情を浮かべると木の幹に背中を預ける。

「えー？楽しいのに……。」

美雪は不満そうだが、鈴音に促されると二人は一緒にブランコの方へと歩いていった。

「鈴音も物好きだな……。」

子供が遊んでいるのを遠くから見守る父親の気分で彼は二人を見守っていた。

「……楽しい……か。楽しいんだろうな……。お前も一緒に過ごしたかったのか？優紀。」

彼は空を見上げた、天国などない。死ねばその魂はただ天へと帰るだけ。そして、その魂は再び生命に宿る。

「お前と再会できる日は来るのかな。」

御剣のつぶやきはただ空へと消えてゆくだけだった。

「どうしたの？御剣君。」

ふと視線を正面に戻すとそこには穏やかな笑みを浮かべる鈴音がいた。

「別に……。ただ、こんな日がいままでも続くといいなって。いや、こんな日じゃないよな。鈴音がよくなって普通に歩くことができるようになったらどんなに楽しいなって、思ってたな。」

御剣の声はまるで空を見上げているような感じがした。

「そうだね。そんな日が来るといいね。」

鈴音も彼のそばに座り込むと一緒に空を見上げた。穏やかな雰囲気気が漂う。まるでこの世界には自分たち二人だけしかいないような、そんな雰囲気気が漂っていた。

「……御剣君……。」

「ん？」

御剣は呼ばれた方を振り向いた。鈴音の声。しかし、それはなんだかいつもとは違っていった。しばしの緊張感。御剣の背筋に冷たいものが走る。

「……鈴音？」

御剣は一瞬何が起こったのか理解できなかった。自分の肩に寄せ

られる鈴音の頭。それは、そのまま彼の膝へと落ちてゆく。

「鈴音お姉ちゃん！」

美雪の悲痛な声で彼は気がついた。

「鈴音……。鈴音！」

彼女はまるで魂の抜けたような表情をしていた。まるで雪を思わせる白い顔。それには人としての生気がかけらも存在していなかった。

御剣はそのような顔を知っている。幾度も幾度も目にしていた。

それは、人の死に顔だった。

鈴音の荒い息。よかった、まだ息はある。御剣はひとまず胸をなで下ろすと、心を落ち着けた。

今ここで俺があわてていたらどうする。

彼は、美雪を見上げた。美雪はまるで魂の抜けた人形のような表情で鈴音を見ていた。

「美雪！」

鈴音を膝に寝かせているため美雪の肩を揺することはできなかったが、彼女はそんな声ではっとする。

「すぐに救急車を呼んでくれ。」

「……。救急車……。うん。分かった。」

美雪は素早くポケットから携帯電話を取り出すと素早い手つきでダイヤルをする。数回のコール音。

「あ、すみません。その……。え？はい……。あ、救急です、救急です。ひとが……。あ、その……。街の中央の公園で、鈴音お姉ちゃんが……。人がたおれて……。はい、息は……。あります。大丈夫です……。え？あ、聖イスラファル学園付属病院です……。はい、外泊でお出かけしていて……。はい、お願いします……。」

美雪は携帯電話から耳を話すとホールボタンを押した。

「どうだった？」

「すぐにくるって。公園の正面口にくるからっていったよ……」

「分かった。」

御剣は短く答えると鈴音を横に抱いた。鈴音はまるで眠ったように目を閉じていたが、その息は荒い。

「大丈夫・・・死の影はまだない・・・」

御剣にとつてそれが唯一の希望だろう。鈴音はまだ死ぬことはない。これは一時的な発作なのだ。それを言い聞かせることで彼はかろうじて平静を保っていられる。

彼は、極力ゆっくりと鈴音を公園の正面口に運んだ・・・

「御剣君・・・」

荒い呼吸を続けながらも鈴音は弱々しく目を開いた。

「今は眠ってる。すぐによくなる。」

「ごめんね・・・せつかくのお出かけなのに、迷惑をかけて・・・」

「迷惑なんかじゃない。気にするな。大丈夫、すぐによくなるさ。」
「うん・・・そうだね・・・」

鈴音はそういうとまた深いまどろみへと落ちていった。

入り口付近の木陰に彼女を横たわらせると御剣と美雪は無言で救急車の到着を待った。

「ねえ。お兄ちゃん・・・」

突然美雪は口火を切った。

「何だ？」

車のあふれる道路をにらみつけていた御剣は美雪に視線を向ける。

「えっと、その・・・何でもないよ・・・」

「そうか・・・」

美雪が何を言おうとしていたのか。それは御剣にも分からなかった。しかし、彼はそれを問いたださうともしない。今はそんな余裕はない。

それに、たとえ問いただしても美雪は何も言わないだろう。御剣はそれを知っていた。

じりじりとした時間が過ぎる。一秒が一時間にも感じられるように時間がひどくゆっくりと流れ出す。

まだ、さつきからさほどの時間も過ぎていないだろう。しかし、彼はじれていた。

「まだか……。」

待つことしかできない自分、いつもは偉そうなことについておきながら、鈴音を守るうと心に決めていたのにこういふときは何もできない。

自分は無力だ。御剣は歯を食いしばった。

「お兄ちゃん……。」

「……。」

御剣は今度は無言で答えた。

「悪いのはお兄ちゃんじゃないよ……悪いのは……美雪なの……。」

「美雪が全部悪いの……。」

「どういふ……。」

美雪の悲痛な声を聞いて御剣は彼女が何を考えているのかわかりかねるものがあった。しかし、それはサイレンの音にかき消される。

「ようやっとか！」

御剣は急いで救急車に向かって手を振った。救急車は彼の目の前に急停止した。

「あそこです。」

御剣ははやる心を押さえつけるように木陰に身を横たえている鈴音を指さした。

「分かりました。」

白い服を着込んだ救急隊員は担架を担ぎ込むと鈴音のそばへと駆け足で寄っていった。御剣もそれをそばで見守る。

「それでは後ほどまた連絡をいたしますので。」

御剣が自分の携帯電話の番号と家の番号を告げると、隊員は敬礼をして救急車に乗り込んだ。

「たぶん、大丈夫だろう……。あとは任せておけば……。」

御剣はまるで自分に言い聞かせるように呟いた。

「うん・・・そうだね・・・。」

美雪はただそう答えるだけだった。

二人はそのまま家路についた。二人とも始終何も話すことなく、静かな夕焼けだった。

(2)

御剣は暗い闇の中に立たされていた。目が慣れれば、そこは病院の部屋の中だということがすぐに分かるだろう。

そこには小さなケースがおかれていた。

その夜、小さな命が散っていった。生まれながらにして生きることができなかつた悲しい命。

あらゆる希望と祝福を一身に背負って、狭い空洞をあらん限りの力を振り絞って外にはい出してきた。

そこには希望に満ちあふれる世界があるはずだった。

しかし、死の運命はそれをも許さなかつた。

まだ、誰も知らない。誰にも死を看取られることなくただ孤独に死んでゆく。

「思い残すことはいくらでもあるだろうね。せめて、母親の腕の中で息を引き取りたかつただろうけど。もう時間なんだ。逝くときが来たんだよ・・・。」

御剣はガラスケースに手を入れそれをつかみ取った。一抱えほどしかない小さな魂、それは死してもなお穏やかな寝息を立てていた。自分が死んだことも分らない。

ひとえに純粋な命、それを天へと返さなければならぬ・・・。

この後、残された者達にはどれほどの絶望が待ち受けているだろうか。

死神として、それを受け入れなければならぬ。そんな義務はないのだが、御剣はいつもそうしていた。

母親の慟哭。それは、死神である御剣に残されたわずかな人として心に深く深く響き渡る。

希望が絶望に変わる瞬間。彼は、幾度もそれを身に受けてきた。御剣は夜のごとく黒いマントの中から巨大な鎌をとりだした。

鈍い光の瞬き……。

それはカーテンの隙間から差し込む月の光に照らされて、鈍い銀色を呈していた。

彼は、鎌をその胸にあてがった。

「……お休み……。」

銀色の光のきらめきはその胸の中に吸い込まれてゆき、その身を貫いた。

刹那のまばゆい光、生命の輝きと呼ばれる光を放ちながらそれは淡い光のかけらとなり天へと帰っていった。

「そこまで自身を追い込む必要もなかるうに……。」

足下でそれを見守っていた、黒猫のミカエルは御剣を見上げていた。

「そもいかないさ……俺は……。」

「何も言わなくともよい。私は分かっている。そなたは強いからな。」

「強い……ね。ただ冷めているだけかもしれないぜ。」

御剣は自嘲的な笑みを浮かべた。

「自らのことを知っている者は強くもなれるのだ。」

ミカエルは御剣の肩に飛び乗った。夜明けがくれば誰かが、なくなってしまうた命に気がつくだろう。

街が目覚める前にそれは親に知らされ、そして別れがくる。絶望の訪れだ。

それを見届けることが、すべてへの償いへとなるとは思わない。だが、御剣はそうしなければいけない。

「不完全な死神……か。何で俺みたいな奴が死神に選ばれたんだろっな？」

ミカエルは何も答えなかった。

静寂に包まれた街は次第に夜明けの光に照らされてゆく。死んでいた街が今よみがえった。

しかし、ひとたび死を迎えた生命は二度と蘇ることはない。

「人の命は・・・儂いものだ・・・。」

ミカエルはただ一言呟くと御剣の肩に身を沈めた。

御剣は待ち続けた。ただ、ひたすらに・・・。

寝苦しい夜をすごし、御剣は太陽の光を仰ぎ見た。連休で学校は今日も休みなのだが、どうしても目がさえてしまった。

幼い命を天へと返した。そして、なにより鈴音が倒れてしまった。その二つが彼の心を戒めていた。

「人の命は儂い夢のようなもの・・・か。」

そんなフレーズを思い浮かべた。彼はそのくだりがとても嫌いだった。なぜなら、これほどまでに人の真実を言い当てているものはほかにいなかったから。

彼はほとんど寝ていない。彼が死神としての使命を果たした数時間後、一つの絶望が訪れた。希望が絶望に変わる瞬間。彼はそれがかいま見たのだ。

だから彼はほとんど寝ていなかった。寝られるはずもなかった。

母親の慟哭の音が未だに耳の奥から離れようとしなない。

「忘れてしまった方がよい。その方が楽だ・・・。」

ミカエルはベッドの下からはい出てきた。

「たしかにな・・・俺だって忘れてしまいたいさ。でもよ・・・俺は、人間なんだぜ。」

すると突然、部屋の扉が開かれた。ミカエルは驚いて御剣の足下に身を寄せる。

「あら。おきてたの？珍しい。」

そこに顔を出してたのは、御剣の母親、美沙だった。

「お袋こそ、こんな時間に家にいるなんて珍しいよな。」

御剣はミカエルを足でけっ飛ばしながら答えた。普段なら休日の朝でも彼女は仕事があつて家を留守にしていることが多いし、留守にしなくてもたいていは朝寝を貪っているのだ。

「まあね。昨日の夜も早めに帰ってきたし。あなたは昨日は遅かったみたいね？夜、ベッドにいなかったし・・・ミカエルちゃんも。」

美沙はしゃがみ込むと御剣に邪険に扱われていたミカエルの頭を撫でた。

「ミカエルは”ふにゃー・・・”と、まるで猫のような鳴き声を漏らしていた。

「それじゃ。ご飯食べるなら早めに降りてきなさい。」

美沙はミカエルから手を離すと部屋を出て行くとするが、寸前で思いとどまったように歩みを止めた。

「鈴音ちゃん・・・今は辛いでしょうけど・・・あなたがしつかりしておかないといけないわよ。私が言えることじゃないけど、がんばって。」

扉が閉まる音が部屋に響いた。

「やれやれ。あのお方はいつもいうことはしつかりとおっしゃるな。」

「ミカエルは頭に残る感触を楽しみながら思いつきりのびをした。

「そうだな・・・。」

御剣はそれ以後、何も言うことなくパジャマから普段着に着替えると下に降りていった。

「ところで、美雪は？」

てっきり下に降りてきているものだと思った御剣は、リビングのテーブルには美沙一人だけしか座っていないことを知り、少し不思議に思った。

「さあ？どこかに出かけるって書き置きはあつたけど。」

美沙は、テレビから目を離さずにその書き置きの手紙をひらひら

とかざして見せた。

「どれ……。」

『出かけてきます。』

女の子らしいころころとした文字にはそぐわない、そのあまりにもシンプルな文はよけいに疑問をわかせるものだった。

「そうそう。鈴音ちゃんところから電話があつてね。」

御剣は電光石火のごとく面を上げた。

「それで……!?!」

彼の心に戦慄が走る。

「何とか落ち着いたそうよ。だけど、今回は急だったそうだから少し心配だつてお医者さんもいつてたらしいけど。」

「そうか……。」

ふう……。彼は安堵のため息をつく。

手放しには喜べないということだろうが、今のところ御剣には何のお呼びがないため命には別状はないはずだ。

それでも、心配はつきることはない。そんなもので割り切れるものではないから。

「ところで。これはお袋が作ったのか?」

御剣はテーブルに並べられている朝食に目をやった。

「まあ、たまにはね。」

美沙はまだテレビから目を離さない。昼間の定番とも言えるバラエティー番組だが、何がそんなにもしろいのだろうか?と、御剣は疑問に思ってしまう。

御剣は興味を失うとそばに置いてあつた新聞を広げてテーブルに広げた。

それに視線を落としながら飯を口に詰め込みすまし汁とともにそれを胃袋の中に流し込む。美沙は、いつも鰹と昆布でだしをとっている、この地方ではそれは珍しいが、どうも彼女は以前は関西の方に住んでいたらしい。

普段は標準語を話しているが、たまに地が出てしまうことがある

のだ。まあ、どうでもいい話だが……。

「御剣。あんた。この後何か用事でもあるの？」

不意に美沙がそんなことを聞いてきた。いつの間にかテレビは消されていたようだ。

御剣は新聞から目を離すと、

「いや……。鈴音は入院中だし、美雪もいないしな。」

連休中は鈴音と一緒にすごそうと思っていたが、昨日のこともあり、鈴音とあうことははばかれた。

「だったら、今日は私につきあいなさい。」

「ん？なんで？」

「私だつてたまには自分の子供と出歩きたいこともあるのよ。」

美沙はゆっくりとコーヒーを飲んでいた。その表情からは彼女が何を考えているかを推し量ることはできない。

「……。いや、お袋の気まぐれなんて今に始まったことじゃないか。昼飯おごつてくれるなら。」

御剣は新聞をたたむとテーブルの上に置いた。

「馬鹿ね。親が子供と一緒に食事するんだから、おごるなんて言わないでしょう？」

「ま、それもそうだな。」

御剣はリモコンをとると適当にチャンネルを変えていった。今の時間は取り立てておもしろい番組もやっていない。

御剣はテレビの電源を切り、そのリモコンをテーブルに放り投げると、席を立った。

「いくときになったらいつてくれ。」

そう一言、残すと自室へ引っ込んでいった。

結局、美沙は、御剣達がよく食材の買い出しするデパートに足を運んだが、普段から美雪も御剣もいろいろと生活用品を購入してい

るので、今家に不足しているものはなにもなかった。

「つくづく、私がお家をほったらかしにしてるってことがよく分かったわ。」

美沙は食後のコーヒを飲みながらそう呟いた。

「今更って感じもするけどな。」

御剣はハーブティーを飲んでた。

結局、何もすることなくデパート内をぶらついて、気がつくときになつていたので近くのレストランに足を運んだのだ。

「そういえば、あなたは昔から何でも背負い込む子だったから何か無理とかしてるんじゃない？」

みると、美沙はコーヒをお代わりしていた。

「そうか？」

御剣は不思議に思った。まさか、美沙に、母親にそんなことを思われているなんて、夢にも思わなかったのだ。

「ええ。お父さんが死んだとき、覚えてるわよね。あのとき、あなたはあの人死んだのは自分のせいだって言ってた。だから、何でも自分のせいにして背負い込んでいるんじゃないかって。今回の鈴音ちゃんのことだって……。」

なるほど、確かにそんなこともあった。

御剣はふと思いついた。いつか夢で見た光景、確かに彼は泣いていた、父親が死んだのは自分のせいだと言って、自分さえいなければ。

「そんなことはないよ。おやじが死んだのは間違いなく俺のせいだからな。それは、偽るわけにはいかないよ。」

「なぜ？そんなことを言うの？」

美沙は、カップを置くのと御剣の目をまっすぐと見つめていた。

「そうだな……。お袋は、俺が死神だって聞いて信じるか？」

御剣はふつとそんなことを漏らした。足下でなぜかうずくまっていたミカエルは面を上げ、御剣を諷めるようににらみつけた。

「……？どういうこと？あなた、何を言っているの？」

美沙は訳が分からなかった。御剣は何を示唆してそんなことを言っているのか、まるで見当がつかない。

しかし、彼女は気づいていなかった、彼が言ったのはそういうことではないのだ。

彼が言ったことは紛れもない真実だったのだ。

「ま、忘れてくれ。俺も鈴音のことがあって少し疲れてるだけだ。」
すっかり冷めてしまったハーブティーをぐいっと飲み干すと御剣は大きくのびをした。「……………」

美沙はまだなにか言いたげだったがぐつと口を噤むと御剣に習ってコーヒーをぐいっと飲み干した。

「さて。行きましようか。これ以上ここにいてもなんだしね。」

美沙は支払いを済ませるとさっさと店を出て行った。

「これからどうする？」

そして、行く当てもなくただぶらぶらと街を歩く。

「別にどうもしないけど？」

美沙はあちこちきよろきよろとしながら歩いているだけだった。

別にどの店に入ろうかとか何をしようかとかも決めていない。

「それじゃあ……………」

御剣はふと、とある建物の屋上を見上げた。そこには何者かが立っ
つていて彼を見下ろしているようだった。

真っ赤なフードをかぶっつていてその表情は見えないが笑っている
のだろうか？御剣にはそう感じられた。

「まさか!？」

御剣はその正体に思い当たるものがあつた。いや、思い当たつた
のではない、本能的に死神の本能として瞬時に理解したのだ。

「くそ！」

御剣はかけだした。街に行く人混みなどはじめからなかったかの
ように御剣は一直線にそこへとかけだした。

「ちよつと、御剣!どうしたの?待ちなさい!！」

後ろから聞こえる美沙の焦った声も人混みの喧噪の中に消えてい

った。

『こんな白昼堂々と姿を見せるなど・・・いい度胸じゃねえか!』
彼は走った、ただ一直線に。誰も彼にぶつかることはない、誰も
が無意識に彼を避けて歩いている。

これも、彼の、死神としての能力の一つだった。

「どこだ?」

御剣は屋上へとたどり着いた。風のような俊足であっという間の
ことだった。しかし、そこには誰もいない、何も無い。

そもそも、この屋上には人が登ることはできないのだ。

「あれは・・・間違いないな。」

始終、彼の足下にいたミカエルはうなるように呟いた。

「悪夢・・・か。でも、何でこんなところに。」

「分かん。奴も自分の使命を果たしていたのかも試練。」

「・・・生きるべき者に死を与えていたと言うことか?」

ミカエルはうなずいた。

「・・・くそ。俺は死神失格だな。悪夢のやろうとしていること
すら分からないなんて。」

御剣は憤りを感じ、ビルの鉄骨を思いっきり殴った。鉄骨はびく
ともしなかつたが御剣の殴った表面には彼の拳の跡がついていた。

「まだ焦ることはない。魂の流れにはさほどの影響は出ていないよ
うだからな。そもそも、最近の悪夢の行動は何かおかしい。まるで
お前をねらっているようにも感じられる。」

「どうでもいいよ。ただ、俺は悪夢が何をしようと俺の大切な奴ら
には手を出させねえってことだけだ。」

「そうだな。そなたはそれでよい。」

ミカエルは最後にあたりを嗅ぐように見回すと、御剣とともに屋
上から姿を消した。

「まったく。いきなりいなくなっちゃだめでしょうが!」

美沙は案外早く見つけた。そして、彼女のそばにはなぜか悲痛
な面持ちの美雪が立っていたのだ。

「美雪？なぜ、こんなところに？」

御剣は美雪をみてそう聞いた。

「べつに……。気まぐれだよ。」

とりつく島もないということはこういうことか。御剣はそういわれてしまえば、口を噤むしかなかった。

「あなた達、けんかでもしているの？」

美沙は二人を交互にみると、心配そうな表情を浮かべた。

「そんなんじゃないよ。」

「別に……。お母さんには関係ないよ。美雪達のことだもん。」

親が子供の心配をして何が悪いの？と美沙は叫びたかった。しかし、今の彼らはないかが違う。

まるで、人の心をどこかに置き忘れてきたような魂の抜けたような表情をしていた。

美沙は少し背筋が寒くなる思いだった。

「とにかく、帰りましょう。美雪も用事は済ませたのよね？」

美雪はこくんとうなずいた。

三人は始終会話を交わすことなく家路についた。

深い深い闇の中。御剣はそこに漂っているだけだった。

（俺は……。どうなったんだ。）

刹那に生まれてくる記憶のフラッシュバック。それは、幼い頃の記憶だった。彼が忘れようとしていた、最近になってようやく記憶からなくなろうとしていた頃の記憶だった。

（俺は……。）

カメラのフラッシュを浴びているかのように、次第に記憶が蘇ってくる。

車のブレーキの音。何かが吹き飛ばされる二つの音。人々の喧噪。皆、あわてたような哀れむような表情で自分たちを見下ろしていた。

（ああ、そうか……。あれは……。親父の見舞いの帰りだったっけ？）

父親の元気そうな顔が一瞬だけ現われ消える。

(それから……。)

車のブレーキの音。何か吹き飛ばされる二つの音。地面にたたきつけられるような鈍い衝撃。地面を染める赤黒い何か。

(……事故……。)

隣には見知った女の子の顔。妹の顔とだぶって見える。

(まだ、幼かったんだな……。)

冷たくなってゆく心と体。すべてが冷たい闇へと帰ってゆく……。

そして、声が聞こえてきた。

『闇に見初められた者よ……。どうか私をお前の意志の中に住まわせてくれまいか……。その代わり、おまえに救いを与えよう。』

(そうか。そうだったんだな?)

『再び世に生きる運命を与えよう。代わりに、我が闇の運命を背負ってくれまいか……。』

(出来損ないの死神が生まれたときか……。)

銀色の光が短く閃く。

(だけど……。あいつは……。美雪は……。どこに……。俺は、死神になった……。美雪は……。どうして?)

赤い光がなびく。

血を思わせる紅の光、それは一種の炎のようにも見えた。

『悪夢はこの世から消滅させなければならぬ。あれは、魂の流れに混乱を招く者。けして許してはならない悪。』

黒い毛並みがそう呟いていた。

(ミカエル……。お前は?お前は……。いったいなんなんだ?)

御剣は目を覚ました。

「なんだか、懐かしい夢を見ていたような……。」

時計をみるとそれは深夜を示していた。

「昔の夢を見たの？お兄ちゃん……。」
部屋の暗がりから女の子の声が出た。

「……美雪か？どうした？そんなところで……。」

御剣はベッドから起きあがり、それに腰をかけた。

「昔の夢を見たの？」

美雪は答えなかった。

「ああ。」

仕方なく御剣は返事をした。

「交通事故だったんだよね？美雪達が死にかけたのって。」

「そうだったな。今まで忘れかけていたよ。」

「……。」

美雪は押し黙る。御剣も口を噤む。

御剣は感じていた。何かが違う。何かが間違っている。ここに漂っている空気は何かが異常だ。本当にそこにいるのは美雪なのか？

御剣には人の気配がまったく感じられなかった。それは、まるで、闇と会話をしているような、そんな感覚にすら襲われる。

「鈴音お姉ちゃん。心配だね？」

突然、美雪は話題を変えるように口を開いた。

「そうだな。だけど、大丈夫だ。死にはしないから。」

御剣は美雪を安心させたかった。こんな感じになるのも美雪が鈴音のことを心配しているからだろうと思ったからだ。

鈴音は美雪にとっても本当に、姉妹のようなものだったから。

「何でそんなことが分かるの？」

だが、その口調は彼の思惑が外れていたことを物語る。

「……？どうしてそんなことを言う？」

御剣は眉をひそめた。美雪の言葉はあまりにも冷徹だった。

「何で分かるの？鈴音お姉ちゃんは死なないってこと。それに、優紀お姉ちゃんの時だって。美雪は聞いたよ、お兄ちゃんは優紀お姉ちゃんが死んじゃうことを知っていたってこと。」

「それは……。」

それは……俺が死神だから……。と御剣は心の中で呟いた。

「それにお兄ちゃん。時々夜にいなくなるよね？外に出て行った気配はないのに、本当、消えたように……。何してるの？そういうとき……。」

「別に……やましいことなんてしてねえよ。」

「分かってるよ。それぐらい。」

……おかしい、美雪はなぜこうも俺の真をつくことばかりを言うのだ。

御剣は背筋が寒くなるようだった。

足元を見ると、いつの間にかミカエルがちょこんと座って美雪の方をみていた。

いや、見ているのではない、ミカエルは睨んでいるのだ。縫いとめるように。御剣はやつと気が付いた、今の美雪はその存在が極めて希薄なのだということを。

「美雪は知ってたよ。お兄ちゃんが……、お兄ちゃんが……死神だつてこと……。」

御剣は脇腹を殴られたような衝撃を受けた。

震える口をおそろおそろ開ける。恐ろしい予感、振りほどきたくなるような寒気は御剣を恐怖の淵へと陥れていく。

「……い、いつからだ？」

「わかんない。気がついたら知ってたの。」

「そうか……すまないな。黙つてて……。」

しかし、美雪は大きく首を振った。彼女の長い髪がまるで鞭のようになりに頬を叩く。

「いいの！だつて……美雪も隠し事してたんだもん！！美雪は……許されないことをしていたの……だつて、そうじゃないと生きていけないんだもん……。だけど！心の中ではいけないことだつて分かつて。それでも……やらないといけなくて！！美雪は……美雪は……悪い子なの！！！！自分がいなくなることがとっても

怖いの！！お兄ちゃんのそばにいらなくなるかもしれないって思ったら心が、心が張り裂けそうになっちゃうの！！いやなの・・・もう・・・。隠し事しているのも・・・こんなことを続けていくのも・・・。もう、疲れたの・・・。」

美雪はまくし立てた。いままで、腹の中にため込んでいたものをすべてはき出すように。

「どういうことだ？　いったい、何があったんだ？」

御剣は動くことができなかった。美雪の赤くはれる頬を撫でてやることもできなかった。美雪は自分の肩を抱いた。

彼女は今、どんな表情をしているのだろうか？

「お兄ちゃんと一緒だよ。お兄ちゃんが、死神の運命を受け入れたの。美雪は・・・美雪は・・・。」

美雪は息を吸い込んだ。

「美雪は・・・。」

御剣の胸が騒ぐ。どうしようもない息苦しさが彼に襲いかかる。周りの空気がまるで鉛のようにのしかかってくる感覚を覚えた。

・・・いやだ・・・言うな・・・聞きたくない・・・。

心がそれを拒否していた。耳をふさぎたい、しかし、もうできない。もう、逃げることはできない。

「美雪はね・・・悪夢なんだ。」

黒い静寂が世界を包みこんでいく。まるで、世界中の闇が彼らの周りに集まってきたような。すべてを絶望の彼方へと追いやるような深い闇が。

しかし、美雪の言葉は終わったわけではなかった。

「私の中の悪夢がささやくの・・・次は・・・。」

美雪は息を呑む。御剣もただ黙って次の言葉を待つ。そうするしかなかった・・・。

「次は・・・鈴音お姉ちゃんだって。」

心臓の音が止まる。世界の音が閉ざされていく。虫の音も風の音も、街の眠る音も。

「……鈴音が……。なんで……。鈴音は……。死なないはずじゃ……。」

御剣はふらふらと立ち上がった、

「……。うん。だから、死を与えるんだって。悪夢が……。鈴音お姉ちゃんに。」

「何だよ……。そりゃ、一昨日はあんなことがあったけど、だけど、鈴音だつてだんだんよくなってきてるじゃないか……。それを……。」

御剣は無意識に美雪の肩をつかんで揺さぶっていた。

「美雪だつて！美雪だつて、こんなことしたくないよ！！だけど、だめなの……。気がついたら悪夢に身体をゆだねているの……。私は、死にたくないけど……。鈴音お姉ちゃんが死ぬぐらいなら美雪が死んだ方がいい！！だつて、美雪は……。美雪は……。あのとき本当は死ぬはずだつたんだもん。だから、悪夢に見初められたんだよ……。」

「何だつて？じゃあ、俺が死神に見初められたのってのは……。」
「たぶん。お兄ちゃんは死ぬべき人じゃなかったんだと思う……。」

「考えてみればそのとおりだった。あの時、御剣は死神に命を助けられた。それは、本来なら彼が死ぬべき運命になかったからだとしたら。そして、美雪は悪夢に見初められた。それは……。つまり……。御剣は崩れ去るように床に跪いた。」

「俺たちは……。俺たちは……。いったい、何なんだ？なぜ……。こんなことに……。」

美雪はいつの間にか肩をふるわせて泣いていた。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん……。美雪はいいよ……。鈴音お姉ちゃんを助けるためだもん……。美雪をけしてもいい。悪夢を消すのは死神の使命だから……。美雪がお兄ちゃんに消されればみんなうまくいくんだよ……。」

御剣は何も答えなかった。

いったいどれだけの間そうしていたのか、気がつけば、空には淡い光が姿を見せ始めていた。

街に朝が訪れる。

街が復活の兆しを見せ始める。

しかし、闇の運命を背負わされた二人の兄妹を包む闇は晴れることとはない。

いったい誰が、この二人の闇を払うというのか。

(3)

空白のような朝が訪れた。

街を包み込む暖かな光は本来なら人に希望をもたらすもののはずだった。

しかし、テーブルについて朝食をただ口に運んでいるだけの兄妹にはその光が届くことはない。

「……………」

「……………」

静かな朝だった。

「学校……行かなくちゃ……………」

美雪は時計を見ると弱々しく立ち上がった。

「ああ……そうだな。」

御剣も彼女に目を合わせないように時計をみた。いつもならそろそろ家を出ようかという時間だったが、彼の腰は鉛でもくくりつけられたかのように重い。

「…………お兄ちゃんは……………」

「先に行ってる。後から追いつく……………」

御剣は美雪の視線を遮るように新聞を広げた。活字を目で追うが、その内容が頭の中に入ってくることはない。

「うん……分かった…………。それじゃ…………行ってきます……………」

「

美雪は泣きそうな目で御剣を見つめ、弱々しい歩調で玄関に向かった。

……

美雪が家を出てすでに20分。

御剣は今だ重い腰を上げようとしなない。

学校に行く気にもなれない。

「……病院に行くか……。」

御剣はふと、鈴音の顔を思い浮かべた。やはり、鈴音のあの笑顔は御剣を安心させる。気がつけば鈴音と同学年になっていたが、御剣はそんなことを気にしたことはなかった。

御剣はようやく重い腰を椅子から引っぺがすと、通学用の鞆をつかむと家を出た。

しっかりと戸締まりをしたことを確認すると、学校とは別の道、聖イスラフェル学園付属病院へとつながる道を歩き出した。

……鈴音を守りたい……だけど……鈴音を守ると言うことは、悪夢である美雪を殺すと言うことだ……。美雪を殺したくない……だけど、鈴音には生きていてほしい。

「……俺は、いつたいどうしたらいいだろうな。」

彼は足下を見下ろすが、そこにはいつもいる黒猫、ミカエルの姿はない。

彼は、重い足取りでただ道を歩いていた。

鈴音はやはり驚いた顔で御剣を迎えた。

「どうしたの？こんな時間に？」

と彼女に聞かれたが、御剣は何も言わずに、ただ、

「お前に会いたかったから。」
とだけ伝えた。

鈴音はうれいような、少し困ったような表情を浮かべるととり

あえず御剣を招き入れた。

「それにしてもびっくりしたよ。」

「身体の方は大丈夫か？」

「うん。ごめんね。心配かけて。」

「いいさ。鈴音のことだからな。」

「もう……。どうしてそんなことというの？ 恥ずかしいよ。」

「すまん……。」

二人は本当にとりとめのない話をしていた。鈴音の背後にはまだ死の気配は漂っていない。しかし……。

……。今はこうしていられるけど、近いうちに美雪が……悪夢が鈴音の命を奪いにくるんだ……。

それを考えると御剣はいたたまれなくなる。いつそのこと鈴音を奪ってどこか遠いところに逃げたい衝動にも駆られた。

しかし、悪夢にはそんなことをしても無駄だろう。

たとえ、一時の死の運命から逃れられたとしても必ず決着をつけなければならぬときがくる。

鈴音か、美雪か……。

それはどうしようもない二律背反だった。

「なあ、鈴音？ 一つ聞いてもいいか？」

突然、御剣は切り出した。

「うん？ なに？」

お見舞いの品のリンゴを切っていた鈴音は不意に御剣の方を向いた。

「もしも……もしもだよ。もしも、自分にとって大切な人が死ぬとする……。だけど生き残る方法もある。だけど、それをすればもう一人の大切な人が死んでしまう。そんなとき、鈴音はどうする？」

理不尽な質問だと言うことは理解していた。こんなことに答えなどあるはずもない。しかし、御剣はどうしてもその答えを出さなければならぬ。

だから、御剣はここに来た。

おそらく、ほとんど時間は残されていないだろう。運命の時間はその足音が聞こえるほどに彼らに迫っているのだ。

「……難しいね……。大切な人が死んじゃう……。だけど生きることでもできる……。けど、そのためにはもう一人の大切な人が死んじゃう。分からないな……。難しいよね……。」

鈴音は御剣の口調に鬼気迫るものを感じたのか、本当に真剣に頭をひねった。

「すまん……。そんなこと。答えられるはずないよな……。馬鹿なこと聞いた……。忘れてくれ。」

御剣はうなだれるようにその言葉をつないだ。

「ううん。そんなことないよ……。あ、だけど……。私なら……。考えるかな？」

鈴音はふとそんなことを言った。

「考える？何を？」

御剣は面を上げた、鈴音は穏やかな笑みで御剣をみていた。

「その二人が一緒に助かる方法……。きっと、あると思うから……。だから、考える。大切な人がいなくなるなんて……。いやだもんね……。」

御剣は目を見開いた。

「二人とも助かる方法……。か……。」

御剣はその言葉をかみしめるように呟いた。

「ごめんね、そんなの答えになってないよね。」

「いや。そんなことない。そうだな。二人とも助かる方法を探せばいいんだよな。そんな簡単な答えに気がつかないなんて。」

「参考になればいいんだけど。」

「ああ、ありがとう。これで、俺も救われたような気がするよ。」

鈴音は最高の笑顔を浮かべていた。

「がんばってね。何をがんばるのかは分からないけど……。だけど、がんばって。御剣君なら、きっとできるはずだよ。」

「鈴音……。」

御剣は急に鈴音のことが愛おしくなった。いや、その感情はいつも抱いていたことだ。だが、今の御剣は心の底から鈴音に感謝していた。

「ん……。」

御剣は鈴音を抱き寄せた。鈴音は抵抗のそぶりも見せず、自然に目を閉じた。

重なり合う唇どうし。

「……御剣くん……ありがとう……。」

恍惚とした瞳で鈴音は御剣を見つめた。御剣も何も言わずに鈴音を抱きしめた。今は、お互いのぬくもりを感じ取っていたい。

二人は、一つとなった……。

そういえば、鈴音と初めてであったのはいつの頃だったか。

先ほどまでの病院での出来事に赤面しながら御剣は家路についていた。

「……あ、そっか。学園祭の時だったか。」

それは、彼が一年生だった頃の学園祭。鈴音は、当然2年生だった。御剣は美雪、優紀、そして塔矢とともに学園祭を楽しんでいた。御剣がふと、3人と別れ別行動していたときだったか。あのときは夕日がきれいだった。

皆、クラスの方の仕事に回っていて誰もいなかった。

御剣は屋上上がった。そこなら夕日がよく見えることを知っていたからだ。

普段なら誰もいない屋上。閑散としているが静かで落ち着いた雰囲気がとても好きだった。

「あのときは、本当に驚いたよな。」

御剣は苦笑を浮かべる。

屋上には先客がいた。夕日に目を向け、どこをみているのか分か

らないような瞳の女性。上級生のようだったが、その姿は今にも夕日の中にとけ込んでいくかのようなはかなさを醸し出していた。

それが鈴音だった。御剣は無意識のうちに彼女に話しかけていた。しかし、返事はなかった。

よく見ると彼女の身体が揺れている。危ない、今にもその身体は屋上のフェンスから下に落ちていきそうだった。

「あのときからかな……。昼休みになると屋上に足を運ぶようになったっけ。」

そして、そこには常に鈴音がいた。

一緒に食事をとるときの微妙な空気。穏やかでそれでいてどこかもの悲しい。その当時の鈴音はそんな雰囲気にする女性だった。

そして、ある日聞かされたのだ。自分はほとんど学校に来ていないと言ったことを。あと一週間もすれば病院に戻らなければならぬと。

それから一週間。誰もいない屋上で彼は一人寂しく食事をとっていた。

話はそれだけでは終わらなかった。

ひよんなことから鈴音の教室を発見した彼は、彼女のクラスメイトからいろいろなることを聞いた。そして、彼は彼女の病院に足を運んだ。

始めてきたときは本当に面喰らった顔をしていた。

とりとめのない話、鈴音がすごい読書家であることを知ってから何か一冊本を持参するようにもなった。

そのたびに鈴音は朗らかな笑みを浮かべていたっけ。その笑みをみて、御剣は自分の気持ちに初めて気がついた。

なぜ、昼休みになると彼女の下に足を運んでいたのか、彼女がいなくなっただ後でも決まって屋上に足を運んでいたこと、彼女の喜ぶ顔が見たくて本を持って行ったこと。

御剣は鈴音にどうしようもなく惹かれていたのだった。

それから、どちらが先に告白したのかは二人とも覚えていない。

彼らは本当に自然に恋人同士になっていた。

「……幸せだったよな。これからも、ずっと幸せでいような……」

御剣は南の空高くに上り詰めた太陽を仰ぎ見た。

そう、彼の決意は決まっていた。誰も死なせない。誰かが死ぬことでしか未来が勝ち取れないなら。そんな未来なんて俺はいらぬ。御剣の心は今の空のように晴れ渡っていた。

「鈴音に感謝だな。だけど……どうすればいいんだ……」

御剣はいつの間にか家の前にまで来ていた。

御剣はとりあえず家の中にはいることにした。まだ学校が終わる時間ではない、美雪はまだ学校にいるだろう。できれば、御剣は早く美雪にこの気持ちを伝えたい。そして、美雪とともに誰もが助かる方法を探したかった。

絶望することはいくらでもできる、だが、たとえ深い絶望の中に身を落としたとしても、そこからはい上がるだけの意志を持っている、人はいくらでも先に進むことはできるのだ。

「御剣……えらく早かったわね。」

家にはいるとリビングでテレビを見ていた美沙が、驚いたまなざしで彼を見た。

「ああ。そうだな……。なあ、お袋。少し、時間いいか？話しておきたいことがあるんだ。」

これから起こること、今までのこと。そのすべてを話しておきたかった。

「ええ。聞くわ……」

御剣の真剣なまなざしをみて、美沙も神妙な面持ちでテレビの電源を落とすとリモコンをテーブルの上に置いた。

御剣は制服のまま椅子に座ると足下に鞆を置いた。

美沙はコーヒートを二つ用意して彼の前に置き、自分もそれを口にした。しばらくの沈黙。

それを破ったのは御剣だった。

「俺と美雪はお袋に一つ、隠し事をしていたんだ。どうしても言い出せなかった。」

「……………」

美沙はカップをおいて彼の目をじっと見つめた。

「なんと言えばいいのかな……………こんなこと、普通信じる言つのが無理だろうけど……………なあ。お袋。」

「なに？」

「死神って何をするものだと思う？」

「死神？人に死を与える……………あれのこと？」

「そう。本当のところは少し違うんだ。死を与えるのは死神の役目じゃない。死神の本当の役割というのは……………」

「待て、それは私の口から言わせてもらおう。」

突然テーブルの下から声がした。この声は、御剣はテーブルの下をのぞき込んだ。

「ミカエル。お前、こんなところにいたのか？」

ミカエルは軽い足取りでテーブルの上に飛び乗った。

「今は……………誰？テーブルの下から聞こえたような気がしたんだけど。」

美沙はテーブルの下をのぞき込んでいる。

「それは私です。美沙殿……………」

ミカエルは美沙の正面に座り込んだ。

「まさか……………ミカエルちゃん？」

美沙は目を見開いた。目の前で起こっていることが信じられない。ネコが人の言葉をしゃべっているのだから。

「ええ。私です。話を戻しますと、死神の使命というものは厳密には、人に死を与えることではないのです。人の死はあらかじめ決められているもの。それを死神風情がいたずらに手を加えることはできないのです。」

「……………」

美沙は何も答えられない。ミカエルは続けた。

「死神の使命とは、死に行く者の肉体から魂を刈り取り、死の運命から生きるべき者を守ることなのです。」

「・・・それが・・・死神・・・。」

「そのとおりです。そして、死神は一つの街に二人として存在しない。この街の死神とは・・・もう、お気づきではありませんか？」

美沙は、はつとして御剣をみた。御剣は何も言わず静かにうなずく。

「まさか・・・御剣が・・・。」

美沙は脱力するように椅子にもたれかけた。

「そして、その死神と対をなす者が存在します。生きるべき者に死の運命を与え、死に行く者の魂を押しとどめる。そうして、魂の流れに混乱を招く者。それが、悪夢。死神にとって永遠の敵です。そして、その悪夢が・・・。」

「美雪なんだ・・・。」

御剣はミカエルの言葉を遮っていった。これは、自分の口から言わなければならなかった。自分自身、それを認めるためにも。そして、これからしようとしていることに対する決意の意味も込めて。

「そんな・・・まさか・・・そんなことが・・・。」

美沙はうなだれるように頭を抱えた。

「以前、俺が、親父が死んだのは俺のせいだっって言っていたよな。・・・親父の魂を天に返したのは俺だったんだ・・・。」

この言葉を、御剣はどれだけ彼女に伝えたかったことだろうか。しかし、できなかった。言ってしまったばかりと母親は自分を許さないだろう。愛想を尽かされるか、一生恨まれることになるかそのどちらでも彼は怖かった。

「そうなの・・・そういうこと・・・。」

「俺を許してくれとは言わないよ。恨んでくれてもいい。だけど・・・仕方がなかったんだってことを分かってほしい・・・。調子のいい話だけだ。」

美沙は、頭を振ると面を上げて御剣の顔をまっすぐに見つめた。

「いいえ。そんなことない。あの人も言ってたから。」
そして美沙は語り出した。

「知ってる？いえ、知ってるはずないわよね。あの人は死ぬ二日前にこんなことを言っていたのよ。」

「??？」

御剣は首をかしげた。彼の父親が死ぬ二日前。良くは覚えていない。

「覚えている？あなたと美雪はその二週間前、大きな交通事故にあったのよ。」

「・・・そうだったっけ？」

ずいぶん昔のことだ。いや、昔といっても10年やそこらのことだからさほど昔でもないのかもしれない。だが・・・彼は思い出した。自分が死神としての使命を背負い始めたのはそのころからじやなかったか。

「あ、そうか・・・。俺が親父に・・・。」

彼は思い出した。それは、御剣にとって初めての死神としての使命をまっとうしたとき。自分自身の父親に死ぬことを伝えたときだった。

「ひどい交通事故だったわ。本当に・・・ひよつとしたらあの人が出っつてしまふ前にあなた達が死んでしまふんじゃないかってさえ思った。医者でさえさじを投げてしまった。だけど・・・。」

美沙は遠い目をしていて。その時の思いが今心の中に蘇っているのだろ。その瞳はとても複雑な色をしていた。

「あなた達は助かった。驚異的な速度で傷が癒えていった。本当に驚いた。これが奇跡というものなのかと思うほど。」

「そうか・・・。それは、俺と美雪が死神と悪夢の運命に魅入られたときだったんだ。」

御剣は気がついた。死神になった後、彼はけがをしてもすぐに回復する身体になってしまっていたことを。

死神によって助けられ、死神を心に宿したとき、御剣は死とは無

縁の存在になつてしまつていたので。

「だからわずか2週間で退院することができた。」

「そうだったんだ……。それで、親父はなんて？」

「うん……。」

美沙は目を閉じた。そして、小さく一つ深呼吸をすると口を開く。御剣はそのすべてをただ見守つていた。

「あの人は言つていたわ。『俺が死んでも、御剣のことを許してやってくれ。あいつはまだ背負い切れていないから……。』って。夢うつつの声をしていだから何か悪い夢でも見たんじゃないかって思つてただけど……。」

御剣は驚いた。

本来、死神によつて死を告げられた者はそのことを覚えていない。なぜなら、御剣は死神の力によつてその記憶を消しているのだから。

ただ、魂に理解させるだけでいい。魂が、自分は肉体から出て行くときが来たのだということに気づかせる。それが、死を告げるといふことなのだ。

「まさか……。そんなことが……。」

ミカエルは黙つて机の上に座つていた。

「ええ。だから、私はあなたを恨んだりしない。それに、あの人も恨んでなんかいなかった。あなたは間違つたことをしているんじゃない。ただ……。私達ではあなたのその運命から解き放つことができないということが歯がゆいのよ……。」

「いや、もう、受け入れたことだからね。だけど、美雪は違う。悪夢は魂の流れに混乱をもたらすもの。だから、悪夢は間違つたことをしていることになる。だけど、美雪はそれを理解していて、それでもやめられないんだ。本当に救われなければならぬのは美雪なんだ。そして……。」

御剣は言葉を切つた。美沙は、小首をかしげる、
「そして？」

「美雪……いや、悪夢が次にねらっているのは……鈴音なんだ。」

美沙は息を呑んだ。鈴音と御剣の関係はすでに公認となっている。鈴音はいい子だということを知っている美沙は、その二人をいつも祝福していた。御剣のかたくなさをいやしてくれる人。それが鈴音だった。

普段あまり家にいられない美沙にとって鈴音は感謝してもしきれないほどの恩人みたいなものだ。

「鈴音ちゃんが……？」

「うん。美雪がそういつていた。」

「だけど……あなたが死神として悪夢を退かせたら鈴音ちゃんは助かるんでしょう？」

御剣は首を縦に振った。美沙の表情に一瞬安堵の笑みが浮かぶが、
「だけど……悪夢を撃退するということは、美雪を殺すということなんだ。」

「どうして？何も殺すことはないじゃない。」

その笑みもまた姿を消した。

「たとえ今回撃退できたとしても、また襲ってくる。たぶん、美雪はそれを何とか食い止めようとするだろうけど、自分の命の楔になっている意志に抵抗すれば、美雪の心は徐々に壊れていくんだ。これは、最近知ったことだけど。だから、いずれは美雪の心は死んでしまう。そうすれば、完全な悪夢になってしまうんだ。美雪はもう、死んでいるんだ、あのときの事故で。今生きているのは、悪夢によって生かされているだけ。悪夢によって死ねなかった人間は、悪夢に心を壊されて自分が悪夢になるしかないんだ。」

御剣は一気にいった。

「そして、そんな悪夢を滅ぼせるのは、死神だけ。」

「どうにもならないの？」

「分からない……でも。俺は助けたい……鈴音も美雪も。どっちかなんて選べない。どっちを選んでみきつと後悔する。人の命は

天秤にかけられないから。」

それが鈴音とともに出した答えだった。方法はまだ見つからない。いや、そんな方法がある補償すらない。

それは、彼も重々理解していることだった。

しかし、彼の意志は変わらなかった。

ミカエルはじっとしていた。まるで、本当のネコに戻ったかのような無表情なままで。

「そう。・・・分かったわ・・・。私にはもうどうすることもできないけど・・・。がんばって。こんな言葉しか送れないけど・・・。あなたなりにがんばりなさい。」

御剣は強くうなずいた。

「さて。おなか空いているでしょう？そろそろお昼にしましょう。」

美沙は、いつもの表情に戻ると席を立った。ミカエルはテーブルから飛び降りるとリビングから出て行くこととする。

「どうしたんだ？ミカエル。飯食わないのか？」

ミカエルは振り向かず、

「私は本来食事など必要としない。お前もそうだ。だから、今はいらぬ。」

そういつと御剣が制止する暇もないほど素早くリビングを出て、二階へと昇っていった。

「変な奴・・・。」

御剣は知らなかった。ミカエルが今何を考えているかということ。そして、御剣は改めて気がついた。自分は、ミカエルについて何も知らないことを。

いつも彼は自分のそばにいてくれた。もし、彼がいきなりいなくなるのであれば・・・。

彼の脳裏に不安がよぎる。

「・・・ミカエル・・・。お前はいつたい・・・。」

台所からは野菜を炒める軽快な音が響いてきた。

美雪は急に襲ってきた吐き気に口を押さえた。

教室には穏やかな光が差し込んでいて、にわかに微睡みの気配が漂っていたところだった。

「な……に？」

腹の中で何かがつごめくような、それが次第に身体全体を蹂躪するかのよう駆け回ってゆく。

「どうしたの？美雪？」

隣で口を押さえて辛そうにしている彼女を見かねて、譲葉が声をかけてきた。

「だ・い・じょう・ぶ……。」

とてもそうは思えない。周りの者もそんな彼女に気がつき、次第にクラスはざわめき始めた。

いつも元気な笑みを浮かべクラスのムードメーカーだった彼女がここ数日ずっと元気がなかった。そんなせいで、ここ最近は教室も沈みがちだった。皆、彼女のことを心配していたのだ。

彼女に手をさしのべるのは譲葉だけではない。美雪は皆に愛されている。ただ、彼女がそれに気がつかないだけ……。

「先生！」

譲葉の前の席に座っていた女子生徒は見かねたように手を挙げ、教師を呼んだ。

教師はチョークを動かす手を止め、振り向いた。

「どうした？」

「えっと、美雪が……。」

彼女は困惑した目で美雪を見た。その視線を追い、教師もそつちに目を向ける。

「そうか……。今日の日直は誰だ？」

その教師がそういうと、今度は教室の反対側にいた男子生徒が間を開けずに手を挙げた。

「皇磨を保健室に連れて行ってやれ。」

「はい。分かりました。」

彼は立ち上がると素早く美雪のそばに歩み寄り、彼女の肩に手を置いた。

「美雪をお願いね……。」

譲葉の不安そうなまなざしを受けて、彼はしっかりとうなずくと、

「ああ。まかせとけて。」

彼はそういうと、素早く彼女を起こすと教室を出て行った。

クラスメイト全員はそんな彼らに不安げな視線を送っていた。

「ごめんね……。」

美雪はふらつく足を何とか踏みしめながらそう呟いた。

「気にすんな。」

彼はそう一言だけ言うと、保健室のドアを開けた。いつの間にかついていたようだ。

「失礼します。」

彼の声を聞きつけ、担当医が駆け寄ってきた。

「あら。皇磨さん？珍しいわね。」

鈴音や優紀が良くここに運び込まれていたので、それを見舞うち御剣も美雪もこの担当医とは顔見知りになってしまっていたのだ。

その当時はいつも見舞いに来ていた彼女がこうして運び込まれてきていることに担当医の教師は奇妙な感覚を抱きつつも彼らを招き入れ、美雪を空いたベッドに横にさせた。

「それでは。よろしくお願いします。」

美雪を運んできた男子生徒はそう一礼するとさっさと保健室を出て行くとする、

「あ、大変だったでしょう？少し休んでいてもいいわよ。」

「いえ。保健室は少し性に合わないもので。」

彼はにこっと笑うとそのままドアを閉め、教室へと帰って行ってしまった。

「すみません……。」

シートから顔をのぞかせ、美雪は一言呟いた。

「お兄さん、今日はお休みなよ。できれば来てほしいんだけど……。」

「え？お兄ちゃん。今日は休みなんですか？」

「ええ。そうよ。知らなかったの？」

美雪は首を縦に振る。

「そう……。」

彼女はなんとフォローするべきか分からず、そう曖昧に答えるしかできなかった。

「少し待っててね。家の方にも連絡してくるから。」

彼女はそう言い残すと保健室から出て行った。

沈みかえる部屋。美雪は理不尽なやるせなさに心がつぶされるようだった。

「お兄ちゃん……。どうしたんだろう？後で追いかけるっていつてたのに……。私……。嫌われちゃったのかな？私……。もうだめなのかな？」

ふと、美雪は自分の頬に手を置いた。そこは、いつの間にか熱い涙で濡れていた。

「……。ヒック……。お兄ちゃん……。寂しいよ……。そばにいてよ……。ねえ……。お兄ちゃん……。う……。う……。う……。」

「思えば美雪はいつも笑っていた。」

笑っていなければならぬと、彼女はいつも自分に言い聞かせていた。そうしないと自分自身の心からわき出る感情を抑えることができないから。

御剣が鈴音とつきあうことを知って、まるで自分の兄が鈴音にとられてしまったような喪失感を味わったこともあった。

しかし、鈴音は美雪の大切な友達でもあった。だから、彼女は笑顔で彼らを祝福したのだ。

『鈴音お姉ちゃんだったからお兄ちゃんを任せられる。』
ただそう信じて。

そうして、笑顔で鈴音と接していくにつれ、やがて心の中にあつた喪失感はその姿を消していた。

だから、笑っていななければならない。笑顔になつていれば、心にわだかまりがたまることもない。

自分が悪夢として許されないことをしている現実からも目をそらすこともできる。

彼女の笑顔は見る者を救ってきた。彼女の笑顔を見れば自分ももう少しがんばってみようと思える、いつか譲葉がそんなことをしていた。だが、そんな彼女の笑顔は彼女自身を救うことはなかった。彼女の嗚咽は静かに部屋を満たしていった。

彼女は一瞬だけ思った。

『鈴音お姉ちゃんがいなくなっちゃえば、美雪はこんなに苦しまなくてすむかもしれない……。』

と、しかし、そんなことを考える自分自身が許せなかった。

彼女は自分自身を消してしまいたかった。最初から自分さえいなければ、誰も苦しむことはない。

美雪は深い深い螺旋に落ち込んでいった……。

美雪は玄関の前に立ちつくしていた。

「いつも通り、笑顔じゃないとだめ。そうじゃないと、きっとお兄ちゃんを心配させる。大丈夫、覚悟は決めたから……。」

彼女は深く息を吸い込み、そしてはき出した。

「よし……。」

彼女は無理矢理頬をゆるませ、家のドアを開けた。

「ただいまー。おなか空いちゃった。」

リビングからは誰も出てこない。

「ただいまー。誰もいないの？」

靴を下駄箱に入れると美雪はリビングのドアを開けた。

「お帰り。」

そこにいたのは、母親の美沙と兄の御剣だった。

「どうしたの？変な顔して。何かあったの？」

美雪はその原因はたぶん自分にあることを自覚しながらも何もなかったかのように言葉を続けた。

「保健室に担ぎ込まれたって聞いたけど。大丈夫なの？」

美沙は心配そうな面持ちで彼女に歩み寄った。

「……あ、そうか家に連絡するって逝ってたもんね。」

美雪は自分の考えの浅さに少しばかり後悔すると、

「うん。大丈夫。ちょっと気分が悪くなっただけ。すぐによくなっ
たよ。元気だけが私の取り柄だしね。」

彼女は空元気を振りまいた。その表情はどこか痛々しい。

「なあ。美雪……。」

それまで黙っていた御剣が唐突に話し出した。

「うん？なに？」

御剣は椅子から腰を上げ、美雪のそばに、美沙の隣に立ち、彼女をまっすぐ見下ろした。

「俺は決めたよ。鈴音を守るうって。」

「……！」

美雪は心臓を鷲掴みにされた思いだった。

「そう……なんだ……。そうだよね……。よかった……。別にいいよ。お兄ちゃんだったら。それに、美雪なんかより鈴音お姉ちゃんのほうが……。お兄ちゃんにとって大切な人なんだもんね。」

美雪は息苦しかった。いつそのこと自分の心臓もろともすべてを押しつぶしてくれた方が楽になれるかもしれない。そんな考えが浮かぶほど。

「もちろん、美雪もだ。」

「え？」

美雪は惚けたように彼を見上げた。彼の目はまっすぐと彼女の瞳を捕らえている。彼の黒い瞳は確かに彼女を映し出していた。

「鈴音かお前かなんて……。どっちかを選べっていわれて……。そんなことできるわけないだろう！俺にとつては、お前も鈴音も大切な人なんだ。だから、俺は鈴音を助ける、そしてお前も助けてみせる。必ずだ……。だから、美雪……。協力しろ。きっと方法があるはずだ。」

美雪の目にみるみる涙があふれてくる、それは悲しみの涙ではない。

人は悲しいとき以外にも涙を流すこともあったのだと美雪は初めて知った。

「お兄ちゃん……。ありがとう……。ありがとう……。お兄ちゃん。美雪、怖かったの。もしも、お兄ちゃんが鈴音お姉ちゃんを選んで、美雪を消しちゃうことがあったらどうしよって。だったら鈴音お姉ちゃんが消えちゃえばいいんだって。そんなこと思ってもそんなこと思う自分が許せなくて……。怖くて……。私……。」

彼女は顔をくしゃくしゃにしてうつむいた。涙を見せたくない。

それ以前に彼の顔を凝視できない。

御剣は美雪の肩をつかんだ。

「バカ……。俺がそんなことするわけないだろう？それにさ……。そういう自分を怖いとか許せないって思えるって事は、お前は悪夢じゃない、人間だって事じゃないのか？」

美雪は驚いて彼を見上げる、

「私……。人間なの？」

「当たり前だろう？それ以外に何があるんだよ。それに、俺の妹だ。」

美沙は二人を優しく包み込み、抱きしめた。

「あなたもね……。あなたは死神であるかもしれないけど。あな

たも一人の人間です……。わたしの自慢の息子です。あなたもよ、美雪。死神だか悪夢だかなんだか知らないけど。そんな者たちにあなた達の未来を渡したりするものですか。」

二人は母親の胸の鼓動を聞いていた。暖かい。人の体温はとても暖かいものだ。二人は思った。

そして、二人は思った。

これが本当の家族というものなのだ……。

美雪の身体から力が抜けた。

「美雪？」

御剣があわてて彼女の身体を支えようとするが、彼女はトスンという音をたてて床に崩れおちる。

「美雪！おい、しっかりしろ……。」

美雪はまるで死んだように眠っていた。

「御剣。美雪は部屋に運んで！早く！」

美沙の素早い指示に従い、御剣は彼女を抱きかかえるとそのまま二階の彼女の部屋に向かっていった。

終わりの時はやってきた……。

『御剣……すまなかった。俺は気づいてやれなかったのだな。お前が過酷な運命を背負わされていることに……。だがな、それでお前が罪悪感を感じることはないんだ。大丈夫だ。みんな許してくれるよ。俺もお前を責めたりはしない。確かに俺だって死にたくはないさ。だが、最後にお前に会えただけ俺は幸せだったかもしれないな……。俺は、お前という息子を持って、美雪という娘を持って、美沙という妻を持って、本当に幸せだった。だから、お前が思い悩むことない。俺は、お前に感謝するよ……。ありがとう……。二人によるしくな……。俺は、穏やかに死ぬことができたって伝えておいてくれよ。それじゃあな……。』

御剣は目を覚ました。いつの間にか眠ってしまっていたらしく、美雪の部屋は闇に沈み込んでいた。

草木も眠る深夜の静寂しじまを肌を感じながら彼は周りを見回した。

いつのまにやら美雪の布団はもぬけの殻だった。玄関のドアが開いた形跡はなく、彼女の靴もそのままだった。

「行くのか？」

暗がりからミカエルが声をかける。

「ああ。時間みたいだ。だけど・・・どうすれば二人とも助けるところができるんだ？」

決意できた。そして、それを伝えることもできた。

だが、問題は一つだけ残されていた。二人が助かるための方法。それが分かればすべてうまくいく。

「お前自身に覚悟はあるのか？」

ミカエルは神妙な声で彼に問いを投げた。

「俺に？覚悟だって？」

月の光の差し込まない廊下でミカエルは静かにうなずいた。

「そう。お前は自分自身がこの世界から消えることとなっても二人を助けようとする意志を持っているか？ということだ。」

御剣は一瞬だけ考えた。そして、答えはすぐに出てきた。最初から答えは自分の中で用意されていた。

「それで、本当に二人が助かるのだったら。俺はいくらでも覚悟してやる。」

「そうか・・・。」

ミカエルは沈黙し、床に視線を落とす。

「何か・・・方法があるのか？美雪の中から悪夢を追い出す方法があるのか？」

御剣はミカエルを抱き上げた。

「ないことはない。少し強引な方法だ。美雪の中の悪夢を一度滅ぼし、肉体が消えてしまつまでに新たな人間の魂をそのうちに注ぎ込めばいい。」

「そんなことができるのか？」

「私なら可能だ。そもそも、私は人の魂から作られた存在なのだからな。」

「……どうということだ？」

「そう……。」

ミカエルは語り出した。それは、彼が今まで隠し通してきたことのすべて。この世界にミカエルという一つの存在が生まれたときのことだった。

「私の魂は何を隠そう、そなたの魂なのだ。」

「俺の魂？」

御剣は耳を疑った。どうということだ。

「そなたが死神に魅入られた理由の一つは、力尽きかけた死神がその時、たまたま自分を受け入れられる肉体を見つけたから。そして、もう一つは死ぬべきではない者が死の運命にさらされていたことにある。死神はそんな人間を助けなければならない。それは分かるな？」

御剣はうなずいた。それこそが死神の存在理由なのだ。

「だが、ひとたび肉体から別離した魂を再び肉体に戻すことはあの状態では無理だった。死神の力が足りなかったのだ。だから、死神は自分自身をそなたの魂の変わりとしてお前の中に宿った。だったから、抜け出た魂はどうなったか。」

「……。」

御剣はただ聞いていた。

「そなたの中に入る前に死神は最後の力を振り絞りその魂に形を与えた。それは一つの黒いネコへと変貌したのだ。」

「それが……お前……。」

ミカエルはうなずく。

「私はお前の魂。お前の中から抜け落ちた魂なのだ。そして、お前が今のお前でい続けられる最後の砦なのだ。」

「どういうことだ？」

「そなたは、なぜ人間として生活できる？」

「え？それは・・・俺が完全な死神ではないから・・・お前がいつたことだぜ。」

「そう。それもある・・・だが、真実は私が存在したからだ。私がいだからそなたはまだ不完全な死神でいることができた。まだ、人としての心を失うことはなかったのだ。」

「そうだったのか・・・。それで、美雪を救う方法というのは？」

「一度美雪の中にいる悪夢を滅ぼし、空となった肉体の中で私が本来の姿・・・すなわち人間の魂に戻ること。この魂は元々人間のもだったため、長い時間を要するが肉体になじむことができるだろう、ただ、下手をすれば十数年の眠りにつくことにもなるが。」

「できるんだな？十数年の眠りについたとしても、人間として目覚めることができるんだな？」

「ああ。だが、その代わり、そなたは完全な死神になってしまう。人としての心は消え去り、永遠に闇に生きる存在となるのだ。それは、実質上死ぬことと同じ。それでも・・・いいのか？」

「美雪が・・・人間として生活できた理由は・・・？」

「それは分からん。もしかすると悪夢が人間として苦しむ美雪を見るためかもしれない。その憤りを自らの力にするために・・・。」

「・・・最悪だな・・・。それで・・・美雪は助かるんだな？鈴音も助かるんだな？」

「ああ。私が保証する。」

ミカエルと御剣はしばらくのあいだ見つめ合った。

「お前が美雪の魂になった瞬間に俺は完全な死神になってしまうのか？」

「すぐとはいわない。だが、長くて五年後には、そなたは完全な死神になってしまうだろう・・・。」

「五年か……。美雪とはもうあえなくなってしまうと言うことか……。だけど……。まあ、十分だな……。」

ミカエルはいぶかしげに御剣を見た。

「五年でできることもたくさんあるだろうよ。それに、今それしかないってんなら。そうするしかねえだろう。」

御剣はミカエルを抱き上げた。その瞳には彼の姿がしっかりと映っている。

「分かった。とにかく俺は美雪の中にいる悪夢を滅ぼすだけでいいんだな？ 後はお前がやってくれるんだな？」

ミカエルは強くうなずいた。

「ああ。その後は任せておくがいい！」

「よし！ 決まった。だったら行こう。美雪が待ちくたびれてるだろうよ。あいつは、結構短気だからな。」

その笑みはとも今の状況にはふさわしくないものだったのだろう。しかし、それは御剣の決意の表れだった。

「ああ。そうだな。これで終わりにしよう。」

「終わりじゃねえぜ、ミカエル。俺たちはこれから始まるんだ。お前も美雪に姿を変えてな。」

「そうだったな。そなたのいうとおりだ。」

御剣は自分の感覚を闇に這わせた。死神になる瞬間、世界中の闇が自分を包み込む感覚がするが、このときはその闇でさえ自分の行く末を祝福してくれているような気がしてならなかった。

彼の頬からは自然と笑みが浮かび上がる。

「行くぞ。ミカエル！」

御剣は自分の肩にミカエルを乗せた。そして、彼らは再び夜の街に身を躍らせる。

永遠にくることのない夜明け、そんな夜を壊すために……。
光のあふれる世界を取り戻すために……！

階段の下には二人の話を始終耳にしていた影があった。

それは、憂いのため息をはくと階段を下り、庭に出た。

月の光はその硬い表情を鮮明に映し出した。それは、美沙だった。御剣・・・美雪・・・。あなた達は幸せだったのかしら・・・。・ねえ、あなた？あの子達は本当にいい子よね。私、間違っただいよね。あの子達を産んで本当によかったわよね。でも・・・なぜ、あの子達だけがこんなに過酷な運命を背負わなければならないの・・・！死神が・・・悪夢がなんだっていうの！！私は、私は・・・。なぜ、私は何もできないのよ！あの子達は、あの子達はあんなに苦しんできたじゃない・・・。どうして！？どうしてなのよ・・・？」

美沙は崩れるように泣き出した。月は何も答えない。夜の闇は彼女を優しく包み込む、やがてくる夜明けを夢見ながら、街は闇に沈んでゆく。

もう・・・後戻りはできない・・・。

(4)

「待ってたよ・・・お兄ちゃん。」

病院の中庭。闇に包まれた世界に美雪はたたずんでいた。

「俺を兄と呼ぶな。」

御剣はうなるように言葉を漏らす。彼はわかっていた、彼の前に立っているのは彼の妹の美雪ではない、彼の前の立っているのは薄汚れた運命を彼女に強制している存在、悪夢だということを。

「何で？お兄ちゃんはお兄ちゃんでしょう？私を殺しにきたんだよね？」

悪夢は薄い笑みを浮かべた。

「俺はおまえを殺しにきたんだ。美雪を殺しにきたんじゃない！」
「無理だよ・・・。あなたには分かっているんでしょう？美雪はすでにこの世にはいてはならない存在だって。美雪はすでに死んでいるんだって。私を殺すということは、そんな美雪を殺すことと同じ

意味なんだよ？」

「ふん。そんなことは分かっているさ。だがな、こちらに勝算がないわけではないんだよ。なあ？美雪？そうだろう？おまえはきつと元に戻れる。だから協力するって言ったよな。」

悪夢はいぶかしげな表情を浮かべた。

「何を言っているの？もう美雪はこの世界にはいないんだよ？私が取り込んだじゃった。」

「いや、俺には分かる。美雪はそこにいる……。美雪……。おまえはこのままでいいのか？このまま悪夢の言いなりになっておまえは満足か？すべてを諦められるっていいのか？どうなんだ？答えよ！そんなはずないよな！？」

悪夢は眉をひそめた。そのこめかみには薄い筋が立っていた。

「何を言ったって無駄……。あなたも分かっているでしょう？遅すぎたんだよ。美雪は消えてしまったのだから……。え？」

突然、悪夢は口を抑えた。何かがかみ上げてくる。

「なに？これ？いったい……。気持ち悪い……。」

悪夢は膝を折った。

「どうしたっていうの？私の体が……。言うことを聞かない……。誰？私の体を押さえ込もうとするのは……。」

「それはおまえの体ではない……。だったら一人しかいないだろう。なあ……。美雪。」

御剣は悪夢のそばに歩み寄った。悪夢は膝を折りつつも何とか後ずさりしようと足を動かすがうまくいくことはなかった。

『お……に……ちゃん……。美雪は……。まだ……。消えてないよ……。』

押さえられた口からそんな声が漏れ出した。

「馬鹿な。おまえは私が消した。この体は私のものだ。」

悪夢は振りほどくように頭を振るった。美雪の髪が暗い夜の帳に踊る。

『ちがうよ……。この体は美雪のもの。誰のものでもない。美雪の』

ものなんだから！」

美雪は抗っていた。

「美雪……。行くぞ……。これが最後だ。」

御剣はマントの裏側から自分の背丈ほどもある巨大な鎌を取り出した。月の光に照らされ、鈍い銀の色を放つそれはいつものそれとは違っていた。

それは、希望の光に包まれていたのだ。

「ぐ……。させるものか……。」

悪夢はそれでも立ち上がり、御剣と向き合う。

二人は対峙した。

「御剣。」

肩に乗っていたミカエルがそつと耳打ちする、

「何だ？」

視線も表情も変えず、御剣は耳を澄ませた。

「奴の心臓をその鎌で貫くのだ。後は私に任せるがいい。」

悪夢は動かない、その中でうごめく美雪の強い意志がその行動を疎外しているのだ。悪夢は歯を食いしばった。

御剣は鎌をまつすぐと構えている。ただねらうは一点。悪夢、そして美雪の胸。

ふと、悪夢の力が抜けた。面を上げた悪夢はの顔には邪悪な笑みが張り付いていた。

「ふふふ……。自由が戻ったぞ！さあ。決着をつけようじゃないか！！」

御剣は眉をひそめた。悪夢の様子がなにやらおかしい。

「ミカエル……。あいつは……。」

「分からぬ。だが、美雪のおかげで少し奴の力がそげ落とされたようだ。これはチャンスなのかもしれぬ。」

「その分こちらが少し有利か……。ミカエル……。少しの間離れていてくれ。」

御剣がそう言うとミカエルは彼の肩から地面に降り立った。

「決着をつけよう・・・。」

御剣は足を踏みしめた。

「のぞむところだ・・・。」

悪夢は腕をかざす。その腕には何も握られてはいない。悪夢には死神のような鎌はない。

「お前を滅ぼして鈴音を・・・そして美雪を助ける。そのために俺はどうなつてもいい。」

御剣は悪夢をきつとにらみつけた。

「???？」

しかし、御剣はその一瞬見てしまった。悪夢が浮かべたその表情を。それは・・・。

「いくぞ!!--」

しかし、彼の思考は悪夢が地面を蹴る音で中断させられる。

「くっ!」

しかし、彼は後ずさりすることなく、鎌を振りかざし、つくと悪夢につっこんでいく。

・・・音とも言えないような不気味な音が世界を震撼させる。

「ふっ・・・。」

悪夢は口で笑っていた。

「お前・・・。」

御剣はうなつた。

「これで私の思惑通りになった。」

悪夢は表情をゆるめると、満足げな笑みを浮かべていた。それは悪夢にはとても似つかわしくもないような穏やかな笑みだった。

「なぜだ?なぜ・・・。」

御剣は今にも砕けそうになる膝を奮い立たせる。心がふるえる。

彼はその震えを打ち払うように歯を食いしばった。

「なぜ・・・なぜ避けなかった?」

御剣の持つ死神の鎌は一直線に伸び、悪夢の心臓に突き刺さっていた。

「いったらどう？私の思惑通りになったと。」

二人がぶつかり合う一瞬、御剣の一瞬見せた躊躇が悪夢の絶好の攻撃の機会になったはずだった。

御剣はあわてて鎌を前にふるった。それは、明らかに前だけを指してふるわれたもので、悪夢であれば避けることは造作でもないことのはずだった。

しかし、悪夢はそのまま自らの勢いを殺すことなく自らその鎌に向かつてつつこんだ。

「お前は……いったい何がしたかったんだ。」

「悪夢というのは、この世界に生じたイレギュラー……。本来は存在してはいけないもの……。私も日頃から自らの存在意義に疑問を持っていたのだ。」

「だが……お前は……。」

悪夢は深いため息をついた。死神の鎌が心臓に突き立てられている今、その先にあるものはひとえに滅びのみ。

「だから私は考えた。私は滅びようと思ったのだ。私は自分の意志で魂の流れに混乱を与えていたのではない。私が存在することだけで、魂に混乱は訪れる。私はいやになった。だから……。」

御剣の手は震えていた、しかし、鎌を放そうとはしない。

「だから……。お前を滅ぼせる俺の手で滅びようと思ったって何か？」

「そうだ……。私を滅ぼせるのはお前だけだからな。」

思えば最近の悪夢はあたかも御剣をねらっているかのそぶりを見せていた。

まるで、自分の存在を彼に知らせるように。しかし、いつも二人はすれ違いばかりしていたのだろうか。いっこうに事態は進展することはなかった。

「このままでは私は美雪の心を壊してしまうことになる。だから私は賭に出たのだ。」

それは、美雪に向かって”次は鈴音に死を与える”とほのめかし

たこと。

どちらにせよ、悪夢の近くにいた鈴音はその運命にあったのだ。そして、美雪は自分の中にある悪夢が彼女に死を与えつつあることを自覚する。

そして、彼女はすべてを御剣に話した。

「そして・・・俺はお前を滅ぼそうと心に決めた。それすらもお前の思惑だったってことか・・・。」

「そういう・・・こと・・・だ・・・。ふふ・・・お前は結局・・・私の手のひらで踊らされていたのだ・・・。これ・・・。これ・・・。ようやく楽になれる・・・。」

悪夢は目を閉じた。

「さあ・・・ミカエルよ・・・そろそろお前も消える時間が来たよ。うだ・・・。私・・・いや、美雪の中で・・・安らかに眠るがいい・・・。私は・・・ようやくこの悪夢から目を覚ますことができる・・・。ふふふ・・・すばらしい・・・心地いい・・・。」

まるで子供が眠りにつくような穏やかな表情を浮かべ悪夢は滅びようとした。いや、悪夢は今こそ解放たれるのだ。彼自身見続けてきた悪夢から・・・。

「私の役目の時だ・・・。」

ミカエルはそうとうと御剣の肩に飛び乗った。

「御剣よ・・・そなたと過ごした毎日は実に充実しておった。」

「ああ、俺も楽しかったよ。」

ミカエルはその肩を通じて彼の持つ鎌へと伝っていった。

「ただ、唯一の心残りはそなた自身が幸せをつかむことの手助けができなかったということだ。」

御剣は唇の端を持ち上げるといたずらっぽい笑みを浮かべた。

「いや。俺は幸せだったぜ・・・いや、俺が幸せをつかむのはこれからだ・・・。鈴音が生きている、そして美雪も生きている。悪夢はこの世界にいない。人として生きていけるのは後5年間だけだが・・・。俺は、幸せになってみせるさ・・・。だから、心配するな。」

俺は・・・大丈夫だから・・・。」

ミカエルは御剣から目をそらせた、

「そうか・・・では安心だ。そなたはもう私がいなくとも生きてゆけるであろう。再びまみえることはなかるうが・・・もし、再びまみえることがあれば。その時だ・・・。」

ミカエルは鎌の突き立てられた美雪の胸にまっすぐと飛び込んでゆく。

「じゃあな。ミカエル。美雪の中でゆつくりと休みな。」

「さらばだ・・・そなたも健やかにあれ。」

一瞬燃えるような光の瞬きが中庭全体に広がった。その光はやがて一点へと集約されてゆく。美雪の胸の一点へと・・・。

御剣は鎌を引き抜いた。

美雪の身体がどさりと地面に崩れ落ちる。

「終わったのか？」

御剣は鎌をマントにしまい込んだ。

「・・・。」

美雪は何も答えない、しかし、その表情は穏やかな生気をたたえていた。

御剣はマントを脱ぎ捨てた。彼は人間に戻る。そして、美雪をゆつくりと抱きかかえた。

『魂が肉体になじむまで時が必要なのだ。当分は目を覚ますことはないだろう・・・。』

ふと、御剣はミカエルの声を聞いたような気がした。

「生きているんならそれでもいいさ・・・。」

御剣は夜空を見上げた。

「星がきれいだな。なあ、美雪・・・。」

「・・・。」

聞こえるのは穏やかな寝息だけ。だが、御剣はそれだけでも十分だった。

「美雪・・・お前はようやく普通の人間になったんだ。早く目覚め

ちまえよ。それから、いろんなことをするんだぞ。鈴音と一緒にさ。俺はもう人としてはお前とは会えないかもしれないが・・・幸せになるんだぞ・・・。今度こそな・・・。」
星の瞬きは月の光と相まって街を優しく包み込む。街の見る夢、それは穏やかな静寂に包まれていた。

エピソード

どれだけの時が経ったのだろうか？

私はひとえに広がる闇の中に漂っていた。

暗い闇。だけど、どこか暖かな雰囲気にも包まれたとても居心地のいい場所だった。おそらく人は生まれる前までずっとこの闇に包まれて育ってきたのだろう。

そして、産み落とされたとき初めて光を知る。

最初から光があるんじゃない。

闇が最初にあつたんだ。

『目覚めの時だよ・・・』

誰かの声がする。私はじっと耳を澄ませていた。

『さあ、目を開けて周りを見てみて・・・。そこには、きっとすばらしい世界が広がっているから・・・。あなたは・・・美雪という一人の人間として目覚めるの・・・』

気がつくと私を包み込む闇に一条の光が差し込んでいた。居心地の良さそうな光。柔らかい暖かさ、そして優しさを含む光が私を照らしていた。

私はその光に向かって泳ぎ出す。やり方は分からないけど、私はただ一心にそれに向かって泳いでいった。

私は光に包まれる。私という一つの意識がしだいに輪郭を帯びてゆく。

それは、私という存在が生まれる瞬間だった。

私は深い喜びに身を震えさせた。

世界はこんなにも暖かだったんだ……。

「……………」

美雪は目を開いた。長い長い夢を見ていたような気がする。

「……………」

次第に戻ってくる身体感覚から、彼女は自分が寝かされていることに気がついた。そして、自分をじっと見つめている幼い少年の目。

それは、彼女の知っている顔だった。

「お兄……ちゃん……？」

彼女は記憶の中の御剣を思い起こす。

しかし、その少年は何も答えない。にっこりと彼女を見つめていた。そして、その笑みが最高潮に達したとき、始めて彼は口を開いた。

そこから紡ぎ出された言葉はまるで詩を朗読しているかのようなゆったりとした流れがあった。

「おはようございます。僕は、裕樹……。初めまして……美雪

おばさん……。」

美雪の新たな世界が幕を開いた……。

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9414e/>

Requiem ~ pray for the souls of the dead ~

2010年10月8日14時47分発行